
COBALT-SERIES
若木未生
星を堕(おと)すもの(後編)
Highschool Alpha Buster
ハイスクール・オーラバスター
集英社

戦いに勝利も敗北もありはしない。あるものはただ犠牲のみ。そしてまた、誰も彼を救えはしない。彼自身がおこなう以外には……。伽羅王の巨大な輝きを支え、戦いを生きるためにのみ、その存在をゆるされる者〈牙〉。彼にとって、いまの伽羅王は、寒いほど遠かった。(どこにいるのですか、伽羅王)。まるで手ごたえのない虚無の先によびかけるように、彼はその孤独感をかみしめていた……。

恋気分いっぱいの夢♥小説誌！

コバルト
Cobalt

1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売
隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。
あらかじめ書店にご予約をおすすめします。
集英社



COBALT-SERIES

ハイスクール・オーラバスター

星を堕(おと)すもの（後編）

若木未生

集英社

目次

星を堕すもの（後編）

序章　霜天……12
第一章　癒されえぬもの……23
第二章　反りゆくもの……70
第三章　よみがえるもの……126
第四章　星を堕すもの……180
終章　残照……257
あとがき……265

それは永く無限に、はてなき螺旋のごとくに繰りかえされる戦いであった。

自らの内に〈神〉の識格を宿し、「斎伽」の血統を保つ赤子へ転生することにより世に顕れる、超越者――〈空の者〉。

人心にうまれる闇に憑き、鬼とも妖怪とも呼ばれながら歴史の影に潜んできた、魔性の存在――〈妖の者〉。

そして古に、〈天〉からさだめられし因縁。人を喰らうのが〈妖〉であれば、〈妖〉を喰らうのは〈空〉であると。

空者方軍勢による妖者討伐のいきおいはすさまじく、妖者方の衰退は、時を経るうちに必至のことと思われた。

ひとりの〈空の者〉、九那妃が敵陣へと翻り、妖者総帥の座に君臨するまでは――。

前の大戦より九百年の時をこえ、現代に唯一、転生を果たした空者方総帥・伽羅王は妖者方に九那妃復活の兆しあるに対し、再びの

決戦にそなえ五名の能力者――〈術者〉を自らの陣として掌中におさめた。

妖者方、九那妃を奉じるは雷将勝呂、炎将刹司、幻将皓の三忌将。

もはや純然たる斎伽の血は絶えるに等しく、あらたな同朋の転生するを待つもかなわぬ伽羅王は、ひとたび九那妃との相互封印をなすことにて大戦そのものを喪わせるかと見えたが、彼の擁する切り札「術力中和者」により封印は解かれ、両軍勢の対立はふりだしへと帰した。

斎伽の血脈を護る一族の若き長にして、空者伽羅王の莫大なる神力を身に宿す青年、斎伽忍に課せられた命題は重い。

しかし彼と、その私属の陣を構成する五名の術者たちの目的はすでに揺るがず、あきらかなものとなっている。

今生こその、偽りなき、大戦の終焉である。

人物紹介



崎谷亮介（さきやりょうすけ）

唯一の中和能力者で術者側の切り札的存在だが、いまだにその力はコントロールが効かない。内向的でいささか優柔不断な性格も、諒たちとの出会いを経て、少しずつ強さを身につけてきている。「制裁」の二文字とともに襲われたのが、今回の事件のはじまりとなる。



水沢諒（みずさわりょう）

亮介の親友。忍の命令で妖者退治のため全国の高校を渡り歩く炎の転校生。動の術力の持ち主で、光剣・朱雀（すざく）を用いる。自分のせいで妹以外の家族を失うというつらい過去を持つが、いつも明るい前向きの姿勢を忘れない。忍から託された鍵の意味を追いかけて…。

登場人物紹介

和泉希沙良

動の術者で、力を集中させ手刀を使う。短気でわがままだが、正直な性格。空の者であった母の命と引き換えに生まれてきたため、家族と折り合いが悪く、その分従兄弟の十九郎母子に大事にされている。何者かに〈呪〉をかけられ、十九郎救出もままならなくなるが…。



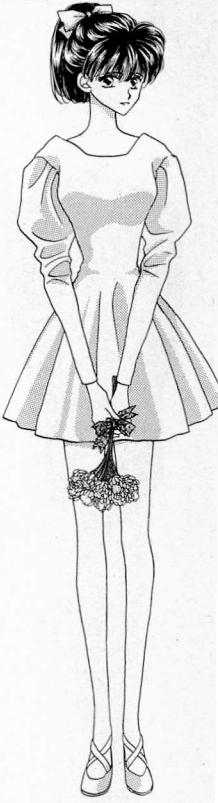
里見十九郎

希沙良の従兄弟でフォロー役。静の術者で感覚が鋭く、結果防御を得意とする。沈着冷静な参謀型で人望も厚く、術者の中のリーダー的存在だが、自分に厳しすぎるところがあり、案外不器用な面を持つ。道者・咸月陣の妹・呉葉に拉致され、依然生死不明のまま…。



人物紹介

亮介の彼女。術者ではないが、事情に通じており、時に落ち込む亮介を励ます気丈な美少女。普通の学校生活から離れていく亮介の身を案じている。諒とは亮介をはさんで好敵手の間柄。



神原亜衣（かんばらあい）



七瀬冴子（ななせさえこ）

強気が専売特許の美少女で、回復系の能力を持つ術者。忍の実の妹で、本家ではより濃い血を残すため婚約者として扱われている。忍を心から敬愛しているが、なぜか諒のゆく先々に出没することが多い。本家の人間として、道者と協力して十九郎の行方を追うが…。

登場紹



牙

亮介たちが軽井沢で出会った男。実は空の者・伽羅王の側近〈使〉である。伽羅王の携える天冥の剣〈羅王〉や銀杖〈爪牙〉にもなるなど、姿は変幻自在で、忍の命令には絶対服従。亮介に十九郎の行方不明を告げた後、忍の命令で、彩のいる広島へ向かう。



斎伽 忍

術者一族の若き総帥で、伽羅王が転生した現世ただひとりの空の者。〈天冥の剣〉事件で、九那妃を封じるため一度は死を選ぶが、術者たちの働きにより復活する。十九郎拉致事件に対しては、術者たちにまかせて直接行動をおこそうとせず、雷将勝呂との会見に臨む。

イラスト／杜　真琴

星を堕(おと)すもの（後編）

序章　霜天

寒い。
頬をかすめ肌にふれるのは氷の結晶。棘のような雪をまじえた、嵐。
（伽羅王）
胸につぶやいて、ひえきった岩室のなかへと牙は足を踏みいれてゆく。
足元に影をおとすことのない、身内に血流をやどすことのない、空者の神術により形成された〈使〉の皮膚にすら凍てつく、この甚烈な寒気は――。
すなわち伽羅王のかなしみ。
深く、癒されえぬ絶望。喪失の嘆き。
（伽羅王）
（お傍へと）
くらく、はてなき地下空洞の先に彼は自らを閉ざしている。

呼びかける〈使〉の声に応じる気配もなく。
ひとこと……かたわらへ招かれさえするならば、一瞬で飛び寄せることに、なんら躊躇う心ももたぬのに。
それほどに今の伽羅王は、とおく。
独り。
「竜岐王……」
厚く堅固に道をとざす一枚岩の手前、翳りの内にたたずむ人影へ牙は目を向ける。
空者方最猛の勇神と呼ばれ、いかなる苦境にあれど怖じけず、つねにわかわかしい闘気にあふれた竜岐王でさえ。
いまだ戦装束をときもせず、沈鬱な静寂に支配されて立ちつくす。
「きさまか」
鈍色の飾り布をいらだたしげにその長い髪より剝ぎさりながら、竜岐王はつきはなすような物言いとともに牙を見返った。
「だれにであろうと、憐まれたくはないものだ」
「……竜岐王」
己がそれほど優しい者でないことも、瞳にうつるものすべてに恨みをぶつけねばやりきれぬ竜岐王の心をも、牙はよく知っている。

「……ゆるせ。今のおれには赤子よりも分別が足らぬのだ」
「竜岐王におかれても、白狼王とはたいへん懇意になされていたものと心得ております」
ひかえめに、媚びのない端的な調子で口をひらいた牙を、竜岐王は痛みを含んだまなざしで眺めやる。そのまっすぐな——純度のたかい双眸から己の目を逃し、いわずもがなであると悟りながら牙はそっと言い足してしまう。
「そして伽羅王もまた」
「きさまも近づけぬのか、伽羅王には」
「わたくしは招かれておりません」
「さにあらん……と言うは容易い、が」
頑として彼らの前途を阻む巨石に一方の掌を触れ、くるしげに竜岐王は声をとぎらせた。
空者方大総帥、伽羅王ともあろうものが。
半身ともいうべき〈使〉すら遠ざけ、闇の底へ引き籠る、その事実は。
あまりにも。
「さきほどまで月篠がここでやはり伽羅王に呼びかけていたのだ。しかしきさまと同じく、決して奥へ招かれはしなかった」
「月篠殿が」
今、同朋のなかでもっともこころやすく伽羅王と通じる彼女であっても、彼の王の憂いをと

りのぞくことはかなわぬのか。

（現在）

あらためて状況をふりかえり、牙は眩暈に似た無力感に襲われる。

（すでに空者も半数をのこすのみ）

斎伽の血脈をつなぎ再びの光臨を待ちうけても、真に封じられた存在は、もはや二度ととりもどせない。

空の者だけではない。軍勢を支える、多くの優秀な術者たちも……。

そうだ、このたびの戦では、竜岐王の〈使〉であった「朱」も身の大半を削がれたのだった。末期の力で竜岐王のため剣に変化したきり、姿を自在とする〈使〉そのものの生命は完全にうしなわれたのだ。竜岐王のかなしみは一点へ向かうものではなく幾重にも層をなすものであろう。とおざかる、あらゆる生命を嘆くものであろう。

戦いに勝利も敗北もありはしない。

あるものは犠牲だけだ。

「おれもいつ火煉の獄へおちるやもしれぬ」

竜岐王の自嘲めいたひとことに牙は面をあげる。

その言を否定するためではない。

戦士として、まさにかれと同じ思いを、得ていたため。

「そうなったとしていまさら滅びを恐れはしない。おれはな。だが伽羅王を離れゆけはせぬ。なによりもおれには、このような」

隔ての岩に触れた指を握り、一度我慢ならぬようすでその拳を打ち当ててから、竜岐王は熱をおびた声をしぼりだす。

「このような伽羅王の姿は耐えられぬ」

「伽羅王は、つよい御方にてあらせられる」

低く、無表情を保ちつつ牙はそう応じた。

いかなる結果が出ようと、伽羅王が大戦より剣をひくことはありえまい。

これより先、かれの愛するなにものがうしなわれようと。たとえ、いずれ最後に伽羅王ただひとりが残されたとしてもそれでも。

天のさだめるところによりて。

「つよいか。伽羅王は」

竜岐王がつぶやく。独白のようでもあり、問いかけのようでもあった。

「……であろうな。つよくなければ白狼王を斃せはしなかったか」

「竜岐王」

咎めの色が牙の呼びかけには含まれる。竜岐王は案じるなというように首を横に振った。

「皮肉に聴かれてはこまる……。しかし白狼王はたしかに伽羅王のつよさを知りたかったのや

もしれぬ。あれほど仁智にすぐれた白狼王が、いたずらに、愚かしく道を誤ったわけはない。であったとすれば、やつの死にざまも幸いなものであったと俺は思うのだ」

「……」

牙には、何も、それに対して向けられる言葉がない。

元来、さいわいとは何であろうか。すでにそれさえも牙にはわからないのだ。

伽羅王の幸いとは。

そして滅びのみちを選んだ白狼王や——いまだ最大の敵として妖者方に君臨する九那妃の、幸いとは。

「では竜岐王、あなたの幸いは何処にあるとお考えなのですか」

「自明のことだ、知らぬのか？　おれの幸いは伽羅王とともにある」

力なく、竜岐王は岩肌より拳をおろし、わずかに笑ったかに見えた。それであってもこの隔たりを打ち砕けはせぬことに、淋しさを覚えていたのか……。

（かれも喪われる）

ふと、心中にすべりこんだ実感に牙は慄然として立ちすくんだ。

伽羅王？

（次の戦で竜岐王もまた）

それは冷酷な、はっきりと醍めた認識。

伽羅王はすでに知っているのだ。

ああ、と声をあげてしまいたいほどの狂おしい情念が身体を占める。伽羅王よ。伽羅王よ、我々は、いや貴方は……いつになれば解き放たれるものか。この責め苦のごとき運命の枷から、いつになれば！

どのような生命にも終末はある。避けがたく別離はある。ひとは死に、ものは滅びるのだ、必ず。——必ず。

その必然をただ知りえたとて、何の救いがあるものか。

（伽羅王）

手ごたえのない、虚無の先に呼びかけているようだ。祈る者の孤独をかみしめながら牙は瞼を閉ざす。

ひとりになってしまってはいけない。

あきらめてしまってはいけない。どうか。

（どこにいるのですか、伽羅王）

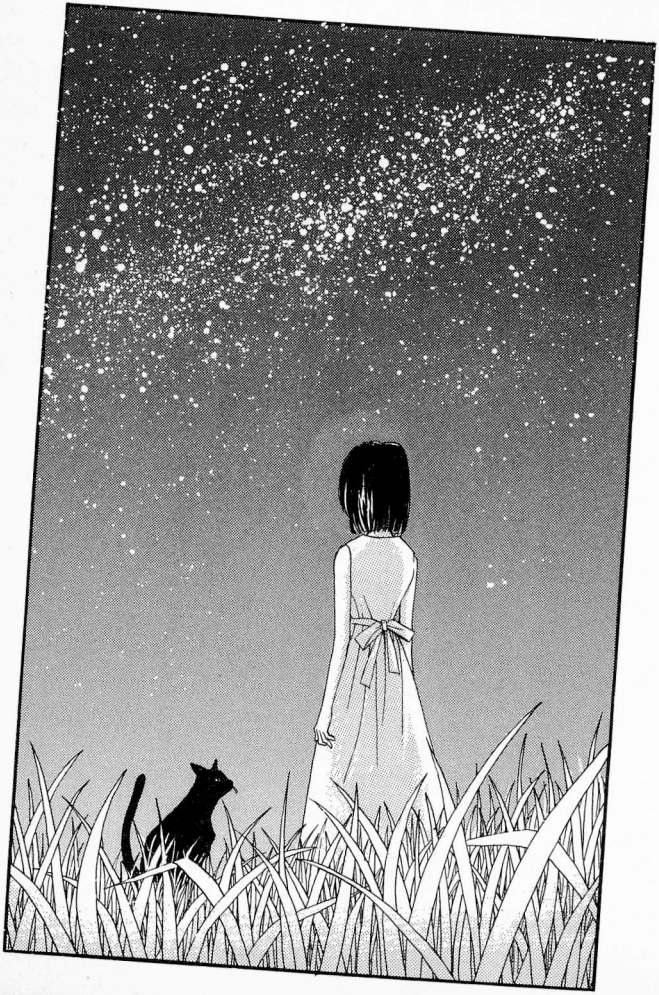
落下してゆく記憶……。

なにもかもが克明に刻まれている。だがその殆どは再生されることなく眠らされている。ふ

りむくには——おもいかえすには、あまりに永く、膨大で、そしていとおしい。
幾人もの「伽羅王」を牙は歴史のうちに迎えいれ、そのすべてを愛した。かれのうみだす狂気も闇も憎しみも。
だから告げたのだ。
（犠牲は免れないであろうと……）
斎伽忍のせいではなく、それは時の輪がつくりだす必然なのだと。
殊に、この大戦に、今度こそ終止符をうつというのなら。
「かなしいことが」
ひどく近くに、囁きかける声がする。
「たくさん……」
急速に——ひらける、視界。

黒い猫がその黄玉の瞳をゆらめかせて、つと傍らの少女の横顔をうかがう。
両者をつつむものは、しずかな月光。
人影のない、小さな丘の上。日中の熱をかすかに残した風がわたり、草のふれあう響きだけが聞こえてくる。

ふたりのつながりを妨げる雑音は、ここにはない。
「悲しいことが？」
黒猫が低く尋ねる。
「あなたに？」
「……牙に」
あったのでしょう、と言外に彼女が重ねた。
沢山。
（いいえ）
（わたくしのものではないのです）
かなしみを味わうようにはつくられていない。戦いを生きるためにのみ存在をゆるされている。伽羅王の巨大な輝きを支え、ひそかにまもる者として。際限なき殺戮の闇をひきうける者として。
（それはみな、あのお方の得たもの）
「でも」
少女はゆっくりと首をめぐらせて、星を仰ぐ。
その双眸に潤むかがやきは、誰のためのものなのか。
「気持ちは、ひとりのものじゃないから」



「……」

ええ、と牙は奥深い同意とともにつぶやいた。

（そうして、ひろがってゆく）

（つたわり、のこされるもの）

彼を愛する、万物の心。とぎれることなく彼の軌跡をたどる、いくつもの魂。

だが誰も彼を救えはしない。彼自身のおこなうこと以外には。

そして斎伽忍はそれを断行しようとしているのだ。……すすみだすために必要なことを。

それがひとつの、重大な別離となろうとも。

「つよく在らねばならない。あのお方は」

さらにつよく。

勝利者でありつづけねばならない。

「そのために牙がいる」

ぽつりと——彩が答え、わずかな間をおいてつづけた。

「牙のためには、わたしがいる。ほんとうは、誰にも……そんなふうに……」

第一章　癒されえぬもの

1

とても静かだった。
激しい雨にすべて洗い流されてしまったような、なにもかも手元から零れさったような、そんな静けさだった。
ああ、そうなのだ……とただ遠くから客観的に自分の心をながめて希沙良は納得する。
ゼロにかえっていく。
（何が）
何が——大切だったのか。
それだけ憶えている。
感情でなく、想念でもなく、まるで最初からプログラムされたもののようだ。固定された、刷りこまれた条件づけのようだ。
緊張のせいでかたまったきりの、感覚のない握り拳を希沙良はゆっくりとひらいてみる。

そこに残った涙さえ今は自分から隔たっている。

「……ばかみたいだな」

「え？」

亮介が瞳を見開く。そちらをふりむかずに希沙良は乾いた声でくりかえす。

「ばかみたいだろ」

「……誰が？」

「……」

誰が？　そんなことにも答えられない自分になってしまっている。額の奥の、重苦しい痛み。きっとこの全身の苦しさのせいだ……なにも考えられなくなっているのは。

（肉体の不健康なときには、思索の出口も）

思いだしたくもない斎伽忍の言いようが、皮肉に甦る。あの化けもの。彼こそが間違いなく、なにもかもの元凶なのに。

「希沙良」

呼びかける、寂しい声に希沙良は顔をあげた。

すっかり太陽のなごりも消えた、暗い空の下。屋上のかたすみに設置された照明が……うきあがらせる影。里見夏江の。

（違う）

求める姿ではない、と彼女に対してすら思ってしまう自分を希沙良は漠然とみつめている。
欲しいものはただひとつきり。
ひとりきり。
「あのさ……」
理不尽な衝動がこみあげて希沙良は半ば笑うようにして口をひらく。屋上のコンクリートから痛む膝をもちあげながら。力なくゆらめく視界を滑稽に感じながら。
「夏江さんにさ……訊きたいことがあったんだ……他人のものを奪るのってどんな感じ？」
「……」
希沙良を追って立ちあがった亮介が、こわばった表情でその言葉に見返った。
「なあ教えてくれよ……！　他人と結婚してる男をさ……平気で自分のものにして子供までつくれるって、どういう神経だったのかをさ……！　うらぎられるがわの気持ちはどうでもいいのかよ、それともそんなもの台なしにして気持ちがよかったのか」
「希沙良……！」
亮介の手がつよく希沙良の肩をつかんで制止させようとした。亮介が何をやめさせようとしたのかは希沙良自身も知っていた気がする。だが。
「自分だけよけりゃそれでいいのかよ!!」
抑える力をふりはらって希沙良は声を荒らげている。

「信じられなくなっちまうがわはどうすりゃいんだよ、どうしたら!!　泣いてあきらめたらおしまいなのかよ、それで自業自得で終わりなのかよ、だれも悪くないのかよ、そんなわけねえだろ!!　そんなわけがっ……!!」

そんなわけが。

あるはずはない。

罪を負うものがどこかにいる。必ず誰かが。

「ごめんなさい」

ひとこと、夏江がそうつぶやいた。

「ごめんなさい、希沙良」

「……！」

はっと息をとめて希沙良はまばたきをした。

空白の世界から一瞬、実感のなかへと浮きあがった心地で。

「畜生……」

うつろな眼差しをさまよわせ、どこへも行き場がないように希沙良は両眼を片手で覆いかくす。どんな言葉もみつからずに亮介はその姿を見守っていることしかできない。

「なに言ってんだ俺は……」

「希沙良。あのひとに約束したわね？　自分の力でもちこたえられるって」

ふと、低くおちついた調子で夏江が口をひらいた。
「言ったわね？　あなたが十九郎をたすけるって」
しばらくの沈黙をおいて、それから希沙良がじわりと視線を動かした。
縋る手をきりはなされた者の、絶望を含んで。
夏江もまた決して希沙良に救いを与えはしないのだ。まっすぐにそれをつきつける彼女の潔さに……亮介はひとり泣きたくなる。
少なくとも自分には無理だ。
「……約束……？」
喉の奥で希沙良はかすかに笑う。
そして笑いだす。本気で。
あてどなく、空虚に。
「!!」
とぎすまされた衝撃が、不意に足元のコンクリートを砕いた。
右手首に宿した鋭い銀光をふりはらい、その仕草で何かを捨て去って——ひややかに希沙良は回答を吐きだす。
「そんなもの関係ない」

道者四人衆のうちのひとり不破武人が同僚の明石川耕宇をひきつれて自由ケ丘の里見家へと逆戻りしてきたのは、実際に連絡がとられてからの所用時間をかんがえると驚異的な早さであったといえた。

「失礼する」

鍵がかかっていなかったのを良いことに武人は乱暴に扉をひらき、七〇三号室の奥へと呼びかける。法にてらせば免許停止まちがいなしの運転ぶりといい、昔馴染みの人物がことごとく予想外に型破りな手段に出ているのを、明石川のほうは少なからず気圧された面持ちで、背後からうかがっている。

「不破殿？」

かろうじて水沢諒との厄介な電話が終わっていたことに胸をなでおろしつつ——あの内容を厄介だと思うのは当事者だけなのだろうが——ふたりを迎えたのは冴子だった。というより、ここには冴子しかのこされていなかったのだ。

「おそろしく早い対応ね、どこをどう走ったら……」

「遠野は」

冴子の発言をさえぎるのに抵抗を隠せず一度ためらってから、そのうえで武人は決然と問い

ただす。
「まだここにおりますか」
「私でしたら、こちらに」
室内ではなく、武人たちの傍らより……。
明かりの乏しい階段の出口に、遠野一真はその姿をあらわしたところだった。
「申し訳ありませぬ、持ち場を……」
詫びの言葉を彼が言い終えるより早く。
明石川耕宇は今度こそ、十数年来のつきあいである不破武人のとった行動に本心から驚愕せざるをえなかった。
目前にあらわれた一真のことを、渾身の力で武人は殴りとばし、なお激情にふるえる声で怒鳴りつけたのだ。
「だからやめろといったのだ、われらがどれほど惨めなものか思い知るだけだ」
「――――」
何の心構えもない状態で一真は危うく足元に膝をつきかけ、きつく唇をかみしめたまま通路の壁に手をのばして己を支えた。
「……すみません」
「こうしてここにいる俺の惨めさがおまえにわかるか、一真？　わかるまい。俺にも同じだ、

おまえの心などは知らぬ!!　俺は誰の肩も持ちはしない、正義心で動くのでもない、俺は俺をおとしめられて怒るのだ!!　叶わぬものは、叶わぬと……」

衝撃の消えない拳をじりじりとおろしながら、武人はとぎれがちな声を絞りだす。

「失った力はかえらぬと……優れた者には敗れる者があると……そんなことを掘り出してきさまは嬉しいのか、満足か!?　俺は……俺は惨めになるだけだ、しょせんは道者と呼ばれるものなど初めからそこへも至らぬ連中から見ればみな期待の領域より堕ちたものだ、去勢されたも同じものだ、だれにでもそう思われることだ、だからこそ自ら誇りをおとしめる真似はするなと俺は思ってきた。――きさまにはその誇りより勝るものがあったのか」

「不破」

耐えきれずに明石川が口をはさませた。

「そのあたりでやめておかないか。いくらなんでも言いすぎだ……俺の気分も悪くなるぞ」

「いえ……」

その明石川に対して、ゆっくりと一真は痺れた唇を動かした。

「いいえ……私がおかしたことです……すべて私の増長です……」

自分自身の誇りよりもまさるものが、あったのかと問われるなら。

あったのだ――と、一真は知っている。

みにくい企みのゆきつく果てに。

「期待をしました。……ええ、僕の崇める……僕を打ち負かす……誰も、手を、届かせてはならない人物に」

一真は視線の方角を転じ、玄関口に立つ冴子のことをふりかえる。

「ご存知でしょう。僕は、そういう人間です」

「……期待にこたえる責任は確かにあると思うわ。あなたには期待する自由があるとも思うわ」

冷静な、さめた態度で冴子は彼に返答する。

「でもあなたの罪人気取りの後始末を十九郎君につけさせるのだけは筋違いよ。……今から言っとくわ。忘れないで」

現在は生死すらわからぬ里見十九郎の今後について、あくまでまっすぐな発言をできるのが冴子の……七瀬冴子という特権者の、正しさだろう。一真は苦々しく彼女から目をそらし、うなずく。

「はい」

「……お見苦しいところを、お目にかけた」

冴子の言葉をひとつの区切りとしたように、本来の彼らしさのレベルまで感情をおちつけた武人が、きまじめに彼女へ告げた。

「皐月からの次の連絡があるまで、ここで待機してよろしいか」

「お茶ぐらい飲んでいただきたいけど」
「いえ。ここで」
あらゆるなれあいを固辞して武人は扉の横に立ちつくす。それもまた自然なこととして、明石川も異は唱えなかった。
「いつでもご自由に」
溜め息をつき、それだけ言い置いて冴子はひきさがる。
冴子が半開きにしていった扉を横目で眺めやり、明石川が額の汗をやれやれと拭いさった。
「不破に感謝するのだな」
壁際に立つ一真に、低く声を投げる。
「これが咸月であったら貴様を殴るくらいではすまぬ」
「はい」
伏せた瞳はあげずに一真がぽつりと答えた。
真っ先に武人が処罰をくだしてしまった以上、一真への糾弾はすでになされたことになるのだ。一応、かたちのうえでは。
この件での、楷というファクターの介在を告げられずにいたことで咸月陣の被った名誉的損害が甚大であるのは想像にかたくない。事前に一真が報告しておけば隠しおおせたかもしれない咸月家の恥を、こうして、あからさまに術者たちにまで晒す結果となったのだから。

「突き指をしたようだ」
　右手の中指に視線を落としながら武人は無表情につぶやく。あきれた顔つきで明石川がその青く腫れあがった指をのぞきこんだ。
「あれぐらいでわざわざ怪我ができるとは、律儀な男だな」
「めったに人など殴りはしないのでな」
「一度も、の間違いではないのか。冴子殿に治していただいたらどうだ」
「冗談ではない。恰好がつかなすぎる」
　おそれおおい、とは言わずに武人は右の拳を左手でつつみこんで眉をしかめる。
「型通りの武道は学んだつもりなのだが。いざとなると殴り方も知らないとは、我ながら、おもしろみのない人間だ」
「申し訳ありませんでした」
　再び、一真が謝罪の言葉を口にした。
　こころないと思いつつも武人は沈黙し、それに応じはしなかった。
　ゆるされることを望まぬ相手に、気休めだけを与えて何になるものか……。
　上のほうから、階段を下ってくる足音がする。まず明石川がふりかえり、そしてやや物憂げに一真がそれに従った。
（和泉希沙良？・）

武人の予測ははずれた。七階にいる彼らのもとにたどりついたのは、繊細そうな容貌と小柄なからだつきとで決して戦いに優れるようには見えないが、一方で、意志のつよい……尋常ならざる厳しさを芯にもった人物であるようだった。少なくとも、武人の観察眼が読みとるかぎりにおいて。

彼の背後には里見夏江がつづいてくる。この少年もまた、本家とは縁のないところで里見十九郎たちが発掘した術者ということか。

「里見殿……このたびは」

一真の独断についてロをひらきかけ、武人は言葉に迷う。里見夏江という相手は、対等に話をはこぶことの困難な女性なのだ。いつでも。

「お互いの不幸をつついてもしかたのないことだわ。こんなところではね」

武人の先をひきうけて夏江は低い声でそう答えると、そこに立つ少年の肩に手を添え、彼らにその名を紹介した。

「ひきあわせが遅れたけれど、こちらが崎谷亮介くん。伽羅王の切り札よ」

「――――」

キン、と頭痛のするような緊張感に――自分をめざして走るきつい思念に、亮介は思わず顔をしかめた。痛い、ほどの、意識の集中。

斎伽忍に有益なもの、彼に優遇されるものであるというだけで……。

（こんなに）

それを亮介に知らしめるために夏江はわざと露骨な言い方をしたのだろう。

「よろしくお願いする」

充分な自制心をはたらかせた結果として、不破武人がひとこと、代表の弁を述べる。

自分よりずっと年長のはずの、自分などより明晰な知識と経験をもっているのがわかる、彼ら〈道者〉たちの心にどこかへりくだるものを感じて亮介は愕然とした。

（俺が何をしたわけでもない）

名前、だ。

伽羅王の名前にだけ。

そしてへりくだる強さと同等に、重苦しく存在する忌避の念。

やめてしまえばいい。そんなふうに人の気持ちに触れることなど。何も見なかったふりをしてしまえばいいのだと思う。

だが、そうやって逃避したくなる現実そのものが、すでに悲しいのだ。

亮介の目が遠野一真の視線をうけとめる。

ふるえるような憤りが、亮介の喉元までこみあげた。とげとげしい、ささくれだった気持ちだ——よくないものだ。

やさしくない。

ただの、捌け口だ。

（言うな!!）

自分に命じる声はむなしく消えた。息を吸いこみ、亮介は凍えた感情をそのまま言葉にかえていた。

「俺が……」

夏江の掌の下から、歩みだしながら。

「忍さんにとって切り札なら……俺の姿も、あなたの目に入れてもらえるんですか」

「……」

それが、一真の、はっきりと瞳を見開いた瞬間だった。無防備に、たしかに。

（傷つけた）

どっと亮介の内側で熱いものが逆流した。

人の心を容赦せずつらぬく真似をした。わざと。わかっていて！

（こんなやりかたで）

足早に亮介は遠野一真のかたわらを通りぬけ、扉の奥へと踏みこんだ。最低な意趣返しをしただけだ……希沙良の誇りのためでも斎伽忍の名誉のためでもない、自分の気晴らしをしただけだ!!

「……違う」

居間のダイニングセットから立ちあがる冴子に、そうつぶやいて頭を振るのが精一杯だった。

「違うんだ、こんなやりかたをして、いいはずがないんだっ……」

けれど一度口にしてしまった言葉は。

いくら悔やんでも、とりもどせはしないのだ……。

「だめだったの？」

冴子が問いかける。

希沙良のことを。

「わからない」

苦い思いはふりきるようにしながら、亮介は正直に答える。

あてはずれな希望だけを、信じて、告げられはしなかった。

「まだ、わからない」

2

好きなだけ改造したうえに真っ赤に塗られたＦＺＲが、勢いよく、大きな弧をえがいて車道を逆戻りした。真っ白いライトとカウルに貼りつけた猫マークの蛍光ステッカーが一瞬で希沙

良の間近に迫り、停止する。

ひとけのない夜道に灯る、電話ボックスの明かりの足元に、背中を預けてうずくまっている自分に希沙良はそのときふっと気づく。記憶には断片的な跳躍が生じている。どうやってここにきて、しかもまちがえずにダイヤルをしたのだろう。

「何だようっ……」

フルフェイスのヘルメットを放りだすように外して、安曇陽子が声をはりあげた。

「なにしてんだよう、てめえはっ」

背の低い彼女がバイクからとびおりてくるなり本気で怒鳴りつけるのを、なにか哲学的な映画をみているような気分で希沙良は眺める。

「んなカオで人のこと待ってんじゃねーよ、何ぐしゃぐしゃになってんだよ、和泉ちょっとはつよくなったんだろ、がんばれよばか、がんばれよ!!」

この女は、顔を合わせたとたんに何を言いだしているのかと希沙良は思う。

説明だとか、理解だとか、そういう手順をとびこえて決めつけている。

「わからねんだよ……」

ポケットにみつかったコインで電話をかける相手は誰でもよかった。

誰でもいいから、教えてほしかった。

何が悪いのか。何が敵なのか。

それさえわかれば、どんなものでも切り裂ける。
「何がわかんないんだよ和泉、わかんないで困るのかよ。ほんとに困るのかよ」
いらだったように陽子はその場で足踏みをする。
「そんな頭壊れたみたいなカオしてさあ、そんなんしてまで知りたいことかよ、そうしてなきゃダメなのかよ、あたし自分で情けなくなるんだよう和泉のそゆとこがさああっ！」
「……じゃなきゃダメなんだよ、ダメなんだよ、ダメなんだよ!!」
アスファルトに叩きつけた拳が意外な痛みで、希沙良の意識をわずかに醒まさせる。
「俺が……立てるようになってねえと……ダメなんだよ……」
「なんでだよ、キツいんだったらやめちゃえよ、なんか知らねえよ、あたし別に知らねえけど和泉ずたぼろじゃんかよ、もっとラクになっちまえばいいじゃんかようっ」
楽に。
どんなふうに？
（なれない）
全部捨てても楽にはなれない。逃げのびられはしない。自分のなかのこの激情、この不条理からは。
「だから俺はっ……こんなことで!!　潰れてるわけにいかねえんだよ!!　こんなことで!!」
そうだ。

目的がある。
はたさなければならない仕事がある。
この身体を使わなければならない役目がある。夜の片隅に、ひとりでうずくまっている場合ではなく……。立ちあがらなければならない理由は、確かにあったのだ。それは？
（誰の）
思いおこす瞬間にどっとまとわりつく鬱陶しさが息をつまらせる。
「潰れちゃえよ。潰れてみりゃいんだよ、和泉はさ……」
ぽつんと陽子が言った。
普段よりずっと、おとなびた物言いで。
「水のなかでだって、しがみつきゃ溺れるじゃんよ……。手え離せばどうってことなかったりするじゃんか。あんたがやってんの、そういうふうにしか見えないよ。いっつも可哀想に見えんだよ……」
「……」
頬をゆがめて希沙良は小さく笑う。笑ったつもりだった。
「……可哀想かよ。俺」
「そうだよ。理由とか関係ねえよ、あんたって人間があわれなやつなんだよ」
「じゃあどうすりゃいんだよ……教えろよ」

「好きにしろよ。じゃなかったら、いちばん簡単にできることをやれよ。それが物凄く悪いことだったら誰かが止めるよ。あたしだってそうするよ、和泉の近くにいたらさ」

ぼうっと白く拡散する、電話ボックスから発される光のなかに、怒ったような顔つきで陽子はまっすぐに立っている。

「誰もいないのかよ。誰も和泉の近くにいないんだったらあたしが貰ってくよ。今すぐ一緒にどっかつれてってやるよ。どうなんだよ」

「……」

幼そうな外見といつもの軽口に不似合いな――辛辣な芯のつよさが、彼女にもある。きやすい話の通じる相手、だけで終わらせていられない。

女だから。

正直に、欲しいものに手をのばす。

（つれていくよ）

瞬間、聴覚を奪って響いた想像の声に、希沙良は自分の、絶望的な状況を感じとった。

いいよ……つれていくよ。希沙良の思いどおりに。どこへ？

「あいつが……」

希沙良の、そのつぶやきに陽子も鋭いまなざしを上げて沈黙した。

「死んだら、俺にはわかる。だからあいつは死んでない。生きて、どこかにいるんだったら

……俺が救(すく)けにいく」

簡単な、原則のようなもの。

だれかとの約束など関係なく、果たされるもの、だ。

一刻をあらそって。

「俺が行くことに、なってる」

けだるさに満ちた身体を起こして、立ちあがっても、そこから崩れさる脆(もろ)さを体験することにはならなかった。先へ進めと魂(たましい)が命じるのだ……。これが自分なのだとただ思い知らされるのだ。

「わかった」

厳しく見守る瞳に、ゆらぐ反射光を浮かべながら陽子が言った。

「んじゃヒマになったらまた遊ぼうよ。ワリカンで大江戸くいだおれツアーしようぜ。な」

「……だな」

うなずいて希沙良は彼女の涙から目をそらした。

「またな」

「……約束だよ和泉、約束だからな!!」

ヘルメットをかぶりかけた陽子が、我慢できずに声をあげて泣きだす。失恋かよ畜生、とひとりごちて一気に改造ＦＺＲにとびのり、うえええんと泣きながらアクセルをひらいて発進す

る。

（だから……）

最初から男同士ならよかったのだ。

そんな言い訳が自分の勝手なのはわかっている。遠くなるテイルランプに、またな、ともう一度よびかけて、そして。

希沙良は歩きはじめる。元の場所へ……あの部屋へ。

3

実弟・楷の足取りを調査していた咸月陣からの回答は、電話連絡ではなく彼自身の登場によってもたらされた。

颯爽としたスーツ姿にしっかりと髪を整え、微塵の乱れもうかがわせずに里見家へと現れたありさまは、さすがに道者四人衆をとりまとめる筆頭の立場をこころえているというべきだった。あるいは咸月家の実権を得るものならではの、プライドか。

「横浜だ」

七階に到着したエレベーターを踏みだすと同時に、里見家の前で待機していた三人へと、告げる。

「うごけるか」
視線を向けられた不破武人が、しずかに首肯する。
「何時であろうと」
「明石川と組んで横浜へまわってもらう。神奈川方面の勢力図は頭にはいっているか」
「一応は」
「ひととおりの資料をそろえた。私の話す間に確認しろ」
ばさりと一冊のファイルが無造作につきつけられる。武人はそれをうけとり、先に見ておけと明石川に放りやる。横浜近辺はもとより咸月家の息のかかった企業や施設が多く、七瀬傍流の一族のなかでの対抗勢力は弱い地域だ。伽羅王の親衛隊として行動するうえで、利権絡みの親族どもに足をすくわれる心配は、それほどせずにすむはずである。
「なにゆえ横浜に」
「やつらを港まで乗せた運転手をおさえた。あとは中で冴子殿にも説明する」
冷静に答えてドアに手をのばすと、咸月はそこでふと声を落とし、間近に立つ明石川に向けて囁きかけた。
「首謀は楷ではない。呉葉だ」
「何――？」
明石川耕宇の、直情果敢な顔つきが寸時にして凍りついた。

「これまでの調べではそうとしか考えられぬ。運転手は、楷が港にのこり呉葉が里見をつれて船に乗ったと話している。楷はひとりでことを起こせる者ではない。現に、呉葉の姿も今朝から見当たらぬという」

「まさか――」

思考の道を失ったように茫然と立ちつくす明石川の肩を横から摑み、

「船というと？」

同様に抑えた声で武人が咸月に問いただす。

「呉葉の名義で持たせたクルーザーだ。海上に出られては、そう容易に跡もたどれまい。出航したのは夕刻らしい。ずいぶんと、余計な時間をむこうに与えた」

客観性に徹した咸月の言葉を聞き、その傍らで遠野一真がかすかに眉をひそめた。余計な時をつくるのに加担した、張本人がだれであるかは明白だ。

咸月呉葉といえば、明石川の、一族了解のうえでの婚約者ということになる……。

「いや――呉葉がそのような企みを首謀したわけはない、何かに利用されているのだ、なにごとか良くない流れに巻きこまれているに違いない！」

首を振り、力をこめて明石川がそう言いはなった。根拠があってのことではない。あいまいに同意するのもここでは憚られて、武人は咸月の反応をうかがった。

「問題は、真実そうであるかどうかではない。どう見えるかなのだ」

おちつきはらった咸月のたたずまいに、いらだたしい気分が仄見えたのはそのときだった。

「あやつらはまだつまらぬ子供たちだ、そう利口に立ちまわれるとは思えぬ。たしかに呉葉の独断で動いたとすると、この件で〈呪〉の用いられていることに不審が生じる。呉葉ごときにそこまでの心得があるものか」

厭な気配はあるのだ。

かんたんに読みとけぬ、隠された悪意が。

だが表面的には、それでも呉葉と楷によってひきおこされた事件と見えてしまう……このままでは。それを否定する、新たな材料が掘りだされてこないかぎり。

「……むしろ子供の悪戯でかたづけばよいのだがな」

咸月の吐きすてるひとことに、他の三人もそれぞれに重い緊張を共有した。

自分たちの敵が何を目論んでいるか……。

その、最悪な方向への想像力が、現在は必要とされているのだった。

「ごめんなさいね。さっき、あんなふうに紹介して」

キッチンの奥に据えた小ぶりな木椅子に腰かけて、夏江が言った。

「すごく厭味だったでしょ」

「いえっ……」
慌てて首を横に振ってから、亮介はなさけない感情のまま、視線を落とす。
「……ていうか……俺が、あんまり厭味な奴だったんだなと思って……本性が」
「ふふ」
こらえきれないように夏江が笑った。
「あなたにそんなこと言われたらみんな困っちゃうわね」
「……ええと……」
どう返答しようかと亮介は額に指をおしつける。
本当に……こんなふうな、救いのない自己嫌悪は二度と味わいたくない。
こざっぱりとかたづいたキッチンは、ところどころに色遣いの個性的な小物が置かれて、その機能性と趣味の高さがそのまま夏江と彼女の一人息子の人柄をうかがわせる。かけていいのよと夏江にストゥールをすすめられて、亮介はぎこちなく腰をおろした。プライベートな場所の醸しだす、なじんだ人の雰囲気に安心する気持ちと、だからこそおちつかない気持ちが、両方ともにある。
「普通の、精神が健康な男の子だと思うのよ。あなたは。少し、優しいところを過剰にもってるけど、普通のひと。それをあの人たちにも見せてあげたかったの」
そう説明して、そして夏江はやわらかい笑みを消し去る。

厳しい現実をみすえる、表情で。

「あたしは――どうしても根が本家の人間だから、亮介くんと同じことはできないわ」

「……」

意外な思いで亮介は目をあげた。

「そうよ。あたしは本家のやりかたにはずっと背いてきているけど、『背く』ってことは自分のなかにその対象があるのよ。根本のところで無関係じゃないってことよ。……十九郎もそうね。あの子は自分で伽羅王にかかわることを選んだから、なおさらそのことに直面するのよ」

（自分で）

離れようとすれば、そのまま離れられる道が里見十九郎にあったことは亮介も知っている。斎伽忍がそういった関わりすべてを一度きりはなして現世から去ろうとしたことも、知っている。

「里見さんは、でも本家とか一族とかと違う話で、忍さんと一緒にいるんじゃないんですか」

「違う話にはしたいのよ。独立した関係に見えるように努力しているだけよ。違う話にしたいと思うのは、十九郎の頭にも本家側の発想があるからよ。あなたや諒ちゃんは初めからそんなつまらないことを考えないですむでしょう？」

「……はい……」

「あたしも十九郎も、だからずっと希沙良をあなたたちと同じように『関係ない所』に置いて

おきたかったのね。七瀬の色に染まらないように、あの子にだけは目隠しをして……本当は、ただ、あたしたちの都合で希沙良を利用してきたのかもしれないわ……」

「……」

亮介は、今度こそ愕然として声をなくした。夏江の口から、そんな言葉を聞くことになるとは思わなかった。

「利用されたなんて希沙良は思ってないです」

絶対に。

たとえ、そうだと言われても希沙良は信じたがらない。亮介にすらそれはわかるのだ……。

「そういう言い方されると、夏江さんがどんなつもりで言うのかわかってても、本気じゃなくても、悲しいです。……がっかりする」

「あなたの正直な反応、好きよ」

夏江が微笑する。亮介は即座に後悔して、面を伏せた。

「すみません、言葉、悪くて」

「あのね……もっと本当の気持ちは、こうよ。もう、希沙良がひとりでも戦えるようになっていることには伽羅王も気がついているのよ。あのひとは、だから、今後のために希沙良に試練が与えられるという言い方をしていくのよ。だけどあたしはそれでも希沙良には十九郎をたすけてほしいと思ったわ」

先刻の、彼女が希沙良につきつけた容赦のない確認を、亮介は思いだす。

「あたしの勝手な、あたしだけの勝手な願いなのよ」

組みあわせた両手の指に力をこめて、夏江がつぶやいた。

眉間に彼女のこころの痛みがつたわるようで、亮介は黙って顔をしかめる。

「けれどあたしの役目も、もう終わり。希沙良が決めることに、あたしの願いなんて混ざっていたらいけないの。だれの助言も今の希沙良には邪魔になるだけ。純粋な、希沙良ひとりの意志で、ほんとうに自分がどうしたいか選ばなければならないときが来ているから。あたしには黙って『観て』いなさいということなのよ……天のお告げはね」

意味ありげな夏江の言いまわしが、誰の告げた言葉のことをさしていたのかは亮介にも自然にわかった。

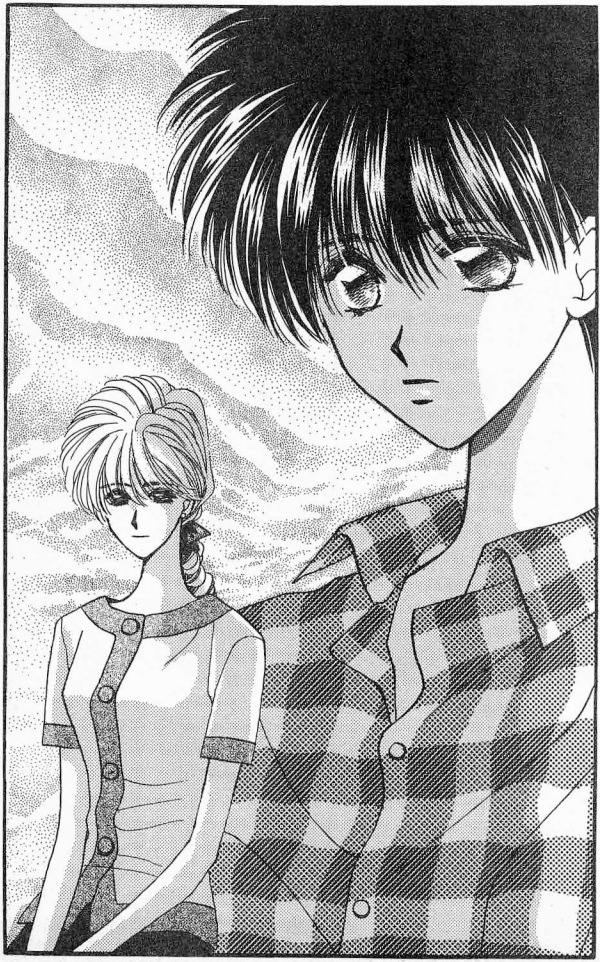
斎伽忍が、そんなふうに……。

(忍さんもみんなのことを考えてくれている)

現状の穏やかさに満足しない、厳然とした意志をもって。

(逃げたらいけないことなんて世の中いくらでもあるけれど、そのひとつ)

諒の言葉もその忍と同質のところに根拠をおいている気がする。亮介はやるせない気分で深い溜め息をつく。なにもかもが最初から、かならず良い結果がでると保証されたうえでのものなら楽なのに。あるべき解答を先に見ておけたなら、どんなにかいいだろう。



「ほら。あなたがそこで泣きそうな顔してたら、あたしの立場がないわよ。大切な息子がさらわれたきり生死不明の、哀れな母親はあたしのほうなのよ」

「あっ……！」

なんて馬鹿だ、と亮介は胸元で呼吸をつまらせてしまった。また自分の考えだけで頭を一杯にして！

「違うわよ、大丈夫よ。あたしは七瀬の血をひく一族として、伽羅王の采配を信じるわ。こんなところで十九郎を手放すひとじゃないはずよ、それを信じさせてもらうのよ」

さらりと、だが酷なほどに明確に、夏江がそう言いきった。

「あのひとにとっていやな負担でも重荷でも、かまわずに信じさせてもらうことにするわ。あのひとは、そういう場所に——光の中に立つ意味を知っているひとだもの」

そして……。

話をひきずらずに夏江は立ちあがりイタリア製のケトルをとりあげた。

「お茶をいれるわ。咸月君がもう目の前まで来ているようだから」

インターホンの呼び出しを省いて、玄関の扉がひらかれたのはその数秒後のことだった。リビングで待ちかまえていた冴子がすぐに応対に出る。亮介は反射的に夏江をふりかえっている。自分だけここをはなれるのは、ためらわれて。

「行きなさい」

夏江が促した。

「事態を動かす権利は、あなたたちにしかないのよ」

三名の道者をしたがえるかたちであらわれた咸月陣は、あえて椅子にかける時間と手間を惜しんでリビングルームのテーブルの傍らに立ち、現在の術者たちの司令塔にあたる冴子に対してこれまで得られたかぎりの情報を公開した。迅速かつ、ひややかに。

ゆくえがつかめないのは、十八歳の咸月呉葉と、その弟で十七歳の楷、そして彼らの家庭教師として雇われた高浪葵という人物である。

「誰なの、それは？」

四人衆筆頭の咸月陣に対してもいちいち礼をつくすのはやめにして、ストレートな口調で冴子が問いかけた。

「ものっすごく怪しいんだけど。その家庭教師」

「……経歴を詐称されていたことが調査のうえでわかっている」

不愉快さのにじみでる口ぶりで咸月が答える。偽の資料に騙されて、素性も背後も見えない女をまんまと咸月家の内部へいれた者たちの無能さが彼には信じえないのだ。もっとも、咸月家次期当主としては、これまで弟妹の教育になど心を一切さしむけずにきたことへの報いをう

けているのかもしれなかった。

「お約束ですこと」

冴子もやれやれといわんばかりにつぶやく。

「あとは？」

「ほかに気になることといえば、伊都子殿の所在が……」

咸月の肩の後ろから、不破武人がそう告げた。冴子のまなじりが急にけわしいものへと変化する。

「静養のために武蔵野のお屋敷を離れられているとのこと。どこに滞在されているかは未だ調べがつかぬのですが」

「そんな名目で消えるのがどんなに逃げ口上に見えるかわからないほど馬鹿じゃないでしょうよ、あのひとがいくら馬鹿でもね!!　つきあってられないのはこう厄介なときに自分だけは呑気に隠れていられるその神経よ!!」

深い苛立ちを含んだ冴子の言葉のするどさに、亮介はすこし驚く。すぐに冴子が見返って、短く告げた。

「母よ」

「……ああ」

わかった……と亮介は不器用にうなずいた。

母親というものはいるのだ。冴子にも――斎伽忍にも、やはり。

「あのひとのいつもの悪い癖よ、隠れてやりすごせばどうにかなるってつもりなのよ。どっちみちこの件では警戒すべき材料ではあると思うけど、それにしても話ができすぎよ」

冴子のそっけない判断は、武人の考えとまったく同一のものだ。ひかえめに武人は応じる。

「話ができすぎているという点で同感です。ただ、われらの『敵』が、伊都子殿をかつぎだす心づもりであの方の不在にこのたびの時期をあわせたと考えるべきか……あるいは伊都子殿に疑いを向かせることを狙って今、ことを起こしたと見るべきか。それともすべてが偶然か」

「そうね……」

遠い対象への――実の母親への憤りは消さないまま、冴子は思案するように唇を噛んだ。

「何も知らない顔で、あたしから『伊都子殿』に面会を申しいれてみるのはどう？　武蔵野の反応をさぐるだけでも収穫はあるかもしれないわ」

直接に、事態の解決がみちびかれるたぐいの行動ではないが、やらないよりはましだろう。

「たしかにそのくらいは役に立てていただきたいものだ。ご自分の生まれというものを」

無礼を無礼とも自覚しない断定的な言いようで、咸月がそんな皮肉を口にした。まったくこの男はと冴子は呆れるが、得意わざの鼻持ちならない科白が出てくるあたり咸月もそれほど動転してばかりはいないということか。

「では、われらは……」

明石川に視線で合図をおくりつつ、武人が動いた。その後の楷の足取りをおさえるため横浜方面へ向かうのが、まずは第一の役目である。

だが、彼らふたりが部屋を去るより先に。

がたりと玄関の方角で……扉に何かがぶつかったようだった。

遠野一真が、ゆっくりとふりかえる。ある程度、その物音が誰のしわざか予測したうえで。

「！」

亮介が息を呑んだ。

けだるい身体を扉に押しつけるようにして支え、そしてそこから一歩ずつ力を費やして、彼らに近づく。

……希沙良が。

「なあ……」

最も距離をおかぬ位置にいた一真の前に立ち止まり、ふっと希沙良が口をひらいた。一真は表情のかたすみに不快な影をひそませたが、相手から目をそむけはしなかった。

「俺は知らねえんだよ……知ってんだったら教えろよ」

「何を？」

「〈呪〉が……俺にかけられてる、こいつが、どこから来てんのか……その出所ってやつを、捜す方法はあるんだろ」

自分で捜せと斎伽忍はいいのこしていったのだ。
元凶を滅ぼすほどの〈呪返し〉も可能だと。
「俺に向かってきてるこの念ってやつを、さかのぼって……誰がどこでそんな〈呪〉をやってんのか、そいつを調べる方法が本当はあるんじゃねえのかよ。てめえらの、ご立派な、ありがたい本家のなかには……！」
「……」
一真は答えることができない。
どうしてこうもたやすく、永く七瀬の血脈が護りつづけてきた侵しがたい領域に彼は踏みこもうとするのか。みずからの不遜もかえりみずに。
「君は……」
「てめえの感想だとか意見はいらねんだよ。あるのかないのか、そいつだけ教えろよ」
与えるべき忠告は、殺気めいたその言葉にさえぎられた。いや、なぜ彼に忠告などせねばならない？　まるでそうすることが保身につながるように。ふりかかる責任を回避するように。
（卑怯者）
これほど息苦しい局面にまで彼と自分とを追いこむ、里見十九郎をこそ卑怯であると一真は思う。
転嫁された感情と知りながら。

「すべての呪術についての知識は本家の管理のもとにある。ただし、それは門外不出のものだ」

最大限に自制心をはたらかせたうえで、一真はそんな答え方をした。

この返答から、現に対処するすべが『ある』ととるか『ない』ととるかは本人次第だ。

唇のはしをひきあげ、希沙良はわずかに笑ったようだった。

「できるってことだろ。じゃあ、その門の内側に行こうぜ、向こうがまだ俺に〈呪(まじない)〉をかけてくれてるうちにさ……」

4

「ちょっと、何か寒くなーい?」

すれちがう、仕事帰りのOLの声が耳に届いた。

(寒い)

ふと、逸(はや)る足を止め、諒はそれをふりかえる。おしゃべりに花をさかせる女性たちの一団は、すでに背後へと遠ざかっていた。

太陽が落ちて、日中より気温が下がったのは事実だ。しかし吹きぬける風に多少の涼しさを感じはしても、この七月の夜を寒いとまで表現するには……。

（冷気）

瞬間的に、たしかにそれを体験して諒は表情をくもらせた。

肌のとらえる温度ではない。ぞくりと――ごく短く、背中をかけぬけて消えた。予感、のようなもの。霊気。

特殊な感覚には決してすぐれない自分や、一般の通行人にもさりげなく伝わるほどの……。

「ったく……」

かすかに吐きすてながら諒は地下鉄の階段をかけおりる。真っ先に脳裏にひらめいたのは、斎伽忍のまとった黒衣裳。まるで真冬のさなかに出かけるような。

（どこで何をしでかしてやがる）

しでかしていない、などとは微塵も考えない。疑わしきも怪しきも忍につながると思っておけばいいのだ。……そう、思われようとしていたはずだ。自分からきちんとした説明や釈明といったものをできない性分の、あの困った男は。

階段を下りきったところで、右手に握った一本の鍵へ諒は目を向けた。触れるのも惜しまれそうな真新しい輝きをのぞけば、どこにでも見られる、ありふれたかたちの鍵だ。はねかえる銀の光をみつめると、自分たち双方のひねくれた性格があきらかになるようで諒は不機嫌に唇を閉ざす。どうしてこう、あの男は人を頼みにするのが下手で、そして自分はそれを受けるのが下手なのか。

（そういう関係にはできちゃいないので）

命じられるか騙されるか……そのどちらかで片がつく。いつも。

だが、少し頭をつかって考えればわかるのだ。亮介を傷つけられ、里見十九郎の行方を絶たれても、それらのことにすぐさま怒りをあらわにして対処に乗りだすわけにゆかないからこそ、彼もわざと陰にこもった態度でこちらに皮肉を降らせてみたり和泉希沙良に釘をさしてみたりする。偽悪的にふるまうことでしか保てないものがあるからだ。そんなふうに想像がつくところがまた、困る。

斎伽忍が生きてしまう以上、空者伽羅王として君臨する以上、彼はどうしても個人ではありえない。生半可な情や甘さをもって行動はできない。そんなことは最初からきまりきっている話だ。承知のうえで自分たちは忍をこちらがわへ引き戻してきたのだ。

（なんでそんなことを）

どうして、できたのか。

あのとき。

ぼんやりと、根源的な問いを自分に投げかけて、諒はなんともいえず自嘲のこもった息をつく。

迷いがなかったわけではない。明るい未来ばかり考えたわけもない。ただ……。

必要だったからだ。

＊＊＊

「おおっとストライク!!　ふたつめのストライク、ゆうゆうと取りましたねえ。今のはスライダーですか」

興奮を装ったアナウンサーの声に、思慮深く自分の役目をわきまえた解説者が応じる。

「スライダーですねえ」

新宿、繁華街の中心にぎらぎらと照明を放つ大規模なパチンコ屋の前で――。

人集めの効果をねらって店の壁にうめこまれたテレビの画面へ目をとめ、ひとりの少年が立ち止まる。

優勝の行方をうらなう、注目度の高いナイトゲームである。東京ドームからの生中継に、幾人もの歩行者が路上でかたまり、画面にうつしだされる試合の内容に一喜一憂している。足を止めた少年の姿もそれらの野球ファンにまぎれ、ごくあたりまえな街の光景の一片と化した。

「たかが五万の民で人質とは」

批判的な、鋭いまなざしを光線の奥へと向けて彼はひとりごちる。

「伽羅王を相手のとりひきとなると、こうも覿面に甘さが出る。なぜそれに己できづかぬか。……道楽者め」

これからライブハウスへ出向くというような、奇抜なアクセサリーと黒を基調としたラフな服装は、彼の本質を世間に対して覆いかくすためだけのものだ。ただしその誇りたかく潔癖な、若き王ならではの貌つきは……如何にしてもごまかしようがない。

妖者方最高幹部の座に位する。

炎将、剣司である。

「あ、あれ？」

八回裏同点ツーアウトでランナーが出塁し、いまやまさに試合が盛りあがるところで路上の観客たちから不審のどよめきがわいた。

「なにそれ」

「そりゃないよ」

ふつり、と。

蠟燭の火を吹き消すがごとく、一瞬に、大型テレビの画面が闇につつまれたのだ。

「おや？」

動揺した実況アナウンサーの声はそのままスピーカーから聞こえてくる。

「ちょっと待ってください、停電でしょうか、あっ」

数秒もかからずに鮮やかなスタジアムの景色が復活した。マウンドにいる投手も、バッターボックスに入ろうとしていた四番打者も、それぞれに、いったい何だったのかと呆れたような

顔をしていた。
「ああ、なにか停電が、いやほんの少しだけ東京ドームの照明にトラブルがあったもようです。いやはや驚きました」
「驚きましたねえ」
緊迫感に水をさされながらも胸をなでおろす彼らをよそに、炎将剣司は冷徹な表情をくずさず、ふいにそこから歩みだす。もはやテレビ画面を見守る必然性はなくなったためである。

＊　＊　＊

他の扉に試してみるまでもなかった。
めざす鍵穴に、真新しい鍵はすんなりと合致してしまう。思ったとおり。
重く、目前にたちはだかる黒い扉を諒はあらためて眺めやった。
見覚えのないものではない。記憶ならありすぎる……余るほどに、なまなましく残っている。
だがもう二度と斎伽忍がこの扉をひらかずにいても、不思議ではないと思っていた。
六本木のはずれにある、大型マンションの、九階。
九〇七号室。

斎伽忍の、本来の居室というべきだろう。

彼の『死』とそれにともなう雷将やら幻将やらの来訪によって内部は荒れはて、その後は、修築のためと称して七階の同じ号数の部屋へ忍は身の置きどころを移している。実際、建物全体を所有する彼は、どこの部屋に住まおうと自由なのだ。過去のまとわりつく、因縁じみた部屋へあえて戻る必要もない。

そう考えていた。

（鍵を貫ったことはなかったな）

なじみの深い九〇七の数字を目にして初めて、そのことをやや意外に感じる。仕事で使う部屋の鍵は当然うけとっていたのに。いちばん頻繁に出頭するべき場所の鍵だけ抜けているとは。

そもそも忍がこの扉に鍵を使用したためしがあるのか、それ自体が謎だ。なにしろ何か都合が悪くなれば、内に閉じこもるどころか部屋のある階をまるごと消すという暴挙に出る人物である。

（少しは反省したってことですかい）

軽く、小気味のいい音をたてて錠がはずれる。ためらわない動作で諒は黒い扉を手前にひきあけた。直後――。

「！」

ギュン、と激しい耳鳴りが諒に襲いかかった。濃厚な圧迫が全身をおさえ、どこともつかぬ彼方へ押し流そうとする。何だ？　この流動体のような――粘る……溶かされる、ような……。

磁性を秘めた空気！

「忍……!?」

四肢を呑みこむ無形の縛めをかきわけて扉の奥へと諒は呼びかける。眩む眼をこらしても求める姿は映らない。ただ……。

（誰かが）

いる、とおぼろげに輪郭をとらえた。

腕にこめた精神力で諒は強引に、自分の背後で扉を閉ざす。がつん、とノブの固定される音とともに、得体のしれない圧迫感は身体のまわりから消えさった。

……青い光。

わずかに灯された間接照明の色だ。暗い室内を明確に照らすだけの力はない。不思議と青く、つめたい光。そのなかで諒は自分の勘違いを悟った。誰かの影があると思ったのは……。

扉をあけてすぐ、正面に聳える、壁一面の鏡のせいだ。

（まだこいつが要るのか）

鏡面にうつる自分自身の深刻な表情が不本意で、諒は乱暴に視線をそらす。床は相変わらず

のフローリングだ……土足であがりこめるのも同じだろう。

玄関から鏡までの短い距離を歩き、角を曲がるとそこがもう見慣れぬ応接セットの据えられた、二間つづきの大きな部屋だった。

いったいどういう『修築』をしたものか。間取りから家具から、なんと窓の位置にいたるまでが全面的に変わっている。小物ひとつとっても以前と共通するものはない。それほど大掛かりな工事を施していた気配は微塵も見えなかったのだが。

本当にここが九〇七号室であるのか、そちらのほうが疑わしい。入り口が同じであるだけで、その先に別の空間をつなげたと思えば簡単に納得がいく。

なぜそうまでするか……と呆れる気分で諒は仄暗い室内に足を進め、南側の大窓に近づいてブラインドを一杯に引きあげた。

眼下にひろがる都心の夜景、ちりばめられる多様な電光の群れが、わずかであってもこの部屋のなかへあかるさを届けるように感じられる。青く清浄な視界に、遠い地上の星々が煌めく景色。なにかに似ている。たとえば巨大な……銀河。

（大宇宙）

うつくしく透ける硝子を隔てた向こう、の。

手をふれることはかなわぬ深淵だ。

微かに、窓に描かれる世界のかたちから、まなざしを伏せたのは一瞬。

次の瞬間。

声もなく諒は瞳を上げていた。ガラスに彼の姿が映ったわけではない。ただ、つたわったのだ。息をつめて背後をふりかえる。重く、強く、氷のごとく冷厳なる霊気を生身のうちに有する者。

どこから……。

少なくとも、自分と同じ扉をひらいてこのなかへ入ってきたのでないことだけは明らかだった。超常的に、突然に、次元をくぐりぬけて現れたのだ。

ひどく間近に。

「見え透いた、やりかただったかな……」

ふわりと、忍がそう唇をひらいた。

「何が？　鍵一本で謎掛けしといて実はただ俺を呼びつけたいだけとゆーやりかたが？」

仏頂面で諒は問いかえす。

「つねづねあんたに学習していただきたいのは人に物をたのむときの態度というやつですよ。悪いこと言わないからそれくらい憶えなさいよ、でないと将来ちゃんとした大人になれませんよ。常識よそれは」

「けれどおまえが現にここにいるじゃないか」

総身を覆う漆黒のロングコートの、襟元を左手でゆるめながら。

このうえもなく甘えはてた科白を斎伽忍は平然と告げてみせる。思わず諒は本気で、そのまま唖然と口をあけて立ちつくそうかと考えた。

「……してみると、現にここに至るまでの俺の精神的迷惑はどうなるですかい、ええ？」

「日頃、おまえから僕に与えられている数々の精神的負担を棚にあげられては困るな。相殺ということさ」

「ちなみに俺がいつ……」

抗議の声は半ばでとぎれることになった。

おい、と低く呼びかけるのと同時に諒の掌が、闇色のコートの肩をおさえている。この蒼い微光のなかでは斎伽忍の顔色などわかりはしない。しかしその生気の消耗は——彼が甚大な疲弊を、透けるほど白くはえる肌の内に隠しもっていることは——今や歴然とした事実だった。

「まともな理屈で、立場が、不利になるからというてっ……」

手を離しただけでくずれそうになる細い身体を危うげなく両腕で支えつつ、いらだたしく諒は腕のなかの相手を叱りつける。

「自分の健康を盾にとらんでほしいんだが俺は!!」

「ふふ」

苦しげに瞼をとざしながらも、忍は小さな笑みを零す。

「こんなときでもおまえにそう偉そうな口を利かれるようになったかと思うと、嬉しいよ」

「……何のために俺の背があんたより高くなったかという話ですよ」
ぶっきらぼうに言い返して諒は遠慮なく彼の身を運びあげ、手近にみつかった長椅子の上へと移動する。この人物が昔から、普通よりもずっと、健康面において虚弱な相手であることは諒も承知しているが……現在の、わずかに触れる彼の皮膚の冷たさは異常なものというべきだった。何を原因とすればそうなるのか……。
「おい。どうすればいい」
回復可能な状態なのかそうでないのかも、一目にはわからない。本人に問うしかない。
「そうだな……」
長椅子の柔らかさに背中をゆだねて、忍は両の掌を包む黒革の手袋をゆっくりと足元の床へ脱ぎすてた。
「しばらくでいい。僕の手を離さずにいてくれないか」

第二章　反りゆくもの

1

試合は延長戦に入るきざしを見せている……。

水道橋、『巨大卵』こと東京ドームの周辺に五万人の観戦客が溢れ出るまでには、いまだ猶予がありそうだった。

「どうした為体だ」

腰のベルトに装飾金具を揺らした細身のブラックジーンズが、鷹木文彦の目前をよこぎり、そう告げた。明るくにぎやかなドーナツショップの奥、窓際を避けた片隅のテーブルで、文彦は指先のフレンチクルーラーをまっぷたつに裂きながら興味のなさそうな視線をちらりと上げてみせた。

「小僧の来るところとは思えんぜ」

「見たところ小僧しかいない店のようだが？」

文彦のつまらない厭味に負けぬだけの下手な皮肉を返して、彼とむかいあう簡素なつくりの

椅子に炎将剣司は音もたてず座りこむ。
「コーヒー一杯分くらいの金は払うのが、店への礼儀というものだがな」
「人間達のしきたりに従う義理などない……長居をしようとも思わぬ」
「まあ、そういわずにつきあえ。正直な話、今しばらくは足腰が覚束ぬのさ」
気楽な口ぶりで文彦はそんな科白を吐く。
その言いざまに多少の誇張はあっても、雷将勝呂の有する妖力が、本来の状態よりいちじるしく低下しているのは事実である。険しく眉をひそめながら剣司はその文彦の、いやに不似合いに甘ったるいドーナッをとりあげる指になお残る、微細な慄えを眺めやる。
「なさけないありさまだ」
「小僧にいわれたくはないが、そのとおりだ」
「今のきさまであれば子供の力でも斃せる」
ひややかな剣司の評価に、ふんと文彦は愉しげに鼻を鳴らした。
「意趣返しがお望みか、若様には」
「――私はきさまのように卑劣な機を狙いはしないのだ!!　きさまのようにはっ……!!」
かっとなって椅子から身をのりだしかけ、それさえも勝呂の娯楽の対象になると気づいて剣司は喉の奥に憤りの声をのみこむ。
過日の一件――伽羅王の施した封印を知らず、先走りのあげく総帥・九那妃の身を危険に晒

したことへの、勝呂のすさまじい制裁はまだ記憶に新しい。

この曲者の雷将が見栄も韜晦もかなぐりすてるほどに激怒したとなれば、まさに逆鱗に触れたという表現がふさわしい。みずからの越度が、たしかに罰されてもやむなきものであったとは剣司も考えるのだ。幻将の企みが女神九那妃にとって最悪な内容であったことを鑑みても、あのとき力にまかせた強引な方法で勝呂が剣司を妨げたことは正しい。それは正しいのだが。

問題はその後である。面子をつぶされた恨みと、本来の嗜虐趣味と、過剰な労働をおしつけられた苛立ちとを見事にやつあたりのかたちに結実させた勝呂の下した『制裁』は、彼の攻撃によって動きのとれない剣司からさらに膨大な妖力を奪いさって我がものとし、そのまま七日七晩、力が尽きて滅する寸前にいたるまで鎖につなぎ放っておくという、魔道非道も極まれるものだった。己のあやまちを十全に知りしかも初めから反撃の余地もない相手に、よくそれほどに悪辣な手を下せるものだ。もはや、報復をのぞむ気持ちも湧かぬほどである。おなじ穴の狢になど誰がなれるかというのだ。

「卑劣だ卑怯だは乱発すると恰好の悪いセリフだな。そう思わんか？」

「帰るぞ私は」

思いきりよく剣司は席から立ちあがる。

「いや、卑怯卑劣な伽羅王を卑怯卑劣といいつづける俺の愚痴ってやつさ。……会見の結果は訊かずに良いのか」

カスタードクルーラーの片割れを口のなかに投げいれつつ、文彦が茫洋とした調子で問いかけた。

「……真実、弾劾されるべきものはいくら弾劾しても足りぬであろう。正しい力において滅ぼすほかにない。私はそう考える」

不愉快な表情は変えぬまま低い声で答え、やむなく剣司は再び座席へ腰をおろした。

「正しい力か」

文彦はふと唇に微笑をかすめさせ、独白のようにくりかえした。空者総帥伽羅王という巨大な宿敵に――全世を統べる絶大な権力をあらかじめ天より与えられた、残忍たる支配者に対して――それだけまっすぐに自陣の正しさを信じうる純粋さは、この炎将の美徳といえるものだ。これればかりはいつまでも失われることはあるまいと思える。

「では、話はついたのだな」

「そういうことだ。非常にすみやかに、とどこおりなく和やかに、とな」

「だが最後に気の均衡をくずしたのはきさまのほうだろう。まんまと外部にまで影響が出ていたのだがな」

「お慰みさ」

バレていたかと文彦は肩をすくめる。

一般の人間に害をおよぼさず事を運ぶべしとするのが、九那妃の意志である以上、わずかな

かたちであっても外に影響を与えたとなれば恥ずかしく思わねばなるまい。
「伽羅王の霊気も一度、箍をはずれたのが知れた。こちらまで震撼がつたわった」
剣司がさらにそう指摘する。
「ほほう。そいつは気づかなかったな」
「その一度のみで片付いたことが私には驚きだ。五万ごときの人質、いざとなれば平気で滅ぼし去るであろう……伽羅王は」
「きまぐれなところがあるんでな、あの男には」
わざと呑気な言い方をして文彦は剣司の追及を横にかわした。一対一で伽羅王との交渉にのもむく行為の危うさを、剣司は非合理的なものとして初めから批判しているのだ。
実際に、それがまちがいなく合理的であるとは勝呂にも答えられない。
が、おもしろいではないか。
「きさまのその道楽気取りが……」
「むこうも道楽さ。今の時点ではまだ、な。おい、ここのオールドファッションはなかなか美味いぞ。食わないか」
一触即発の宿敵同士、たがいに相手が剣をとることを封じ、牽制しあい、なおかつその嵐のごとき戦気の流れを狭く抑えて東京ドーム五万人の安全を確保する……。
そのようなくだらぬ遊戯に堂々とつきあってみせる、あの美貌の若者の性分を、勝呂は愛さ

ずにいられない。まったくもって……一気に惨殺してやりたいほどに。

（死にたくなれば俺を呼べ。すぐさま殺しに出向いてやる）

今度こそ、と。

別れ際にそんな戯れごとを投げかけた勝呂へ向けて、空者伽羅王――斎伽忍は、白皙の面に鋭利な笑みをひらめかせただけだった。

闇のなか、あざやかに。

「そうも無駄なものをよく喰う気になる」

うとましげに文彦のトレイを見下し、剣司は信じられぬという面持ちで吐きすてる。

「なにごとも身をもって知るのが一番確実だぜ。くわずぎらいの若様にはわかるまいが」

「私はこの現代を気にいらぬだけだ。人間どもの気配も世にあふれる物質も、総じて醜い」

「嘆いたところであやつらの時が逆戻りすることはありえんな。俺は愚痴だらけの年寄りにはなりたくないのさ」

「しかし私には――」

「おっと」

にやりと悪戯に笑いながら、文彦は手元のドーナツの一片を絶妙なタイミングではじき、目前の人物の口へ放りこませることに成功する。隙をつかれた剣司はあまりの馬鹿馬鹿しいしわざに怒るきっかけもなく、ただ呆然と相手を睨みかえすのが精一杯だった。

「気にするな。奢りにしといてやる」
「……ひどい味だぞ」
「そいつも経験のうちさ」
「本当に帰るぞ私は！」
「奴との話はついたが、さて伽羅王の陣に、我々のうち誰から先に戦を仕掛けるか……さだめねばならん」
癇癪を起こしかけた剋司を見やり、ふいに文彦が話題を核心へと引きもどした。
剋司は舌打ちをする。勝呂らしい話運びといえる。
「私はいつからでもかまわぬ。きさまに何か心算はあるのか」
「ふむ」
不敵、というにはやや複雑な、彼にしては翳りの色が濃い顔つきで文彦は言葉を切る。
「……策はある。当然のことだが」
こころづもりも覚悟も充分であるのに誤りはない。
「何が足りぬのだ。兵か」
沈黙の本質を敏感に読みとり、剋司が問いかけた。文彦はかぶりをふる。
「手勢がないのは敵も同様だ。痛くはない」
「では何だ」

かさねて剋司が尋ねる。
「まだ秘密だ。俺はデリケートなんでな」
オールドファッションの最後のひとかけらを冷めたコーヒーでのみこみ、よいしょと声をかけて文彦はせまい椅子から腰をあげる。甚大な気の消耗により安定を失っていた足元も、どうにかごまかしがきくまでには回復したようだった。
（九那妃様の御心はいずこにあるか）
そう……そして懸念はさらにもうひとつ。
現時点にて――。
（きさまは何を企むか）
はりつめるまでの意図を秘めて。掌中に、いかなる目論見を隠すのか。……伽羅王は。

2

妖者総帥九那妃の本質を封印するために、斎伽忍がみずからの識格を実体より切りはなして九堂珈織の内へと沈み……もろともに黄泉の世界へ落下しようとしたのは、この夏が訪れる、わずかに前のことだ。
それ以降、彼の〈使〉である牙がまわりの術者たちに対して口うるさいほどに訴えていたの

は、死線より帰還した斎伽忍に充分な休養を与えねばならぬという主張だった。いつのまにか——復活のその現場において約定をはたしたとしか思えぬ迅速さで——妖者側との休戦状態が成立していたのも、コンディションをととのえるためには絶対に時間をおかねばならぬとする忍の判断があってのことであるのに、まちがいはないだろう。

（どの程度）

休養、とひとことで表しても、とらえかたは様々にある。

斎伽忍の生命力はどの程度まで削られ、そしてどれほどの手を尽くせば心配のいらぬ状態をとりもどすのか。そんなことは結局、諒にはわかりなどしないのだ。

「……氷だな」

乏しい光のなか、蒼白にすきとおる斎伽忍の指先にふれて、ぽつりと諒はつぶやく。

「ずっと、そうなのか？」

おちついた、冷静な声で問いかける。一種、遠くつきはなすような立場から。それが互いに必要な距離であるからだ。へたな動揺や戸惑いや、あるいは同情のようなものは決して忍を安らがせはしない。大戦にのぞむ指揮者としての地位を彼がうけいれている現在は。

「いや。回復の途はあるのさ。今は、ただ……『器』のほうが本調子でないところに、無理をした。少し」

「少しでこれですかい」

言葉の隙を聞きのがさない諒に、苦笑に近い表情を唇にうかべて、忍は閉ざしていた瞼をひらく。穏やかな色がそこには宿っている。

「ああ、些少な影響だ。僕が正気を保っているかぎりは、こちらの勝ちということさ」

「……」

正気を――。

斎伽忍自身の意思を、か。

凍ったように冷たい彼の左手を自分の掌のなかに摑んで、忍の傍らに腰をおろし、諒はしばらく心の欲するとおりに沈黙した。静寂をうめるための言葉はいらないと思えた。

大幅に削減された忍の生体力を、補い、あらたに与えることができるのかどうかは知らない。ただ、こうして諒の生気がふれるだけでも、忍の状態をこれよりさらに悪化させずにとどめる効果はあるのだろう。

「雷将、勝呂との交渉を終わらせてきた。必要な話しあいは済んだ。あとは始めるだけだ」

静けさに同化する、かすかなつぶやきが、いつしか、忍から発される。流れた時間が永かったのか一瞬なのかは、わからない。諒はゆっくりと首をめぐらせて、幻にも似た彼のあおざめた美貌を眺めやる。

「僕の足元に火をつけたがる動きが、一族のなかにあるのはわかっていたからね……妖者方がそこへ目を向ける前に、なおさら……彼らの視線を、僕のほうに逸しておかなければならなか

った。この身体の至らなさについて泣きごとをいってはいられない……。今をおいてほかに、動くタイミングはなかったのさ」

「何が始まるんだ」

妖者方――すなわち九那妃との、真の決着をつけるための戦いが始まるのだ、とは語られなくても知っている。

だがそれだけではないのだ。

忍の意図は、もっと広いところまでを捉えている。諒にはそう伝わっている。

まさか里見十九郎の失踪さえもが焦点に入っているのか？　初めから？

「何を、始めなくちゃならない？」

「すべてのことをだよ。僕が生きるということにまつわる、全部の……」

抽象的な、しかしひどく切実に聞こえる表現を用いて忍が答えた。

「つまり僕は、僕自身のこの『脆さ』をまぬがれることは決してないだろう。こうして、僕は必ず、このなかにある本質に食い潰されていくだろう……。そこに、相克と狂気が紛れこむ」

忍の自由なほうの右手がもちあげられて、束縛をゆるめた襟元にあらわれる首筋の膚へと触れる。その肉体のうちに存在する、巨大な力をさししめすように。

「だが僕は自分を憐れみたくはない」

「……」



思わず、それを耳にした瞬間に諒は唇を震わせてしまっている。何も……そこにいる忍に対して、告げられはしなかったが。

肉体の脆さも、そして精神の危うさも。

在るものを——事実、避けがたく在る自分自身を——ひたすらに忌み拒むのではなく。

うけいれようと、彼は考えているのだ。

いさぎよく、果敢に。

（回答か）

その結論が。斎伽忍の未来を祈ってここへ引きもどした、亮介たちへの回答なら。

本当にあのときの、身を挺した亮介の決断に、価値があったのだと今は信じることができる。

「どうした？　感動のあまり口もきけなくなったのか？」

「やかましい。……俺は亮介君の英断に感心しておっただけですよ」

冗談めかした忍の呼びかけに、憮然として諒は唸りかえす。ふと……意味ありげに、忍はとらえどころのない、硬質な印象の瞳を諒へ向かわせて囁いた。

「いつまでおまえがそう言っていられるかと僕は思うよ。いずれ、おまえが見るものは、ガラスの破片くらいでは済まなくなるだろう……。おまえたちは全員、とてもわかりやすい標的になる……。僕が始めるのはそんな戦いだ。なにもかもが保証されるわけではない」

「誰も死なさずにおくのがおまえの役目だろう。違うのか？」
ずばりと容赦せずに諒はきめつけた。
厳しさは承知のうえで。
「ああ……そうだな」
忍が双眸をとざす。頷くかわりに。
「おまえと、僕の役目だ。……おまえの生きがいがそこにあるかぎりは、僕もそれを利用させてもらうことにするさ」
「どうしてそこであんたはつくづく厭味な路線をはずさんかね……」
「親切とは呼んでくれないのか」
「つつしんでご遠慮申しあげますがね」
「僕が絶大な信頼をゆだねるときくらいは、もう少しあたたかく受けとめてもらえないものかな。おまえにしても、希沙良にしても」
「日頃のおこないをよくふりかえってから仰ってもらいたいですよ、そーゆー科白は」
「僕のおこないはあまり変えられそうにないな。この齢まで生きてしまうとね。……希沙良はどうしている？」
たかだか二十年の人生で何をと白ける諒に、話題をかえようとしたのか必要にかられたのか判断の難しいタイミングで忍が尋ねた。諒は少し神経質に眉をひそめ、それに答える。

「亮介くんにお任せしてきちゃいましたが」
「それでいい」
自然に、さりげなく忍の左手が諒の掌からすりぬけて離れる。
重苦しく覆う黒のコートを一息に我が身よりひき剝がし、みずからの両足で彼は薄闇のなかに立ちあがった。
「僕の仕事は、まだこの先にのこっている。おまえにも働いてもらわなければならないな」

3

『またなのか？　――大丈夫か？』
同級生として、さらに美術部部長というポジションにおいて亮介とふかくかかわっている山岸基の応答は、そういうものだった。自宅に帰れない理由をでっちあげるのに、今夜は山岸の家に泊まることにしてもらえないかと、亮介が電話で頼みこんだのだ。
「うん……またなんだ」
また、というのは、くわしい事情を話せないということだ。ひどく申し訳ない気分で亮介は目を伏せる。ただでさえ迷惑をかけるのに……こちらからは心を見せないようで。
『いや俺はぜんっぜんかまわないが。そっちのゴタゴタ、もう一段落したとばかり思ってたし

さ俺は』
「うん。終わんないな……やっぱり」
一段落して、そのままであればいいと思っていたのは自分も同じなのだ。けれど。きつく、唇をひきむすんで亮介は低く告げる。
「ごめん」
『そこであやまられるとなあ……。妙に慰めてしまいたくなるしな崎谷の謝り方』
「う……ごめん」
『こっちはともかく。彼女にはちゃんとしてやれよ』
「うん。ちゃんとしてるよ」
『……おまえ案外臆面ないやつ？』
「だって必死だよそれは」
変な表現だなと自分で感じながら亮介はそう答えている。回線のむこうで山岸は我慢できずに吹きだしたようだった。
『とにかく部活には来いよ。暑くても徹夜明けでもふんばって来いよ。一応、今夜はそれ交換条件ってことで聞いとくからさ』
「うん。わかった」
『だめでも絵は描けよ』

最後に、きちんとそんなふうにつけたす山岸を、亮介はとても好きだと思う。山岸は本気で絵を描こうとしている人間だから、なおさら……揺りもどされる。そちらの世界に。

「そうする。ありがとう」

時刻は、もうすこしで午後九時になる。自分が思いのほかおちついていることに亮介は気づく。里見十九郎の安否がいまだに、まったく知れないというのに……。

不安な気持ちがあまりないのだ。何故だろう？　十九郎ならばどんな事態にでも対処できると、信じられるからなのだろうか。

（大丈夫だ）

少なくとも彼は生きている——。

無言の確信は、隣にいる希沙良からつたわってくるものなのかもしれない。

東京、武蔵野市のはずれに咸月陣の運転するＢＭＷはすべりこんでいく。途中、見知った吉祥寺の光景が車窓に流れるのに亮介は不思議な気分になる。自分の学校とそれほど離れていないところに、七瀬という巨大な血族をまとめる拠点がおかれているなんて。

（本家）

何度その二文字を聞いただろう。これまで。疎ましくて非情な、未知のものとして。斎伽忍

の最も手元近くにいるようにしていた時でさえ、彼の背後を占める、本家なるものの実体にふみこむことはなかった。

道者四人衆のうち不破武人と明石川耕宇は、すでに横浜の方面へと急行している。出航したクルーザーのゆくえと、それに同行しなかったらしい咸月楷の足取りを追うためである。

「そうだわ亮介ちゃん、気をつけてて」

はたと気づいたように助手席からふりかえって冴子が言う。え？　と亮介が訊きかえしたときだった。

黒い木々の影が覗く、分厚い塀のとぎれる一点。

重々しく囲われた敷地のなかへ切れこむ短い車用道の先に、ヘッドライトに照らされ鈍く灰色にうかびあがる鋼鉄の門が、見えてくる。見えた、その一瞬。

「う、わっ……！」

無意識に両耳をふさいで亮介は小さく悲鳴をあげている。

うちのめされる！

「おい!?」

口数をなくしていた希沙良もハッと顔をあげて、何事かと亮介に目を向ける。

「なんだよおまえっ……」

「咸月殿、スピードさげないで、さっさと中につっこんじゃって！」

鋭い声を冴子が運転席の咸月に投げつけた。左側でハンドルを握る咸月は背後（バックミラー）の亮介の姿にかるく眉（まゆ）をひそめつつ、冴子の言葉どおり減速はせずに門の手前までＢＭＷを走らせる。

「痛たたっ……」

鼓膜（こまく）が突き刺されるようだ。現実の音ではないものに。轟（とどろ）く、幻聴。のみこむ、しがらみのつよさ……。

（こんなに凄い）

思考可能な、頭のかたすみの部分で亮介は愕然（がくぜん）とする。

（人の念）

吐き気のするほど、きもちのわるいものだ。

涙までが滲（にじ）んでくる。

「あたしよっ!!」

助手席の窓から身をのりだして、門を管理するセキュリティ・コンピュータの端末画面に冴子が怒鳴りつける。壁に内蔵されたスピーカーを通して、照合されました、と女の合成音声が答え、灰色のゲートはするするとひらかれた。

放っておいてもシステムによって身元チェックは自動的におこなわれるものだが、あたしと名乗るだけで門をあけさせる人物は冴子くらいだろう。少なからず呆（あき）れながら咸月は車を敷地の奥へと進ませる。

「おい大丈夫かよおまえっ……」
後部座席で身体をふたつに折りまげる亮介に、再び希沙良が呼びかける。亮介は頷こうとして、何度か咳きこんだ。
「このへんでいいわ咸月殿、一回止めて！」
またもやいきなり飛ぶ冴子の指示に、それでも迅速に反応したのは咸月の意地というべきだろうか。他に走る車両はみあたらない、静まった舗道の半ばで、ＢＭＷがスムーズに停止する。ふかぶかと肺のなかの息を吐きだしながら、亮介は両耳から手をはなした。
ジェット機の爆音にも似た……おしつぶされそうな圧迫は、なんとか過ぎ去ったようだった。
「ごめん……ありがとう、おさまった……」
「ちゃんと注意しとかなくて悪かったわ。勘のいい人はだいたい、あの門をくぐるあたりで嫌な気分になるのよ。ここはいろんなものが濁ってるから」
申し訳なさそうに冴子が説明する。
「そっか……。そうなんだ……」
汗と涙を手の甲で同時にぬぐい、亮介は震えのやまない声でつぶやいた。
「凄く、重い……本当に……」
「この先行けんのかよ、それで」

「うん……大丈夫」

問いただしてくる希沙良を、とてもありがたく思いながら頷く。現在の希沙良が、本当ならば他人のことなど気遣っていられない状態になっているのがわかるからだ。

「大丈夫」

「……」

それ以上を問わずに希沙良は無言で亮介から視線をはずす。自分の行動を自分自身ですべて把握しきれずにいるあやうさが、そこには漂っている。

仕方がない。

実際に、希沙良がここへ来ようとする、その決断を下したことだけで今は。

「しかし、不快な気の澱みは、たしかに感じられはするが……」

個人的な驚きを隠しきれずに、咸月がぽつりとそう洩らした。

「感受性のすさまじさにも、ほどがある」

「そういう人なのよ、咸月殿。理解していただけたかしら？」

「不幸ながら……空想の域にしかないと、正直に申し上げる」

咸月陣もまた、特に感覚にすぐれた傾向の人物であることにかわりはない。その当人がこれほど簡単に脱帽する相手といえば、他には斎伽忍くらいしかないだろう。冴子はふと、そこで表情をくもらせる。

「そんなに、物凄く、念が重いの？　亮介ちゃん？」
「……うん……」
反芻して思いかえすのも、いやなほどだ。亮介はぎこちなく答える。
「重い……。まわりじゅうからしがみついてくるみたいで……」
醜悪で浅ましい波動のかたまりが。
幾重にも層をなして、迫る。ふれるもの全部を低劣な気のなかへひきずりこむのだ。
それが、慢性的にここを支配する、場の力として定着してしまっている。エゴイスティックな念の集合体だ……。
「そう……」
実感のこもった亮介の言葉を聞き、厳しい面持ちで冴子は結論を導いた。
「忍様にも、きっと同じなのね」
「……」
感想は告げずに咸月はブレーキを外し、なめらかにＢＭＷを発進させる。
「だからどうしたと思われるんでしょうね咸月殿は？」
やや棘を含んだ声で冴子が尋ねた。もともと、決して相性がよくないのだ。このエリート主義者の親衛隊長とは。
「重いしがらみのあることを、どうでも良いとは思わないが」

愛想のなさはそのままに、咸月はゆっくりと口をひらく。

「同じ重さにも、耐えられぬ凡人と、その負荷を凌駕しうる才人とは、厳然とわかれるものと考える。その理屈においてあの方が全一族を負うに相応しいといえるだけだ、私には。すくなくとも貴女のような感傷を私の立場で抱いていては、一族の規範は保たれぬ」

「……あたしの特権ってわけね」

「ご自覚いただけているなら手間は省ける」

冷ややかに咸月は首肯してみせた。あるべき、彼の立場にしたがって。なるほどねと冴子は小さくつぶやいた。

生い茂る並木をくぐり直進した先に、聳える、館の全容があらわれてくる。威圧される印象に顔をしかめて亮介はそれを眺めやった。四階か……五階建てくらいだろうか？　外形は洒脱な欧州風の楼閣を装う。だがその内部は、先端のテクノロジーと古来の因習とが等しく、渾然と、うごめく舞台だ。

訪れる目的は、ふたつある。

ひとつは、冴子の名義において七瀬伊都子の所在を確認すること。

そしてもうひとつの、たとえ困難であっても必ず果たさなければならない試みが——。

その屋敷の奥深く、心得なき者には立ち入りのゆるされぬ特別な蔵所へおさめられているという、〈呪〉に関する極意を借りうけること、である。

地下駐車場から屋敷に入る扉の前で、遠野一真が待っていた。咸月の指示をうけて先行し、邸内の状況をうかがっていたのである。独断にて捜索の手順を乱した一真に対して、現在は罪をせめるよりも、失態をくつがえすだけの有効な働きをもとめるべきだと咸月は判断したらしかった。

現実的な対処とはいえるが、ただでさえ術者と道者のあいだに明確な上下関係が示されていないうえ、自分自身の弟妹が犯行に絡んでいるという事態において、咸月陣の心中で責任のベクトルが複雑に錯綜しているのも事実だろう。

（排斥されるよりは）

こうして変わらず駒のひとつであれと命じられることを、本望だと一真は考える。

遠ざけられてしまえば苦しみは終わりだ。蔑まれ、術者たちの目前に置かれて働く立場こそ、今の自分には必要なのだ。それを針の筵と呼ぶには、まだ現状はなまぬるい。

（いや……違う）

ふと、閃くように一真は思い知る。

どんな処遇におとしめられても、結局、真実の罰を与えられたことにはならない。

里見十九郎が帰還するまでは。

「ここのマイクには音を拾われぬよう操作しました。システムには、別のマイクの回線がつなげてあります」

監視システムの心配をせずに話せることを、一真はまず咸月に報告する。

「特に大きな動きは見られません。伊都子殿の静養先については、やはりいまだ不透明のままですが」

「取り次ぎくらいは誰かができるはずよ。大嘘でっちあげても呼びだすのよ」

母親に対する不愉快の念はどうしても消えないらしい。いらいらとその場で靴のつまさきを鳴らしながら冴子が言う。

「ああまったく、滅多に会わない人に会う口実ってば難しいわね……」

「滅多に会わねえんだったら、ただ会いたいって言うだけでインパクトは充分だろ」

亮介の横に立つ希沙良が、無表情にぼそりと口をひらいた。

「へたに理由つくるより正面から行ったほうが、勝手に勘繰ってもらえるんじゃねえの？」

「……けっこう頭動いてるわね、あんた」

「あてずっぽうに言ってるだけだぜ……知らねえからさ」

駐車場の冷たいコンクリートに視線を流して、希沙良は関心もなさそうに答える。それから、ふと思いだした様子で咸月陣のことをふりむいた。

「おい、今度はどうなんだよ。俺が本家に入ると『禁を破った』ことになるんだろ……いいの

かよ」

今度は、と念をおすのは以前に鎌倉でそのために制裁をくらっているからだ。苦い顔つきで咸月は一度、眉間を震わせる。

「非常の折と認める……。私が責任をとる」

「あら……」

さすがに皮肉な文句も出ずに、冴子がその目をまるくする。

教条主義の塊である道者たちの長がこうも譲歩するには、よほどの勇気が要されるはずである。

「なんだか見直したわ、咸月殿」

「現金な方なのだなとしか、答えられないが」

煮ても焼いてもくえないところは何も改められないようだ。ああ、さようですわね、と冴子は大袈裟に肩をすくめた。

「じゃあ、その希沙良君の路線をもらうことにして、意味ありげな面会希望人になってみるわ。結果は咸月殿に電話連絡ね」

「遠野は冴子殿に同行しろ。まわりには冴子殿の衛護とでも監視とでも、好きに見せれば名目は立つ」

「心得ました」

「わざわざ？」

「藪を探って蛇を出すこともある。用心に用心をかさねるのがわれらの役目ゆえに」

疑問を示す冴子にそう説明し、咸月は腕の時計に目をやる。消費された時を惜しむしぐさである。

「蔵所のほうへは私が案内を務める。まだ何か不明な点がおありか、冴子殿？」

「そおおおよねっ。あたしが悪いのよね、さっさと動けばいいのよね、えええっ！」

「気をつけろよ」

さらりと贈られた希沙良のひとことに、冴子は不意をつかれてまばたきをし、亮介も少なからず本気で驚いた。

後につづく希沙良の言葉はない。何事もなかったように、足元へ瞳をそらして。

「……ありがとう、気をつけるわ」

真顔で答えて、冴子は頑丈な扉をひきあけ、邸内へと踏みこんでいく。遅れずに一真がそれを追った。

「一族の神具を扱う蔵所はここよりさらに地下となる」

のこされた亮介と希沙良に向けて、咸月がおもむろにそう告げた。

「案内はするが、この先に見るものは今後とも、断じて口外無用に願いたい」

4

年若い術者ふたりを先導し、駐車場の一角に用意されているひろびろとしたエレベーターに乗りこむと、咸月陣は地下三階を示すプレートに指をふれる。自動車の一台くらいは軽く運べそうな大型のエレベーターだ……本来、人を乗せる用途のものではないのかもしれない。

「――崎谷？」

ぐんと重力に変化をおこしてエレベーターが降下をはじめたところで、希沙良が急に顔をあげて亮介を見た。たった今、そのことに思いあたったように。

「なんでおまえ来てんだよ一緒に？」

「ええっ……なんでって」

突然そんな科白を吐かれて亮介もうろたえる。

「なんでって……。い、いないよりはましかと思って」

「馬鹿。ましだからって危ない橋にのこのこついてくかよ、おまえ」

「……そうしたかったんだよ」

返答に困って亮介は口ごもりながら、小さくつぶやいた。

「俺、実際に自分が役に立つ自信はぜんぜんないから、そこつかれると痛いんだけど。……一

応これでも一大決心はしたつもりだから、できたら見逃してほしいんだけど」
「見逃すのどうのって話じゃねえだろ」
「う……う、うん。ごめん」
「なんかやたら気、つかわせて、ごめんな」
変わらず静かな——おちついた声音で希沙良が言う。亮介は先刻と同質の驚きを感じながらそれを聴いた。なんだか、今まで知らずにいた希沙良が目の前にいるようだ。もともとの彼がもつストレートさとは違う意味で、正直な……。
「そんなのは希沙良のせいじゃないんだ」
亮介の語気はやや厳しくなる。
状況への怒り……望みもしないのにつきつけられた酷薄な現実への、憤りだ。
「希沙良のせいじゃないんだ。誰かがっ……自分の都合とか利益だとか、羨みとか僻みとか、気持ちのねじれとか、そういうことだけで！　忍さんに罠を仕掛けたりするからっ!!」
「しかたねえよ。都合と利益と気持ちでうごくのが人間ってやつだろ」
淡々と、ひどく醒めたことを希沙良は口にする。それも真理ではあるのだが。亮介は我慢ならずに首を横にふる。
「だけど、ゆるされないことに自分でブレーキがかけられないんだったら、甘えてるよ」
「そうだけどさ、結局……バカにバカって言っても治らねえしな」

徹底して、希沙良は正しい。亮介は、わりきってしまえぬ気分のまま、その先へ言葉をつなげられなくなる。自分の腰の後ろに両手の指をかけて、大人びた姿勢で希沙良がつけたした。

「だから本当に治らねえバカとは、戦って、力でたたきのめして勝つしかねえんだろうな。おまえは性格優しいから、それじゃ納得できねえだろうけどさ……」

「……でも俺、キレると怖いんだってさ」

「ああ……」

身に覚えがある希沙良が、そういえばと神妙に顔をしかめた。

ゴォン、とものものしい金属の反響音をたててエレベーターの大扉がひらいた。その瞬間に、万全に稼働しているエアコンの冷気とは別にもうひとつ、それとは性質のちがう、すうっと心を洗われるような涼しさを亮介は感じとる。

浄化の空気？

「ここは結界になっているんですか？」

思わず、亮介はそう咸月へ問いかけた。この、いっさいの汚濁の念を隔絶し、かぎりなく清浄に保たれた場のありかたは。

（霊場）

斎伽忍が彼の身のまわりにつくりだすものと同じだ。六本木における、彼の居城をはじめとして。

「いかにも。妖異の侵入をゆるさず、不心得者の目を曇らせるために、つねに符をもちいて霊場を生じている」

咸月は事務的に答えるが、亮介の眼力にやりにくさを感じていたことは否めない。優秀な能力をひけらかす意図が亮介にあればまだ、その卑しさを嘲笑えもする。しかしそういった相互の差異を、純然と、はじめから視野にいれていない人間を前にしてしまっては。

「感嘆するしかあるまいな」

「え……はい？」

言葉の真意をつかめずに亮介がふりかえる。

「頑にわれらのまもる血筋より遠く外れた位置に、むしろたやすく類稀な能力をもちあわせる者もあるかと……。その事実は我々も正しく知らねばならぬ」

一方的に、独白まじりに告げて、咸月はエレベーターの外へ歩を踏みだす。

穏やかな色合いの絨毯がしきつめられた廊下がまっすぐに、ひたすらに奥へとのびている。進む足音は完全に吸収される。生活の気配がしない、まるで博物館や図書館のように静まりかえった空気。おちつかない思いで亮介はぐるりと視線をめぐらせながら、咸月の背後につづいた。

「みなづきどの」

可愛らしい、つくりものめいた女性の声が発されたのは、その意表をつく一瞬のことだっ

た。

（ええっ!?）

ぎくりと心臓を鳴らして亮介は立ち止まる。

明らかに、一秒前まで誰の姿もなかった、間近。

目の錯覚をおこしたかと疑うほどだ。

長い廊下の途中に、彼女たちは水干に似た揃いの衣裳を身に纏い、ただ可憐に、かたちよく首をかしげて佇んでいた。

髪の結い方もそっくりな、若く淑やかな女性がふたり――。

「ゆう、と申します」

「まい、と申します」

「わたくしども、蔵所の護りを今宵つとめまする祭女にございます」

「蔵所へお越しの理由、つまびらかにしていただきとうございます」

順々に口をひらく、その声もどちらの女性からのものか渾然としてわからない。

「内聞に伏すべきことながら……この者の身に念じて仕掛けられた外法、その呪者に反す術を教示もらいたい」

彼女たちの出現に驚きはみせず、咸月がそう返答する。祭女と称するふたりはちらりとお互いの顔を見合わせ、小さくうなずきあった。

「みなづきどのの仰せになる反呪の法、わたくしどもの触れるものにありませぬ」
「うごかせるものにありませぬゆえ、この門前にてのおひきわたしは叶いませぬ」
容易に受諾されるとは、咸月も初めから期待してはいない。伽羅王の威光を盾にとり強硬に迫るつもりだったのだ。
が。
「お手渡しはございませぬ」
きっぱりと断ったのちの、彼女たちの告げた言葉は……。
「かくなれば御門をくぐりなされませ」
「何？」
愕然と、咸月が双眸をみひらいた。
「どうぞ御門をくぐり、自らによって求めるものへ辿りつかれませ」
「わたくしどもでは位が足りませぬ。斎女どのにお会いなされませ」
簡単にそう促しながら、ふたりはするすると左右にあとずさって道をあけた。
その、祭女たちのしりぞく動きと同期して。
がらりと亮介の目前に、重い石門があらわれた。何もなく、ただ一直線につづくと見えた廊下の中央に。幻の膜をひき剝いで、真実の姿をさらけだす。
（肢まし？）

多重に用意された結界によって見事に覆い隠されていたのだ。そんな気配のかけらも感じられなかった。さすが『本家』なのだと、亮介はその熟達の術を支えるものを思う。歴史の深み、のようなものだ。問答無用の貫禄というのか……。

「お若いかた、おふたりはお進みを」

「みなづきどのはここでお退がりを」

左右から石門のかんぬきを引きながら、祭女たちがそれぞれに指示を与えた。

「何だと？　なにゆえだ？」

咸月が問う。あらかじめそれに対して用意していたかのごとく、にこりと彼女たちは微笑んだ。

「他愛もなきことにてございます」

「試みにひとつお尋ねいたします」

そしてその質問においては――祭女ふたりの声が同時に放たれた。

「あなたがたは伽羅王を祟められますか」

「……」

とっさに、誰に向けられた質問なのかと亮介はとまどう。あなたがた、と差すからには三人がみな答えなければならないのか。

「どのような謎かけだ」

眉をひそめて咸月がつぶやく。だが、彼女たちはじっと沈黙して返答を待つのみだった。
「俺には関係ない」
ひとこと、ひややかに希沙良が言った。
「あんなやつのことはどうでもいい」
「……」
それを聞く咸月はつよい不愉快を面に出している。ききずてならないが、だからといって今は罰するわけにもいかぬのだ。
「伽羅王こそは絶対のもの。その威信、侵すことはゆるされぬ」
当然のこととして、そう告げる。それが祭女たちへの回答となった。
のこされるのは亮介の答えだけだ。
「っ……」
厳しい、逃げ場のない緊張感が自分のほうへ集約されるのを亮介は感じとる。この質問は、じつはひどく重要な意図を秘めているのではないか――。
ふたりの祭女は、ただ静かにこちらの答えを待っている。
(伽羅王を崇めるか)
崇拝するべきだからそうするかというなら、迷わず否、だ。
彼を……斎伽忍を蔑ろにする心も、亮介にはない。

「忍さんは……大事なひとだし尊敬してます。俺は」
急がずに、かみしめながら、亮介は言葉をつむぎだす。
「そういうのは、崇めるっていうのか知らないけど、違うような気がする」
三つの回答は提示された。祭女たちは別段の感想も述べず、そのひとつひとつをあるがままに聞き届けた。
「おわかりになりましょうか、みなづきどの？　さても他愛ないことにございます」
片方の祭女が笑みとともに言う。
「では御門のひらかれしのちは、なおさらに、心弱くなられませぬよう努められませ」
もう一方の祭女が後につづけた。そのすずやかな声の終わりきらぬうち――。
「！」
門が。
（のみこむ）
硬い、石の門が実際にひらいた姿は見られなかった。たちはだかる景色はそのままで。
（闇）
星のない夜の冥さ、真実の闇。
刹那に、おしよせる漆黒の視界に亮介は掬いあげられる。足元が消えて上下がなくなる、墜落感。

「希沙良っ……！」
離れてしまわぬようそれだけ叫んだ。
一陣の風！

突風の吹きぬけたあとに咸月陣は瞳を上向ける。すでに石門の存在はなく、祭女たちも消えうせてしずまりきった長い廊下には、二名の術者の姿もまた、決して見出されはしなかった。

5

「冴子殿か」
武蔵野方、執政役――すなわち屋敷の実務をとりしきる最高責任職といえる――但馬永玄老人は、あからさまに鼻で笑っただけだった。
「じゃじゃ馬も程を過ぎればご家名に疵をつける。心得ておかれたいが？」
「よく心得てございますわ。何をもちましても、忍様が、じゃじゃ馬な冴子をお好きだとおっしゃるのです」
これでもかと反発心をこめて冴子はそう切りかえす。

「忍様が。さようですか」

ふふふと低い息を洩らして但馬は、まるでおもしろおかしいことのように忍の名をつぶやいた。外側だけは殿勲だが、老獪で気障りなくそじじいであることは間違いない。この老人にかかっては七瀬忍さえも己の四分の一の年月しか生きていない若僧、なのだ。

本心ではむしろ厄介なお荷物とまで思っておきながら、表向きは一応へりくだっておく、そこが冴子にはつくづくと度しがたい。

「母君を恋しがるのも結構だが、いかんせん、この宵の刻に突然では困る。どうせなら忍様の寝所にでも赴かれてはいかがか」

「無礼者!!」

決然と、冴子が鞭のごとき一声を放った。

はは、と弱ったしぐさで但馬は両手をあげてみせる。

「冗談ですぞ、冗談」

「ご冗談がたいへんお下手でいらっしゃる。二度と聴かされぬこと願いますわ」

容赦せずに冴子は鋭い言葉をたたきつける。めんどうな翻訳作業ぬきで、ふざけるなくそじじい、と蹴ってやれれば楽なのだが。

「そう、爺ばかりを嫌われめさるな。毒もまた薬、清い水ばかりでは魚も泳がぬといいますでしょう。但馬は、さしずめ大河に注ぐどぶをうめる泥ですゆえ」

「それはそれはまったく御苦労様ですこと」
腐敗臭を発するのは勝手だが他人をまきこむなというのだ。
(だから、どぶがどぶのままなのよ)
喧嘩をしに来たのではない。言いたいこともある程度は、抑えておかねばならなかった。
「あなたとお話をしていたいわけじゃないわ。あたしが母に取り次げと言ってるのよ。どこに姿をくらましてるのあのひとは」
「伊都子殿もご静養を乞われてのこと。お騒がせはなりませぬでしょう。明朝、但馬よりご伝達を」
「ばかいわないで。今から朝までなんて待てないわよ」
「あきらめられるならそれも結構」
睨みあいになる。
地上三階の特別応接室、但馬のかける安楽椅子の背後に飾られたルノアールが、ぴしりと軋みを起こしたようだった。
扉の傍らに控える遠野一真はその様子を目にして、さすがに介入を試みる気分にもなれず、傍観者の立場に徹している。遠慮会釈の吹きとんだやりとりに辟易する心があったのも確かである。
仮にも相手は本家中枢における執政役。多少の攻め口ではひとゆらぎもしないだろう。

（長老たちとのつながりも深い）

くえない老人だ。

咸月陣が一真にあえて冴子との同行を命じたのは、聡明な判断であったかもしれない。冴子ひとりでかみつくには、ややクセのつよすぎる相手だ……。

「なぜそうも急がれるかな？　たかが母君への取り次ぎ。そうも血相をかえられるとは異なことに見える」

但馬が言う。悠然と、豪勢な椅子にもたれて。

「いきさつはあるわ。でもあなたに喋っていいことじゃないわ」

和泉希沙良の助言どおり、へたな口実はつくらない戦術で、頑強に冴子は話をおしとおす。

「娘と母の話よ」

「ふふふふ」

こらえられずに但馬が笑った。

「美談ですな、ふふふふふ」

「失礼ね但馬殿？」

「いや胸をうたれましてな。ははは。忍様の術者がひとり攫われた件にて、ではないのですな」

「！」

おもわず息を呑み、その反応こそがまずいのだと悟って冴子はざっと一歩、但馬との間を占めるデスクからあとずさった。

（しまった!!）

どこまで事実に絡んでいるのだ、この老人は？

一真もとっさに部屋の外につながる扉を引きあけている。場合によっては脱出路を確保しなければならない。まさか強硬な策で足止めをくらうとは考えたくないが——。

だが、上質な樫の扉をひらいた先には分厚い鉄鋼の色が覗いただけだった。くっと呼吸を詰め、一真は鈍い光沢のシャッターに握った拳を打ちあてる。響く音すらない。

「但馬殿！」

どういうことかと厳しい声を投げかける。

「逸るな、若者。用心だよ、ただの用心だ」

「不粋にはありませんか!?」

老人の言いようを信用する気分は一真にも初めからないのだ。

「冴子殿。但馬の立場にありますと、いろいろなものが自とみえてまいるのですよ」

ひろい机上に両手をくみあわせ、皺の刻まれたその指に顎をのせかけながら但馬が言った。

「みえるものに蓋をするのが爺の役目にありましてな。敵をつくらず味方にされず、企みごとには近づかない、これが長生きの秘訣」



「だからどうしたのよ」

「覇権をとるに価しない者は勝手に潰れる。足をすくわれる者には初めより才がない。それらのものが喰いあおうが一族全般の安泰にとっては小波、さざ波にすぎぬ。多少、金払いの番付けに変動があるだけですからな」

しかし、と但馬は皺の奥の両眼に、残酷な光をやどらせる。冴子でさえもたしかに圧迫される、歴史を生きる者の……凄じい気魄である。

「しかし大波は困る。大波をたててはならぬ」

「……」

きつく唇をひきしめて、冴子は老人の決めつける言葉をうけとめる。

「なるほどね。あたしたちのやることが大波だっていうのね」

「に、なりかねぬのですな。すくなくとも、術者一名の身柄などとは秤にかけられぬ」

「攫われた人間なんてどうでもなれって話?」

「勘違いめさるな。攫われておらずとも、どうでもよいのだ。術者も道者も〈妖の者〉も、ぶっちゃけてしまえば一族にとってはほんの側面の事情にすぎぬ。われら一族総体、ひいてはこの国内経済総体の保持と、あなたがた一握りの子供の遊びとの、どちらが重大であるか考える暇も要らぬはず。違いますかな」

「自分たちばかりが、安全なところにいるからって……!」

隠しだてようのない怒りの念を冴子は吐きだした。
「遠野殿、よく聴いとくといいわ、こんな不敬な連中がお飾りなだけの忍様を崇めたてまつるのよ!!　口先でどれだけご立派なことをおっしゃっておいてもね!!」
「妖者との大戦など、しょせんは異形と異形の戯れあいにすぎぬ。九堂の血など絶やしておけばよかったのだ！」
冴子の糾弾する声よりもさらに、老人の断じる言葉のほうが重く容赦のないものだった。
そして但馬は臆面もなくにやりと好好爺を装った笑みを浮かべてから、言をつなぐ。
「忍様をお飾りとは、冴子殿も口が悪い。わたしはあのお方を気にいっておりますよ。長として立つにはご充分に賢く、しかも人心をひきつけるに足るお美しさ」
斎伽忍を品評するような言辞を、畏れず率直に述べて。
「カリスマというやつですな」
そう告げるのも但馬の偽らぬ本心であるらしい。それすらも冴子には皮肉に届く。現実に、そのような才覚をもちあわせて生まれてきてしまったのだから仕方がないと……忍自身のかかるがると満たす、王の条件をこそ恨むべしと。
（誰のせいだっていうの）
それとも。
誰にも、罪はないとでも。

「いざとなれば」

憤りにふるえる、激情にかられて、弾劾がおこなわれる。いくら責めたてたところで何も報われはしない——現実を動かせはしないとわかっていても。

「きれいごとも、いざとなれば！　忍様を狂った者と呼んで！　それで終わらせるのよ、あなたたちは!!」

「そう思われぬようあのお方が努力なされることは、肝要でしょうな。たしかに」

冴子の怒りは老人の手前でそらされ、決して効果を及ぼすことはない。

大声を出せば気持ちが発散される。それだけだ。ばかばかしい。

白熱した心臓をおさえこみ、深呼吸で息をととのえてから冴子は顔をあげる。理不尽へのつよい怒りは挫けさせず、ただし冷静に。

「なら話を戻すわ。但馬殿の狙いは？　あたしたちをこうして閉じこめて、但馬殿には何の利益があるのよ？」

「爺は大波を防ぐので精一杯。狙いなどとだいそれたものはない」

しらじらしく但馬は嘯く。そのうえで、狡猾な、おどけるような表情をつくった。

「ですが、お大切な冴子殿の身柄が但馬の手元にあっては、忍様もそう軽率にうごけますまいよ」

「っ……!!」

牽制につかう気なのだ。忍へのデモンストレーションとして、ひそかに！

「あなたというひとはっ……!!」

今度こそブレーキのかからない激昂とともに冴子が叫んだ。そのとき、だった。

ガゥンッ!!　と鈍い揺動が一真のすぐ目前から室内をつらぬいた。

地震ではない。爆発？　はっと瞳をみひらき一真はそれを知る。重厚な隔壁を一気に砕いた鋭い力――強烈な波動!!

（銀色の光）

光、として実際に知覚できたかどうかはきわどい認識だ。一瞬の残像として灼けつく。

ゆるぎなく行使され、溢れる、本物の。

術力。

「さて、お迎えの時間ですよ、シンデレラ」

砕いた扉の空間からひょいと頭をのぞかせて呑気な科白を吐くのは、もしかしなくてもやはり水沢諒である。すかさず、ぎっとそちらを睨みつけて冴子が言いかえす。

「何がシンデレラよ!?」

「このへんで、いいかげんお嬢様なバケの皮がはがれるのは冴子さんでしょ。あらまあぴったり」

「んなことだろうと思ったわよっ」

「すみませんがお話、ひととおり拝聴させていただきました」

右肩に朱雀剣の刀身を掲げたかたちで――いつでも、どこに向けても攻撃を放てる状態ということだ――但馬翁を眺めやり、あっさりとした調子で諒は呼びかける。

「なんにも聴かなかったことにする代わりに人質解放とゆーのはいかがでしょうね、ご家老殿？」

「いやはや。この但馬の特別室、一介の術者に突破されるとは思わなんだ」

老人は鷹揚に、あくまで愛想よく、自分の首をすくめてみせた。

「どうせ但馬の考えごとき伽羅王はもとよりご承知であろうよ。しかし、小さな悪戯というのは、白日にさらされては悪戯にならぬもの」

「そうそう。事前にバラしとけば仕返しされることもないわけで、一安心。つーことで帰りますよ冴子さん」

それから遠野殿もね、と諒はいちおう年長者に気をつかってみる。どんな扱われ方を遠野一真が望んでいるかはわからないので。

「帰りますよじゃないわよ」

上から命令しないでほしいのよねと愚痴をこぼしつつ砕けた出口のほうへ足を運び、ふと冴子は去り際にふりかえる。

「但馬殿！　結局あなた母の居場所は知っているの、どうなの？」

「さあ。どうでしょうな」
知っている、のだろう。
だが教える義務も意向も、彼にはない。
「他を当たったほうが早そうなんだがね、シンデレラ」
冗談めかしながら実は真顔で、諒が催促する。急いで退散しないと逃げきれなくなるのだ。
やむをえず冴子も口をつぐみ、諒の背後をすりぬけて部屋を出た。この場合に異議をとなえる筋もなく、一真もそれに従って退出する。ふたりが通りぬけるまで諒は砕かれたシャッターの断面に左手を添えて動かず、そして最後に但馬翁への言葉をのこした。皮肉ではなく、正直に。
「あなたのようなじーさまが本家に居座(いすわ)っておられると心強いですよ」
「ははは。枯木が居座るぶんには何の苦労もいらぬのでな」
気安く老人は笑って答える。なるほど若い王様の居座るぶんには御苦労な場所というつもりか。でわ失礼、と左手をはずして諒は扉の穴から身を翻(ひるがえ)す。一秒後、不可視の結界によって支えられていた鋼鉄壁の残片と天井の建築材が、煙塵(えんじん)とともにどさりと崩れおちて扉のあった場所を塞(ふさ)いだ。
「どうするのよ？」
「まずは駐車場」

応接室を出てすぐ間近のエレベーターを手首の振りで示して、諒が短く行き先を告げた。
「大丈夫なの？」
エレベーターは外から止められる心配がある。下向きの矢印がついたプレートに手を触れながら冴子が確認する。
「まだあと二分は警備（セキュリティ）が動かない予定」
「信用できるんでしょうね」
「とっても大信用のはず。冴子さんは特に」
ひらいた扉のなかに素早く彼女の背中をおしやって諒がそんな答え方をした。冴子は無言で、だがハッとその意味に気づく。
「遠野殿」
諒が一真を先に促し、それから自分も箱のなかに乗りこむ。無駄な間をあけず冴子がボタンを押さえて扉を閉め、エレベーターは高速で地下一階まで到達する。
（一介の術者に突破されるとは）
但馬翁も、そのような科白（せりふ）で含みをもたせておくあたり、さすがというべきか。
どれほど優秀な術者であってもひとりだけで本家の内奥まで、たやすくノーチェックで入りこめるのはおかしい。よほどの、天の助けでもないかぎり。
「狡（ずる）いわね」

「……なぜ俺がそこで睨まれねばならん」
むくれる冴子に諒も不満な応答を返した。
「ぬけがけかましたわね。あたしが電話番してる隙にっ！」
「だからなぜ俺が恨まれねばならんのだ」
「うるさいわね、あたしをさしおいてあのひとと仲良くする人間はみんな敵よっ!!」
「誰が仲良くしとるかい、こきつかわれておると言わんかい、俺のこのありさまはっ!!」
遠野一真には今ひとつ解釈不可能な怒鳴りあいがあり、それでもエレベーターが地下に到着すると諒が一歩先に立って、彼らは駐車場までの経路を迅速に辿ってゆく。
「咸月殿？」
地下駐車場に踏みいったところで一真はそこに咸月陣の姿を見出した。すでにエンジンは始動させた状態でＢＭＷのドアを開放し、こちらのことを待ちうけている。咸月に同行したはずの、和泉希沙良と崎谷亮介の二名はどうしたのか？
「咸月殿の車で先に脱出しておきなさい。俺はまだ少し走りまわらねばならんのだ」
口早に、諒が冴子にそう指示をくだした。咸月にも話をつけてあるのだろう。冴子は一瞬、車の手前で立ち止まる諒のことを振りあおいだが……そのまま頷いた。
「わかったわ」
大信用、の言葉を素直に飲むしかあるまい。

「よし、急ぐべし。あと五十八秒」
冴子の乗りこむ助手席の扉を外からばたりと閉ざすと、
「たのみます咸月殿」
運転席の咸月に対して諒は丁重な声を投げる。
「承知した。貴君も用心せよ」
そっけなくも、それなりに友好的な意味あいの科白を咸月陣は返した。後部座席に一真がすべりこみドアを引くのと同時に、BMWは最速の勢いで駐車場を発進した。
「咸月殿、彼らは別途に脱出したのでしょうか？」
「いや。彼らは蔵所へ入った。しかしこの先のことは委ねるしかあるまい」
問いかける一真に冷静な調子で答え、咸月はそれ以上を説明しようとはしなかった。
「妨げにはなれぬ。事態は、もはや我々だけのものではない」

6

自分を知る、のは、あきらめるということに似ている……。
漠然と、希沙良はそう考える。
何がたりずに、何ができないのか……。どうして、自分だけが必ず足元を縛られるのか。

（刷りこまれた――約束）
（補いあう――有効な、力）
だから何だ？　と思う。
心のかたちがどうであろうと、現実の姿が変わることもない。たとえすべてが打算ずくでも、精神的になんらわかりあえる部分がなくても、それでも自分と彼のあいだに血縁と術力という二つの条件があれば里見十九郎は確かに隣にいただろう……遠野一真の告げるような意味あいにおいて。
だが、たったそれだけの関係なら。そうして術力の性質を支えあうだけの関係なら。なぜ飢えるほどに心を占められなければならないか――全存在がなくなるほどに揺さぶられなければならないのか。そんな必然はないのだ。うわべだけの冷たいつきあいで充分だったはずだ。
（俺だ）
対をなす力や、従兄弟という関係や、そういった外側のあらゆる条件を隠れ蓑にしてきたのは、むしろ。
（俺がやったんだ）
赤裸々に事実を暴かれて衝撃をうけるのは、自分こそが罪人であるからだ……。

「希沙良？」
亮介が呼びかけた。
かろうじて影を見分けられるくらいの、濃い暗闇が周りを包んでいる。
「大丈夫か？」
声のした方角をふりかえり、希沙良はそう呼びかえす。
「無事、のはず。そっちは？」
シルエットを頼りに、亮介は希沙良の傍らへと歩み寄った。空気は全体にひやりとして、少し肌寒い。
「心配ない」
短く希沙良が答える。暗すぎて自分の様子さえ、実際にはわからないのだが。まずいことになっているという気持ちはなかった。
いったい、自分たちは現在、屋敷のどのあたりに位置しているのか。そもそもここはまだ武蔵野の屋敷の内なのか。
「なんか光るもの持ってないのかよ、おまえ」
「今、俺がそれ訊こうと思った」
懐中電燈とはいわないがせめてライターのひとつでもあれば、と考え、亮介はなんとなく十九郎のことを思いだす。まったく、あの人物の用意の良さの半分でも見習っておくべきだ、自

分も。

「あれっ。――里見さんって煙草吸う人？」

「何言ってんだよおまえいきなり……」

「あっ、ごめっ……。いや、勝手に、まさかそうなのかなって思っただけなんだけど」

自分の無神経な話の出し方に気づいて亮介はひどく後悔した。なるべくなら今、希沙良には彼のことなど訊かずにいるべきなのだ。

「知らねえよ」

暗闇のなかでぽつりと希沙良が言う。

「本当に、知らないこと多いんだよ俺は……」

「……。ごめん」

「あやまってんじゃねえよ、俺が可哀想だろ」

「ごめん」

「……もう一度それ言ったらてめえタコ殴りな」

「う……ええと」

さすがに亮介も詫びる声を行きづまらせた。

ふと、そこで希沙良は背後へと視線をめぐらせる。

風がゆらいだようだった。

（だれかが）

人の存在を感じて亮介も顔を上げた。はっきりとはわからない、が。

女性？

ぼうっと清らかな灯が不意に浮かびあがった。地面の数箇所から。間隔をあけて置かれたいくつかの燭台に、すきとおるように静かな……白い炎が点ったのだ。

つよすぎず、あかるすぎない、不思議と熱を感じない、ただ純粋な光だった。

そして。

「よく、ここへまいられました」

いつしか光のなかに佇む、ひとりの女性が口をひらく。

優雅な、淡い藤色の衣を身にまとう姿が、おのずと高貴な立場をつたえた。まずなによりも、幻と化して消えさってしまいそうな彼女の透徹した美しさが、この場においてただならぬ役割をもつ人物であることを雄弁にあらわしていた。

年齢も素性もまるで読めない。けれど確実に、彼女自身の格の高さを感じるのはなぜだろう。

オーラの違い、か。

「わたくしが蔵所の護りをつかさどる斎女。呼称は、薫とでもなされればよい」

（かおる？）

一瞬、亮介はその呼び名の一致にどきりとする。偶然なのだろうが。
「あなたたちが何を求めてここまでいらしたかは、わたくしにもわかっています」
さらさらと流れる澄んだ声で、彼女はそう告げた。
押しつけてくる力はない。線の細い、とても柔らかな話し方をする。
「とはいえ呪(まじな)の遡行(そこう)はたいへん心をくるしめるもの。あなたには――」
言いながら、斎女は瞳をまっすぐに希沙良へと向かわせた。
きづかうのではなく事実として、彼らの企(くわだ)てのゆくすえを知らしめるために。
「苛酷(かこく)なこととなるでしょう。何をご覧になろうとうけいれる心が、あなたにあるのならばよいのですが」

第三章　よみがえるもの

1

広い空間だった。
思ったよりもずっと。
ゆらめく燭台の光に照射されて輪郭をあらわにするのは、幾重にも立ち並ぶ、背高い木棚の骨格。
古めかしい匂いが周囲を占める。博物館の裏方に迷いこんだような……。
「こちらへ」
燭台をひとつ、足元から取りあげて斎女が促した。
「あなたたちも灯りを、ひとつずつお持ちなさい」
言われて亮介もおそるおそる白い炎に手を近づけた。どうしてこんなに澄んだ光を、蠟燭の火が発するのかわからない。蠟ではなく、何か特別なものを燃やしているのだろうか。
「マグネシウムってこれくらい真っ白に燃えるよね……」

「花火だろ、それじゃ」
希沙良には相手にされずに終わってしまった。すいませんと頭をさげて亮介は燭台をとりあげる。希沙良のほうが何十倍も冷静でいるらしい。
特にどこへ行くとは告げずに斎女はするりと衣の裾をなびかせ、暗がりの奥へ進んでゆく。
希沙良がそれにつづき、亮介はその後ろに従った。
「訊いてもいいか？」
先をゆく斎女の背中に、希沙良が臆しない声を投げかけた。
「どうぞ。なんなりと」
「なんで斎伽忍を崇めない奴だけがここに入れることになってる？」
七瀬本家の中枢で――。
踏み絵にかけるなら、逆ではないのか。伽羅王への崇拝をこそ条件にすると考えるのが、普通だろう。
「斎伽忍、というものは居ないのですよ。正しくは」
やわらかく、ひそやかな口ぶりで、うつくしい斎女が返答する。
「斎伽は一族の異名。忍の名はあのものが自ら選んだ隠し名。総じて、架空の名前。あのものの本質は空なのです」
「……」

あのもの、と呼びすてる、その醒めた表現に亮介は少なからず驚く。つきはなしている。

本家の内にありながら。

「あなたたちはあのものを神とは見ない。それこそが正しい」

進む足どりはゆるめることなく、ふりかえることもせず、彼女は語る。

「あれは化生のもの。神にあらず、鬼性を身内に宿したもの。鬼性に呑まれて消えゆくさだめ。ひとのかたち失うまで、檻にとざし、封じおかねばならぬもの」

希沙良にもおおむね同感できる内容とはいえ、だが彼女のもちいる言葉のすさまじさには圧倒されざるをえない。

(ひとのかたち失うまで)

ばけものだと思いはするが、死ぬまで檻に入っていろとまでは考えつかないのだ。さすがに。

「あなたたちはあのものを一度、封印の闇より再生しましたね。なぜですか」

すべてが彼女には知られている。

亮介は歩きながら、厳しく眉をしかめた。なぜ、と問われるなら……。

「そうしたかったからです」

人の都合や利益がそこにも働いたのは確かだけれど。

それは亮介の本心とは別の、だれかのところに必要だったものだ。亮介自身の心が求めたのは、ただ……。

「忍さんひとりに、逃げてほしくなかったからです」

「あなたたちは、くるしみの道を選びました」

立ちどまり、斎女はそこの石敷きの床に、自分の運んだ燭台をおろした。

「かかりくる呪法も、難事も、すべてあのものがいまだ世に在るがゆえ」

その足元には一本の線が描かれている。薄くうかびあがる朱の塗料でひかれた線が、彼女の置いた燭台の位置を頂点に、六十度の角度で左右へわかれる。

（正三角形）

一辺が二メートルくらいだろうか。

「そんなふうには思いません」

はっきりと亮介は断言した。

「生きているからいけないなんて理由、認めはじめたら、便利すぎる。そういうのは凄く、忍さん以外の誰も悪くないようにするための言い訳みたいで、ずるい。忍さんが何か悪いことをしたならそのことを悪いといえばいいんだ。誰だって生きてるのが悪いっていいだしたらきりがなくなるんじゃないですか」

「あのものの魔性を、あなたも身をもって知っている……」

ゆれる光のなか、斎女はいとわしげに貌を曇らせる。
「あれは相克の具現となるもの。避けがたい宿業です」
「でも忍さんはそれでいいとは思ってないです。自分のせいじゃないとも言わない。責任をとるひとだ、自分で」
だから彼は死すら選び取ってしまったのだ。亮介は今、そう理解している。
彼自身の心から乖離したところでなされた非道なおこないの、責任を負うためだ。
「何にしたって、まさかこっちの頼みを聞くかわりに斎伽忍をどうこうしろって話じゃないんだろ？」
希沙良がひややかな声をはさんだ。
はっと亮介はその言葉に目をひらかれる。
そんな可能性もあったのか。考えてもみなかった。
「いいえ」
しずかに斎女は首を横にふった。
「ねがいはなにもありません。ただ、あのものを神と見ない者ならば……ここへ来るまでの偽らぬ意志を信じられましょう」
お仕着せでない、自発的な意志であるということなのだろうか？
抽象的な言葉に注釈は与えず、彼女は足元の三角形の、それぞれの頂点を掌でさししめす。

「あなたたちの灯りを、わたくしのものと同じように置きなさい。炎の三角を描き、反呪の法の枠組みとします」

「……」

亮介はおもわず、どうするかと希沙良の顔をうかがった。

「やるしかねえだろうが」

希沙良が燭台を下におろす。どこか、達観したような物言いをしている。

「今一度あらためられましょう。あなたに向けられた呪を、解除するのみでなく、源となるものへ『返る』――遡り、読みとくことをのぞむのでしたね」

「それはできることなんだろ？」

「有効な、考えです。今のように呪者にまつわる情報が得られていないときは殊更に、正しい選択です」

斎女は首肯する。希沙良を止めだてするべきとする思考は、彼女にはないのだ。

だが希沙良という対象に肩入れする立場にも、彼女はない。合理的かつ客観的に、彼女は言葉をつなぐ。ただし、と。

「ただし呪を遡行するとは、あなたが、あなたに向かうあらゆる念と対峙するということ。現在のあなたの心のまま、挑みをかけるとすれば……」

その忠告――いや、宣告だ――に含まれた冷徹な響きに気づき亮介が表情をこわばらせた。

斎女はそれに影響されず、そして自明のこととして予言する。
「あなたの精神にそれらとたちむかう強靭さはありません」
耐えられはしないと。
おごそかに。
「あなたは破壊されるでしょう」

2

ゆらゆらと、膝をついた地面がうごいている……。
おかしなことだ。足元がさだまらず揺れているなんて。どうかしている。
(変なこと)
地面というものはいつでもきちんと一つ処に留まっていなければ……。
どこかで、ぴしゃりと不思議な音がした。耳の近くだったようだ。何だろう? じんと熱のようにつたわる感覚があり、少しずつ奥に浸透する。痛み?
「!」
かっと呉葉は激昂した。——頬を叩かれたのだ自分は!
「恥知らず!! 女の顔を平気で殴る男なんて!!」

「正気に返ってもらえたなら何よりだ」

怒鳴りつけた相手からは、謝罪のかけらも含まれない返答があった。

つづけて仮借のない罵りをぶつけようと口をひらき、呉葉はそこで愕然と凍りつく。

誰と話しているのだ、自分は？

（ここは）

うずくまった床の揺動がやまないのは、船が海上にあるからだ。そうだ、クルーザーは確かに出航したのだ。そして自分は今、見覚えのある船室のなかにいる。なのに。

「待って」

かすれた声で呉葉は口走っている。

「少し待って……」

頭の芯だけが過敏に違和感をとらえて、何がいけないのかわからない。おかしくなってしまいそうだ。混乱したきり戻れなくなりそうだ。

「……あなた怪我してるわ」

実感からはずれた気分のまま呉葉はぼんやりと呟いた。

ちょうど呉葉の目が向かう位置に彼の、左肩があるのだ。良質なシャツの布地をたやすく裂いた衝撃の痕と、まだ乾きもせずにそれを染める血液の色が、はっきりと認識に刻まれる。重傷なのか——生命にかかわるのか？

「この程度では死なない」
低い、おちついた里見十九郎の声が呉葉の耳に届いた。
「死なないように狙ってある。初めから」
「……そう。死ななかったのね」
うわのそらで確認し、呉葉はその自分の言葉の中身をつかむためにまばたきをする。
(愚か者)
何を惚けているのか。呉葉は掌をふりあげ、精一杯の力をこめて自分の頬へ打ちつけた。
二度目の痛みで、わずかにでも平静な心が生まれてきた気がする。唇をかみしめて呉葉は厳しく、誇りの傷ついたまなざしを持ちあげた。
自覚はしなければならない。陥れられた、己の姿というものを。
「高浪はどこにいったの」
閉ざされた船室に、反逆をおこした家庭教師の影は見つからなかった。
夢であればいいと思う。
価値のなくなった荷物のようにあっさりと呉葉の存在をきりすてて、かまわずに発砲したのだ。あの家庭教師。何でもいうことをきく、地味で、使い勝手のいい女だと思ってきたのに。
「俺を操るための呪をつかわなくても、俺を利用する手段はあるそうだ」
十九郎が答える。

「出番がまわってくるまで大人しく待つようにとのことだ。君も、それを聞いたはずだ」
「……憶えてないから訊いているのよ」
いらだたしく呉葉は手元の床に握った指を押しあてる。
「いったい何のつもりなの……高浪は。あたしのことを、あたしを裏切るなんて、主人を見捨てて釈明もしないなんて、ゆるされないわ、絶対にゆるさないわ！」
「咸月家のご息女を騙しておけるうちは体裁も繕うが、その必要がなくなれば相応の扱いにおとすということだろう」
「っ……」
よくもそんな優しくない言い方ができるものだ。呉葉は憤然と身体がふるえるのを感じた。もっと同情されてもいいではないか。これほど不可解な、思いもよらぬ目に遭っているのに！
「この状態が自分のせいでないと考えるのは、やめたほうがいい」
呉葉が何も反駁しないうちに、里見十九郎はさらに容赦のない言葉を口にしてみせた。
「騙されたのは君だ」
「!!」
我慢ならずに呉葉は、すぐ間近にいる彼のことを本気で殴りつけるところだった。
ざわり、と棘に似た荒さが意識の表面にふれさえしなければ。

（あ）

理屈にはならない領域で。

本能的な閃きによって呉葉は自らを抑えねばならなかった。

――おそろしかった、のだ。

（この男……!!）

叫びたくなる。はねつけないと完全に威圧され、呑まれたまま終わってしまいそうだった。

外側だけではわからない、呉葉の憤りなどでは太刀打ちのならない、芯からの灼熱があるのだ。彼のなかに。

決して露にならぬ、胸内に隠した激甚な刃だ。

ひどい偽りだ。

「卑怯者っ……」

歯がみした、おしころした声を呉葉は洩らした。

「自分ばかりに、怒る権利があるつもりでっ……!」

「権利という問題じゃない」

無事な右の手で左肩をおさえながら十九郎はゆっくりと呉葉から身を遠ざけた。

生半可に呪を強化するより、てっとりばやく本人に傷を負わせて集中力を殺ぐ、高浪葵のやりくちは確かに効果的といえる。動きを拘束する呪に対して、精神力によって抗するすべを十

九郎が見出すなら、その精神を支えきれなくなるくらいの肉体的打撃を与えてバランスをとるという考え方だ。

そうして実際に銃弾を放たれてしまえば、十九郎が呉葉を盾にとりつづけられるはずもない。

ただでさえ自由のきかない身体が、現在は十九郎自身にとってどうしようもなく鈍く重い物体と化している。

出血の量は危機的なほどではない。死にはしないだろう。すぐには。

（まだ生かしておく意味がある）

その、高浪葵の最終目的こそが問題になる……。

呉葉からやや離れた船室の壁際に十九郎は腰をおちつけ、呼吸を整える。

ともかく、呉葉に正しい状況を知らしめなければならない。現実がどれほど非情なものであってもだ。

「企みの裏側にまで目を届かせなかったのは、俺の甘さでもある。最初から君に、君の行動がつくる隙について、少しでも忠告しておくべきだった」

本来のやわらかさをわずかに取り戻した語り口で、十九郎はそう切りだす。反発する気分をのこしたまま呉葉は眉をひそめた。

「隙？」

「伽羅王の失脚を――」

そこでふと十九郎は表現を改める。

正直な、心に従った呼び名のほうがふさわしい。きっと。

「斎伽忍という人の……事実上の失脚をのぞむ者に、君のおこした行動がどれほど好都合かと考えてみればいい。術者である俺が、咸月殿の身内にあやつられて不祥事をおこしたなら……あのひとの掌握するふたつの機関の、それも責任を負う立場の人間が、同時に醜態をさらしたことになる。一族のなかで、あのひとの独立に反対する勢力にとっては、自分たちの手を汚さずに伽羅王の立場を追いつめて自由な動きを制限することができる……またとない好機だ」

「……」

にわかには理解しがたい表情で、呉葉はふつりと沈黙した。

斎伽忍の失脚？

（わからない）

一族が伽羅王の自由を縛る、という概念が……。

まったく腑に落ちない。

なぜ伽羅王にそんなものが必要なのか。

まさか一族の在り方と、伽羅王の自由なるものは両立しないものだとでもいうのか。よもや伽羅王は一族を――自分たちを厄介者扱いしているのか？

わからない。

「つまり君は、表で動かすのに格好の人材として目をつけられた。おそらく、偶然ではなく、そう仕組まれたんだ」

うけいれようとする意識が呉葉にないことは察知しながら、十九郎はあえて彼女の屈辱にふれる指摘をつけくわえた。

「この件には咸月呉葉という人格は関与しない。咸月家の人間としての属性をもつだけの、操り人形だ。身代わりは他にもいる。そういう役回りだ」

「嘘」

鋭く呉葉が否定の声をあげた。

「嘘よ。あなたたちが不敬で、過った者だからっ……だれかが正義をおこなわなくちゃならなかった、それができたのはあたしだけよ」

「どうしてそこに呪を使う必然がある？　正しいことを、隠れた場所でおこなう理由はないはずだ」

「だって術者に有効なのは呪の力しか――」

「そうじゃない。ただ、呪を使うことができると唆されたからだ。その手段があると教えられたからだ。君の判断ではないだろう。違うのか？」

「あたしは――」

自分も考えたはずだ。なすべきことを。正義を。呉葉は唇が凍りつくのを感じる。正義を遂行するべしと決断したのは自分だ。

だが、やりかたを考えたのは……。

「だって……だって、咸月家の者なら武蔵野から呪具をもちだすこともできると聞いたから……」

「虚言だ。君のあつかった呪は咸月家の名前だけで許されるたぐいのものじゃない。本家の中枢にしか置かれない、門外不出の法と呼ばれるものだ」

「そんなこと知らないわ」

「事実上、実行したのは君だ。何も知らなかったとしてもそれは変わらない」

「うるさいっ……!!」

呉葉は癇癪をおこす。おいつめられて居所がなくなる心地になっていた。十九郎は冷たい。わざと人をきずつける、意地の悪い言い方をしているようだ。

「うるさいわあなた、なんでそんなにいやなことを沢山言うのよ!? だからってどうしろっていうの!? 後になってから厭味みたいに、あたしを馬鹿にしてっ……!!」

「現に、呪を仕向けられた人間がいるんだ」

つきつけられた、そのひとことが彼の怒りの本質を担うものだった。呉葉がおもわず絶句するほどに。



痛烈な。真の、怒り。

（だれのために）

呪の矛先がむかう対象は巧妙に選ばれている――。

（和泉希沙良）

そう、だ。呉葉はぼんやりと思いおこす。

高浪の仕掛けた呪殺の念によって和泉希沙良の命運は、こちらの掌中に握られている。

（ずっと呪を解除せずにいたら、いずれ……）

今もなお、その悪意の陥穽は継続する。

（死に至る）

そうして人質をとるだけでも充分に十九郎の行動は規制できるであろうと、高浪が……たしかに、言ったのだ。

「……高浪は、盾につかうのね、それを」

かすれた声で呉葉はつぶやいた。

混乱の感情よりも、薄寒い不安のほうがじょじょに強まってきていた。

きりぬけようとする余裕を、目前にいる十九郎から現在は感じられないためではないのか。

（何？）

ただ負傷の苦痛に参っているというような、そんな解釈は、この人物にはそぐわない。

何だろう……。
「どう、するの？」
尋ねる呉葉に、十九郎は即答をしなかった。
熱をもった身体の重みを背後の壁に預け、両の瞼をとざす。わずかな険しさとともに。
「自分の『出番』までは、生きのびることを考えるさ」

3

燭台にゆれる白い炎が、希沙良の瞳にあざやかな反射をおこした。
一閃の、きらめきが残る。
（――破壊される）
その指摘を与えられても、なんら驚きもしない自分を希沙良は感じている。
疑問も反発も覚えない。
（俺は弱い）
とても脆く――そして小さい。
「わかってる」
答える。

（俺はものすごく甘えてつくられてきた）
（やさしくつつまれて生きてきた）
求めるものに満たされて。欠けた部分は補われて。できないことは委ねて。そうやってここまできた。
それを、なければよかったものとは思わない。
しかし弱さは現実にある。意地や虚勢だけでは、覆い隠せはしない。
「だからって魔法みたいに強くなれやしないだろ」
願って手に入るつよさになど限度があるのだ。
未知の世界と触れることでしか得られないものや、経験によって積み重ねるものが、きっと……。
「今の俺には、これで最大なんだよ。……仕方ねえよ」
「希沙良……？」
不安げに、亮介が問いかけた。
斎女の警告に対して、希沙良のその言いようはあまりに、無防備で。
怖い。
「わかってる」
自分の手を——右の掌をみつめながら、希沙良はつぶやく。亮介が何を言うよりも先に。

「ここで俺がぶっこわれたらあいつが泣く」
「……」
シンプルなひとことに亮介はとっさの反応を失った。
「泣かねえかな」
自分の言葉に呆れたような、かすかな笑いを希沙良がこぼした。
「……泣くよ。それは」
亮介は顔をしかめ、低く答える。
「でなかったら、泣けない、くらい、悲しむ人だと思うよ」
「ヘンなこと言うなあ、おまえ……」
「だってそうだろ」
少なくとも俺は泣いて怒るだろう、と亮介は思うが、希沙良に告げはしなかった。今は、彼以外の涙について話しているのではないから。
「希沙良がおかしなことになったら、本当に、本当に心の底から、ものすごくきずつく人、だよ。そんなの絶対だろ」
「絶対なんて知らないけどさ……」
じっと掌をみつめる視線は外さずに、希沙良は淡々と言う。
「どんなかたちでも、俺のせいであいつ泣かしたら最悪だよな……だから、俺もぶっこわれた

くはないな」

「……って」

亮介はなんだか圧倒されてしまっている。希沙良がどれほど自分自身を把握した状態で言っているのかは、わからないのだが。

そんなふうに考えられる希沙良は、充分につよい。そう思う。

（どうすれば）

正直だ。とても。

（じゃあ、どうすれば）

何か、できることがあるなら。

「薫さん……！」

ふたりを見守る斎女のことを、亮介はふりかえった。

「希沙良にむかってくる念とぶつかるのは、希沙良ひとりじゃなきゃだめなんですか。つまり……あの、それの半分でも俺のほうに回すとか、そういうふうにできないかって……無茶かもしれませんけど」

「半分……」

面白い言葉を耳にしたように、斎女はうっすらと微笑を宿らせる。

「思いきったことを考えるのですね」

「……だめですか」
「ええ。だれであろうと、自分の心の置き場から逃れるわけにはゆきません。そうたやすく他人に任せられてしまうなら、それはもはや心ではないでしょう」
整然と諭されて、たしかに異を唱える糸口もみつからない。亮介はもどかしく唇を結んだ。
「べつに、半分ひきうけてくれとか、んなことは頼まねえよ」
隣から希沙良がぼそりと言った。
「それ抜きで、とにかくおまえ一緒にいろよ」
「は？」
亮介は両の目をみひらいた。
「一緒にって……いるよ」
「おまえだったら、まあ、俺がぶっこわれないくらいには見張ってられるだろ」
まるで当然のこととして希沙良は決めつける。
（簡単にいうけど）
いきなり、そんな抽象度の高いレベルで信頼をおかれても。
「かまわないのですか」
その希沙良に対して、おだやかに、斎女が問いを発した。
「あなたがみずからの意識へ潜行するのに、他者の介在をゆるしえるなら、その途もあります

よ。けれど、だれしも、ひとに内面を覗かれるには抵抗があるものでしょう……」

「あっ……え？」

亮介はどきりと胸を鳴らした。

（できるのか）

どうやら可能なのだ。そういったかたちで……意識の内において一緒にいること、などというものが。それがいったい、具体的にどんな状態なのかは考えもおよばないが。

なにか、瓢箪から駒がでるような、意外な話のすすみかただった。亮介は傍らの希沙良のことを仰ぎみる。

「はじめから言ってんだろ、俺は……」

斎女の質問に、希沙良はなんら揺らぐ気分をうかがわせもせず、つまらないといわんばかりに、答える。

「何だっていいんだよ……」

4

真夜中の——。

暗い非常階段を、足音をたてないスニーカーがかけおりる。

走る速度はゆるまないが、すでに、ぜいぜいと呼吸はくるしげに乱れている。Tシャツの背中も汗だくだ。必死に全力で走ることなど、普段はめったにないからだ。

「たく、冗談じゃないよっ……！」

愚痴とも泣きごととももつかない独白を洩らしながら。

「大丈夫だっていったじゃんかよバカ呉葉っ……」

たよりない手すりをつかみ、踊り場をまわりこんで、地上一階までの残り十数段を一息に消化しようとして。

うわっ、と声をあげて彼はその半ばに立ちすくんだ。

「律儀にいちばん下までまっすぐ来るか。知恵というものがないな、きさまは！」

待ちかまえるのは、隙のみあたらない、頑健なからだつきの人影。

明石川耕宇である。

「う……」

その場でおもわずスニーカーを一段上に後退させかけ、しかし咸月楷はそれから先の動きを失った。どうしていいかわからなくなってしまったのだ。

「楷！　呉葉はどこにいる、どういうことなのだこれは！」

「知らないよっ」

つかんだ手すりに縋るように身体をちぢめて、叫びかえす。

「何も知らないわけがあるまい」
「知んないから知んないってんだろおっ」
「そうか」
「わわっ」
痛い痛いいてえよ、と楷は悲鳴をあげた。楷のしがみついた手すりの位置まで明石川が階段をのぼり、無造作に少年の首ねっこをつかまえてひきずりあげたのである。
「なにすんだばか、暴力反対だ、乱暴っ、くそばかーっ！」
「大馬鹿はおまえだ！　考えなしに騒ぐだけではずかしいと思わないのか！」
「ちくしょう呉葉に、呉葉にいいつけてー、おまえなんかーっ」
「いいつけてどうする」
「痛、痛いって、痛い痛いっ」
硬い手すりに背中をぐいとおしつけられて、そのまま階段の外側に突き落とされそうになる。実際に落とされたとしても死ぬほどの高さではないのだが、ともかく腕ずくの抵抗がまったく通じないことに楷は怯えを感じている。
「くそうっバカヂカラっ……呉葉は、呉葉はおまえよりあいつのがいいってさっ！」
「誰の話だ？」
「だから……」

「何も知らないとはとても見えないぞ」
「っ……」
本当に背中が手すりをのりこえていきかけて、楷がぎゃあと身も世もない叫びを発した。
「やめてやめてごめんなさい、ごめんなさいってー」
「おとなげないな」
明石川の背後で両腕をくみあわせて、不破武人（ふわたけひと）がぽつりとつぶやく。非常階段の上方から挟みうちにするかたちで、ここまで降りてきていたのだ。不機嫌に明石川はそちらを眺めやる。
「俺がか、こいつがか？」
「両方だ」
「うわあああんごめんなさいごめんってばよおおっ」
武人が現れても、要するに怖い相手が増えただけである。楷はすっかり全面的に降伏して泣きわめいた。
「言っておくが俺は一発も殴ってなどはいないぞ」
明石川は仏頂面（ぶっちょうづら）で武人に念をおしながら、ふるえあがっている楷の身体を階段のうえに無造作にほうりだした。
「突き指もしないか」
冷静に、武人は肩をすくめた。自分でネタにしてどうするのだ、と明石川はげっそりとした

顔をする。

「隠れる場所が安易すぎたな、楷？」

武人が呼びかける。横浜の港にはごく間近な、咸月家の顔がきく系列の高級シティホテルにエグゼクティブクラスの部屋を偽名でとり、それで立派に潜伏したつもりでいたらしいのだから舐められた話である。

「貴君の兄上はたいへんご立腹だ。つかまえたのが人の好い私と優しい明石川であったことは、ずいぶんと幸運なことだと思うが」

「ううう……」

「おとなげないのは不破のほうではないのか」

相棒のひらきなおりぶりに明石川は呆れるが、楷を庇うわけではない。むしろ、陰にこもって無謀運転に走られるよりはこのほうがましだと考える。

「若気の至りというものだ」

「……おい、よせ。きさまがいうと眩暈のする科白だ」

しらける明石川にはかまわず、

「楷、クルーザーに同乗しなかったのはなぜだ。身を隠したのは己の判断か？」

むだのない口調で武人が楷に問いただした。

「う……ええと、呉葉が」

「そうしろと言ったのだな？」
「うん。一緒に来ないでいーから二日くらい隠れてろってさー……って、やっぱ俺が見たらやばいこと、するからじゃないのー？　コドモは見たらいけません、だ……あはは」
「くだらぬ言い方をするな」
　がつんと握り拳で明石川が楷の頭を小突きとばす。武人は、その暴力については見て見ぬ態度を通した。
「呉葉嬢の考えはどういうことなのだ。それは少しでも聞いているのか？」
「えーっ。なんかしんないけど、正義に燃えてるんだろ。呉葉っていっつも自分だけ偉いつもりでさあ……」
「おまえがいつも人任せに動くのがいけないのだろう！　まったく、いくつになっても呉葉にべったりで物を考えないのだからな！」
「だってほんとに呉葉が勝手に……。高浪もー……。俺はただ所沢で里見つかまえる手伝いしたら、そしたら新しい単車買ってくれるってゆーからー……」
「報酬が単車一台か」
　それだけの条件で疑問も抱かず動くのだから、確かに扱いやすい人材だ。武人はにがにがしく、明石川と顔をみあわせた。
「今一度きくが、呉葉たちの行き先はどこだ。それさえ言えばおまえのばかな真似もなかった

ことにしてやる。どうだ」

厳しい声音で明石川が言う。

ごまかしたら、腕ずくでひどい目にあわせるのも辞さないとする様子である。

「ううー……ええと」

「もちろん貴君が話したことは、呉葉嬢には内緒ということにしてもいいのだが？」

武人がだめおしを与える。

「ああ、あの、伊豆の別荘がおさえてあるって高浪が言ってたの聞いた」

見事につるりと回答が出てくるのだから、尋問している武人たちの胸中にはなんともいえぬ疲労感が漂う。はじめから、この少年に秘密をまもらせようとする試みのほうが困難なのではないか。

「伊豆か。熱川の先に咸月家の別邸があるのは事実だ」

「よし！」

楷の襟首を片手でつかみすぐさま追跡の準備にとりかかろうとする明石川に、ふと、武人は表情の一端をくもらせた。

「しかし、距離があるのは難点だな……。行ってみた挙げ句に屋敷が空では、洒落でかたづかぬ」

「それを考えはじめたらきりがないぞ」

また不破の悪い癖が、と明石川はいらだちをおもてに出す。
「立ち止まっている場合ではなかろう、そう悠長には構えていられないときなのだからな！」
「一刻を争うからこそ不用意な動き方はできぬのではないか」
「そうしている間に右も左も取り逃がすことになるのだ、不破の常道だ！」
歯に衣きせない明石川の非難に武人は眉間をしかめるが、大掛かりな人手を使って捜索にあたれるのならともかく、今は隠密に事を運ぶのが大原則。つまり一族各家の目にふれぬことを前提において動かねばならない。走れる駒が自分たちしかいないとなると、このまま伊豆まで直行していいものか……。
「ええとですね」
ふわり、と。
新たな声が非常階段の真下から放たれた。鋭い反応で、武人と明石川がふりかえる。
「何者か」
「失敬。お話、立ち聞きました。忍さんちのバイトの水沢ですが」
長身の影が、姿の見えやすい位置にまで歩み出してきて、身元を——とんでもない表現ではあったが——あきらかにする。武人は瞳をみひらいた。術者の水沢諒、か。
道者側と別行動をとり、これまでどこで何を探っていたかは不明である。
「ちょっと相談にのっていただけますか。どうもそちらの坊や、こっちに情報を流すためにわ

ざと泳がされた気配があるので」

同年代の男相手に坊や呼ばわりも奇妙なものだが、諒は気にしない。

「何だと？」

明石川が問いかえした。その腕につかまえられた楷も、ぽかんとしている。

「少し簡単すぎる。そういう、いかにも秘密の守れそうにない人間をあっさり野放しにしますかね……」

「贋の情報を与えて、われらに捕えさせたのではないかというのだな？」

きまじめに、武人が確認する。こちらの目先を攪乱するには、ありえそうな策と思える。

「そゆことです」

諒が頷いた。

「実は、所沢のお屋敷でこのお坊ちゃんの姿がまんまと見かけられてるあたりからして、怪しい。坊やがへまするのを計算に入れたうえで何かたくらんでる人がいる、可能性が、あったりして」

「呉葉がか？」

「かもしれないし、もしかすると」

勢いこむ明石川に、諒はやや慎重に声を落とす。

「もっと悪い人かもですね」

「それは貴君の判断か？」
意味ありげに差しむけられた、武人の質問は、さすがに状況の要点を突いたものだった。軽く、夜の静寂のなかで諒は口元に笑みをかすめさせる。勘の良い相手と話すのは、たのしい。緊張感がクセになるのだ。
「いえ」
諒の返答に、対峙する道者ふたりはそれぞれ息を呑むように黙る。
「うちの雇用主の、単なる思いつきですがね」

＊＊＊

足元の三角形。
静かなまなざしで希沙良はその淡い線を眺めやる。
「なあ、俺って可哀想か？」
「え？」
脈絡をとばした希沙良の話し方に、亮介もそろそろ慣れはじめている。
「なんで可哀想なんだよ？」
「女が言うからさ……」

「じゃあ、きっと、そう言われる理由はあるんだ」
「てめえ冷たい奴だよな」
「だってそんなふうに言いたい理由があったってことだろ……その人にはさ」
亮介は正直な気持ちで答える。
「俺に訊くより、言われて希沙良がどう思ったかによるよ」
希沙良が可哀想であるかなんて亮介にもわからない。
可哀想と思うかと問われると、実は少しつらい。以前に、里見十九郎と話しあったことが脳裏にのこるのだ……。
「俺、幸せになれるだろうかと思ってさ」
不意に、希沙良がそんなことをつぶやいた。
ぐらりと胸の中心がゆれるのを亮介は感じる。激しく、よこなぐりに誰かの腕が心をつらぬいたように。なぜだか、一度に泣きだしたくなる。
泣けないけれど。
(何が)
実際には、何が幸せなのだろう。本当にはどうなれば幸せといえるのだろう。
幸せに、戻れるか、とは希沙良は言わないのだ。
(戻れない)

先へ、先へすすみつづけるだけだ。いつでも。永久に。進行する時間のなかに身をおいているかぎり。

（保証もない）

空約束はできない。きやすめも欲しくない。

（誰にもわからない）

「何、言ってんだよ、馬鹿……」

小さい子供相手にするように肩を抱いてやりたいと思った。背中をたたいて大丈夫だよと告げられたらよかった。だがそうして引き受けられるものが、どれほどあるだろう。

何が自分たちを救うだろう。

「俺だってわかんないよ、自分がどうなるかとか……。でも希沙良が戦うなら、俺も俺なりに戦うことはできる」

同じ方法はとれなくても。

自分なりの役目を、はたすために、戦うことはできる。

「希沙良が幸せになろうと思って戦うんだったら、一緒に戦うことはできる。俺の戦い方は、すごく内向きなやつだけどさ……」

「……」

亮介の言葉の意味をのみこむように、希沙良は短く瞼をとざした。

「幸せになれってさ……気楽にキツいこと言うよな、母親ってやつもさ」

「――――」

今度は亮介が沈黙に陥る番だった。

(遺した声)

(もうどこにもいないひと)

やわらかく穏やかに、希沙良が言うから。

責めるのではなく。優しさでとらえるから。

「どうすりゃそうなれるかは教えてくれないんだもんな」

腰の後ろに両手の指をあてて、溜め息まじりに希沙良は笑う。笑った、はずだった。

「希沙良っ……」

亮介の手がその一方の腕をつかまえる。我慢ならず、力をこめて強引に。

「絶対に大丈夫だ!! 勝とう!! 俺たちなら、勝てる!!」

責任だとか、確証だとかは今はもういい。

一緒にそれを信じたいと思うだけだ。

「……絶対に全部うまくいくって、ばかみたいに信じて、勝とう……絶対に勝とう」

「なんか、おまえ人をけしかけるのがどんどんうまくなってくるよな」

「けしかけるって、別に希沙良だけ遠くで走ってこいって言ってるわけじゃなくて」

「馬鹿、けしかけたことにしとけよ。じゃないとおまえ、どうせ後々まであれこれ背負って悩むんだろ」
「あのさ……」
抗議しようとした亮介の頭に、ぽんと希沙良が掌をはずませた。いつも諒がそうするようなしぐさを——もっと無造作に、する。
「サンキュ」
「……」
亮介はとっさに再び、返す言葉をつまらせずにいられなかった。
まちがいなく希沙良は元のままの希沙良ではないと思える。何かが着実に変化している。けれど、それは希沙良の恐れたとおりのこと、なのだろうか？
「こっちのお喋りで時間つぶしちまった……。じゃあ、始めようぜ」
二人の傍らにひっそりと控える斎女を見返り、希沙良が改めて告げた。
急すでもなく、飽きるでもなく、奇妙な寛容さをもって、薫と名乗る斎女は彼らの会話を見守っていた。
彼女になんらかの意図があるのか、この蔵所を訪れる者への対応がすべてそうなのか……。全体に、彼女自身の立脚点は曖昧で、忌避感や拒絶の念、あるいは好意や共感といった、あきらかな心情をこちらへ抱いているとは思えないのだった。

「わかりました。呪の遡行を許可します」
事務的に答えて彼女は下方の炎に結ばれた三角へと、双眸を伏せる。
「呪をうけた者は囲みの内へ入りなさい。寄り添う者は、囲みの外からそのものに触れなさい――右の手から、左の手へ」
命じられた言葉に従い、亮介は三角の囲みの線を踏まないように外側に立った。
そして引かれた線の内側には、希沙良が。
足を踏みいれる。
おそれず。たやすいこととして。
(何を視るだろう)
外側にいる亮介に自分の左手を預けながら、いやに冴々とした心の底で希沙良は考える。
(おまえの)
塞がれてきたすべての――。
真実。

三角の頂点をつくりだす白い炎が、風の一吹きによって瞬時に立ち消えた。
「……!」

膝の下からどっと湧きあがる気の力が希沙良の身体を侵蝕し、昂揚と圧搾の谷間へと呑みこんでゆく。脚をとられて……すぐに腰から肩までと波動は昇り全身を強靭な爪でわしづかみにする。あらあらしく捉えて、引き摺りこむ……激しい混濁のなか。

「うあ、あっ……！」

どこへ墜落してゆくのかわからない！

遠い、遠い地面の底。

虚しい空洞の先。

うごけない。四肢の自由を閉ざされ、精神の内奥をひらかれて、渦を巻く闇のなかをただひたすらに落ちる——落ちる。

『希沙良!!』

うるさい。

鳴り響く誰かの声が、頭蓋をぐらぐらと揺らす。

（たす、け、て）

救けてくれ。だれか支えてくれ。

くずされて違うものになってゆく自分が。

陥落。

それきりになるまえに。

（――たすけ――て）
子供の姿の自分が泣いている。
（たすけて――十九郎――十九郎――十九郎、俺のっ……）
おまえしか。
おまえしか、おまえしかおまえしか要らない。
てのひらの内に。
ひとつだけ残ればいい。
溢れる涙。幻覚の渦にとりこまれて消える。
（おまえしかいらない）
世界中の最後には他に何も選べない。
（俺は狂ってる）
（眠りたい）
（止めて。おしまいにして）
（おまえだけいればいい）
（……たすけて）
この醜い妄執。寄り縋ることに慣れた……無自覚な、依存心。
「おまえがっ……こんな俺にしたのか、それとも……」

俺が。おまえをそうしたのか。
尾を噛みあう二つの蛇のように、何が先で何が結果なのか、ほどきがたく縺れているのかもしれない。因果を知ることなど無意味なのかもしれない。
けれどこのままではいられない。いられないから。
（俺は、おまえの、何――なんだよ？）
相手に尋ねる以前に、自分を知らない。
（おまえは――俺の――）
俺の心臓を。
所有するもの。
あらゆる星の輝きを一手にあつめるもの。
骨の芯にまで、原子のなかにまできっと刻まれている。でなければ生きていられないという、指令だ。魂からの命令。
（どうかしてる……）
もう、まともじゃない。
最初から足掻くだけ無駄な話なのだ。
（どこにいる？）
ようやく、その認識が閃いた。はっ、と希沙良は幻覚の只中に立ち尽くす。

おしよせる透明な波の揺動につつまれて、広漠とした、実感のない世界にいる。
果てのなく、孤独な……。
（俺が、優しくする）
（だれよりも優しくする）
（望みは、みんな叶えてやる。全部、叶えてやる）
それが、大事にするということだと信じている。大切にする——そして自分のいる意味をつくるということ。
違うのか？
「俺は勝手に、おまえに、ついていく……」
くりかえす。
つぶやく言葉はすべて淋しかった。
無限の心象世界のなかで、希沙良はただひとりだった。決してすくわれず、ひとりきりだった。
いったいどこまで、この淋しさの地平がつづいてゆくのだろう。
背後をふりむこうと意図するのにあわせて、足場なく浮遊する身体も、自ずから向きをかえて動いた。そのとき。
（！）

何かがはじかれる感触があった。すぐ間近で、薄い殻が破裂するような。
『うらぎりもの』
『冒瀆者。――〈空者〉伽羅王に背く者！』
厳然と裁く、仮借のない思念が勢いにのせてぐさりと全身につきささってくる。希沙良は無言で瞳を周囲に凝らした。
知らない人間の心……強い感情。
実際に切り裂く痛みを、のこすほど。
「冒瀆者……？」
冗談ではない。
まったくの、礼節も思いやりもないところから傍若無人に切りつける悪意の刃。
通り魔と同じだ。
『希沙良』
また、どこか別の遠い場所から呼びかける誰かの意識。耳元の振動。希沙良は重く唸る頭を掌でおさえる。うるさい。
『希沙良、いま触ったのが里見さんを攫った側のひとの気持ちだ、きっと』
懸命に意志をつたえようとする、声。
「……」

まなざしは鋭くとぎすましたまま、希沙良はゆらりと顔をあげる。そして、確認する。
「崎谷？」

＊　＊　＊

「では、この一件、やはり呉葉の首謀した企(たくら)みではないというのだな」
身をのりだすようにして明石川耕宇がそう念を押した。
「このままでは首謀者扱いされること間違いありませんが。それにしちゃ、ちょっと向こうにデータが多すぎる」
抑えた声で諒が答える。
夜風が潮の気配を含ませながら、襟元(えりもと)をふきぬけていく。夏の芳(かお)りを宿した空気が、おちついてばかりはいられない気分にさせる。
「というのはですね」
ちょっと借ります、と諒が突然に明石川の腕から、咸月楷の身柄をひょいと奪いとった。
「わわっ」
楷がうろたえた悲鳴をあげる。が、大騒ぎするまでの余裕はなかった。
後ろ手に肘(ひじ)がつかまえられたのが一瞬。

何が何だかわからない方角に、掟破りの早業で一息にひねりあげられている。
「えええっ!?」
「これね、ちょっと下手に動くとすぐぽきっといきますからご注意ね」
「わあばかばかやめろっ……!!」
「確かめたいんですが、あなたがた渋谷で、うちの亮介君のグラスに困った仕掛けをしてくださったでしょう。あのウェイターは坊やのお友達か何かで？」
「ええーっ……友達じゃねーよ……！　呉葉が金で雇ったんだろーっ……！」
奇妙なかたちにねじられた腕がへし折れるのを恐れて、楷は足踏みさえできない。
所沢で里見十九郎を捕えるにあたり、もっとも邪魔な和泉希沙良には呪を向け、他の術者にも『制裁』を与えて彼らの視線が一つ所に集まらぬようにする。策を練ったのは高浪と呉葉であって、楷は命じられたとおりのことをしただけだ。
「狙う相手は決まってたんでしょ。誰をつつけばいいのかというあたりは」
「だからそれはっ……高浪が調べてさーっ」
楷の言葉を聞き、諒はふたりの道者たちのほうをふりかえる。
「つまり……普通に調べた程度で、斎伽忍の足元を狙うならむしろ冴子やら俺のほうが標的になりやすいのではないかと。実際には、よほど深くこっちの事情を覗けば、崎谷亮介って人がいちばん我々にとってでかい意味のあることがわかる。里見さんを攫うときに和泉君をしっか

り戦闘不能にしておくとかですね、そのへんもひっくるめて、どうすればこちらの出足を挫けるか、あちらさんには非常に理解されてしまってると思えるのですよ」

「呉葉嬢が独力でそこまでやれるとは、正直、私も考えない。裏にそれだけの情報をもつ黒幕が存在するとして、彼女が自覚的にその者と結んでいるという推測はなりたたぬのか？」

不破武人が冷静な問いをさしはさんだ。

「それはない！」

「ないでしょうねえ。騙されてるでしょうねえ……」

怒鳴りつける明石川につづいて、諒も難しい顔つきで呟く。

意図して斎伽忍を陥れることを企んでいるなら、もっとうまいやりかたがあるだろう。

呉葉が呉葉だけの目的にとらわれて、そしてそれを裏から利用する者があるとすると……。

里見十九郎の状況は、さぞや厄介なものになっていると想像できる。彼のことだ、うまくきりぬけてくれると信じたいが。

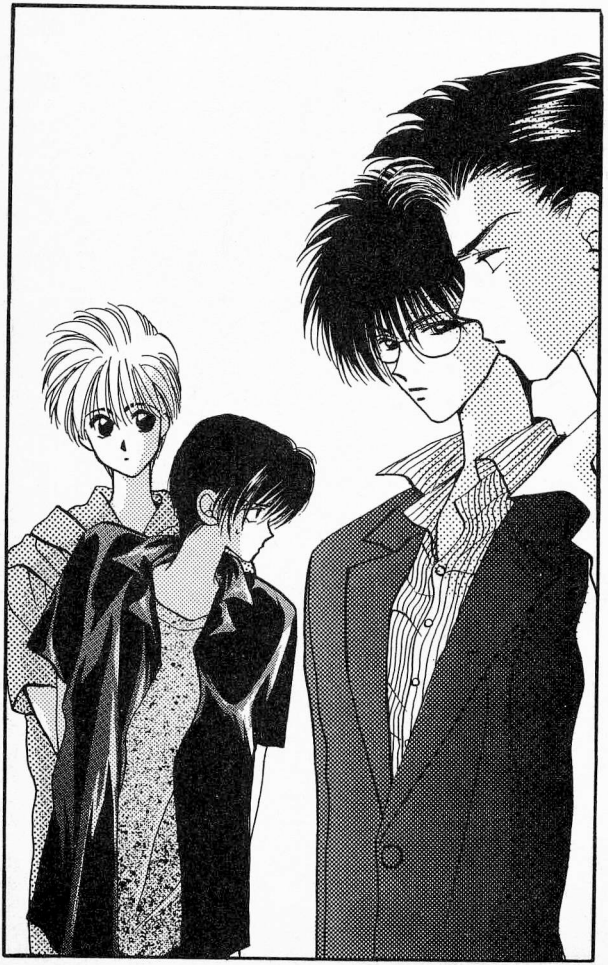
「結託しない、ということは呉葉嬢の身も危ういといえる」

眉をひそめて武人が言った。明石川がぎりぎりと奥歯を噛み鳴らした。

「だからといってどうすればいいのだ！」

「利口な動き方をせねばなるまい。それだけの、単純な答えしか今はない」

同僚を励ます口ぶりで静かに返答し、武人はすみやかに問題の結論を導いた。



「ではともかく、われらは楷の情報に従ったように見せかければよいのではないか。楷のもつ情報が我々の目を遠方にそらしておくためのものとするなら、敵はどこかで事を起こしたがっているのだ。こちらから機を作るのは有効な戦術のひとつと思うがどうなのか？」

「たすかります」

話が早いというやつだ。諒は力をこめて頷いた。

冴子がいうところの『馬の骨』を相手に、こうもスムーズに話をまとめてもらえるのはありがたいことである。斎伽忍の威光だけあれば片付く話、でもないだろう。

「伊豆にむかうのか」

「とりあえずはな」

「承知した」

明石川も不破の言葉に納得をする。

「で、このばかものはどうする」

諒にしめあげられたままの状態の楷を指差し、武人に尋ねる。

「そうだな。明石川の旅のお供にはよさそうだ。呉葉嬢へのいい土産になるな」

「うわあああっ」

シャレなんねえよと楷が慌てた。武人は肩をすくめ、そして諒に真剣な顔つきを向けた。

「われらの態度が敵に通用する時間は短いと考えたほうがいい。どうなのだ——真の敵は見破

れるのか」
「……まだ楽天的なことはいえませんが」
咸月楷の襟首を手放し、諒が答える。
必要な結果はまだ、出ていない。
だが現在の和泉希沙良には……強い守護がついている。ひとりではない。苛酷ではあっても、それきりで終わりはしないはずだ。
未来は、あるはずだ。

5

そうだ……呪を、読み解くという話だった。
呪が肥大した悪意であるなら、その思念のみちすじをさかのぼってゆけば呪を仕掛けた当事者にまで辿りつく。そういうことだった。
意識ははっきりしている。希沙良は自分のまわりを見回す。流れる水のようにゆらゆらと身体を浮遊させる、透明な、気の集合体。
（全部か）
ひとつの『悪意』どころでなく。

ここにはすべての想いがある。和泉希沙良という対象に投げかけられる、あらゆる想念をうけとめる受け皿、だ。

破壊される、と斎女は告げたが、その言葉から想像されるような、強圧的な力はここにはない。破滅的な暴力でずたずたに潰される、そんなわかりやすい責め苦になら覚悟もできた。だが、そうではないのだ……。

「俺が何に触ったって……？」

どこへ声を向ければいいかわからないまま、問いかける。

亮介の返答は、直接、脳の奥につたわってくるようだった。遠い場所から、けれどダイレクトにくる。

『ちょうど今、希沙良の動いたあたりにそれがあったんだ。なんていうのかな……蓋がついてる箱みたいに俺には見える』

「箱？」

嘘だろ、と希沙良はつぶやく。

『で、すごく変なこと言うけど、気のせいかもしんないけど、その箱の蓋にタイトルが書いてあるみたいな感じがする』

「……全然わからねえな」

希沙良の目にうつる世界と、亮介のとらえる世界は、根源から異なるらしい。感覚の強度の

違いなのか、希沙良の内面に対して亮介が第三者であるからか。
「タイトル？」
たしかに変な言葉だ。
『ごめん本当に漠然となんだけど』
「いいけどさ……」
この場所からどこに進むべきなのかも希沙良にはわからないのだ。
ゆらめく波の狭間に、薄く、泡らしきものがまぎれて見える。これか？　希沙良はゆっくりとその幻影にむかって右手の指をのばした。
ぱしりと、先刻と似た、破裂の感触がつたわる。
「！」
瞳にうつる景色が変転した。ざああっと全身がふるえる——総毛立つ、気分の悪さだ。

前髪をくぐりぬけて額にふれる、優しい、彼の手の存在を感じる。熱をおびた皮膚をさますもの。それ以上の快さを知らない。ほかのだれともくらべられない……決して何ともひきかえにならない、唯一のものだ。
『その前に俺を呼べばいいと言ってるんだ』

反射的にふり払うしぐさひとつで——ふつりと跡切れる再生。
愕然と、希沙良は凍りつく。
（俺の）
一分のずれもなく、くりかえされる。
たいせつな。
（記憶）
こんなものばかりが周囲を埋めるのか。はてしなく蓄えられているのか。
「崎谷っ……！」
自分の掌で両眼をふさぎながら希沙良は荒い声をあげた。怒鳴りでもしなければ耐えられない……おかしくなる！
「そっちで何に見えてんだよ、今のやつは!?」
『あ、あ、ごめんっ……よくはわからなかった、里見さんの声だとは思ったんだ……』
「どれが誰の声だとか区別できんのかよ?」
『それはわかる……っていうか、俺の知ってる波動なら読める。そうじゃないやつは、そうじゃないってタイトルがついてる』

「よくわかんねえよてめえの言い方……!!」

『ごめん……！』

亮介も必死になっているのだ。癇癪をおこしそうになる自分を、奥歯を噛みしめて希沙良はぎりぎりで抑える。

（弱いから壊れる）

何もしないうちにリタイアするわけにはいかなかった。歯の根が合わぬほど震えても……厭しい電流が身体の芯を走っても。

壊れることを警告した斎女の真意がようやくわかってきた。だんだんに、わかってきた。

（俺は神じゃない）

膨大なそれらをすべて受けとめることなんてできない。屑のように見過ごせるものならばともかく。容赦せず心臓につきささってくる想念の塊。求めてやまない名前。声。間近に在る息づかいと、触れる手のゆくえ。

なにもかも鮮明で。

（おかしくなる）

目を覆った指のあいだから、鬱陶しい泡の影が見える。発作的に、鋭く腕を振りおろして希沙良はそれを一断する。

『もしも術力を失くしたのが僕ではなく、君だったなら』

『そのときは』

うるさい。うるさい、くだらない!!

羨(うらや)みが敵意にすりかわる醜さ。

受けとめれば灼(や)けるほどに痛む。理不尽(りふじん)に浴びせられる、転嫁の念。

「うるさいっ……」

希沙良、と遠くで亮介が呼びかけた。

聴こえてはいる。反応しなければとは思う。

「……」

手をのばしてもすぐには届かない、やや遠ざかった位置に、気になる波動を希沙良は感じとる。

亮介のようにきちんと意味を捉える感覚ではなく。直感で。あるいは、匂(にお)いでひきよせられたというべきなのか……。

制止する信号がある。

うかつに触れてはならないと。

だから気持ちを逸(そら)せなくなっている。本能の働きだ。真実が、ひそんでいるのだ。

『希沙良!』

その選択に気づいた瞬間、亮介がはっと息をつめて叫んだ。

『希沙良、そっちにはっ……』

パンドラの匣だ。

やめさせるべきだったのか、正しいことだったのか、亮介にも実際にはわからない。

殻の砕ける音がした。新たな未知の景色が、さらに希沙良の認識をのみこんだ。

第四章　星を堕すもの

1

傷つけないことばかりを考えていた。
かなしませずにすむように。

するすると天より降下する、銀の糸。
絹の雨。
うつくしく嫋やかに——残酷に、季節を変えてゆく。
春雷。
『……おまえが思うほど、おまえは独りじゃないんだよ』
遠く、本心から曖昧に離れたところで、ゆっくりと、十九郎はそんなふうに口をひらいている。

ひどく重大な、運命をつきくずす意味合いをもつ言葉ほど、実際に告げたときにはあっけないものとなる。

胸の奥で震える心臓を、置きざりに。

他愛もなく、平面的な響きにしかならない。

（もう、おまえには俺は必要ない）

（俺はおまえを負えない）

どうしたらそんな想いを。

平然として伝えられるだろう。

『だから？』

不審そうに、希沙良が問いかける。

わかってなどいないのだ。この清浄な魂の主……。はてしなく疑いを知らない、無垢の信頼。

（俺は）

（おまえをひきうけていられない）

（戦わなければならないから）

違う。それは卑怯な言い方だ。建前になるものだ。

望んだのは自分だ。術者として、戦うものとして選ばれ、あの孤独な王が檻の外で生きるこ

とに寄り添いたいと願ったのは！

『希沙良』

きつく、いとおしく、その名前をかみしめながら呟く。

だが二度とこの名を呼べなくなるわけではない。これきり死に別れて、永久に逢えなくなるわけではない。

普通の間柄に戻るだけだ。

あるべき状態に。

『希沙良……いつまでも、俺にばかり頼っていたらいけないよ』

『……？』

言葉の意味をとらえそこねて、希沙良がゆるやかに、ふたつの瞳を見開いた。

無防備にすべてゆだねている。だから予測ができない。どんな断絶を告げ渡されるのか。

何を、十九郎が望むのか。

（うらぎりもの）

卻する、幻聴。

（俺を捨てていく）

そうじゃない。そうじゃない、希沙良、そうじゃない……。

縛られているのは、自由を失くしているのは、俺ではなくおまえ。おまえだ。

『俺がいなくても――ひとりで』

＊　＊　＊

「ねえ……。どうしたのよ、苦しいの？」

そんな風に呼びかけることに慣れていない、呉葉のぎこちない声が、意識を空白のなかからひきもどした。

「いや……」

否定の言を返したが、それは嘘だ……。無事にうごく右の掌をあげて十九郎は瞼の上からふたつの瞳を覆った。なぜ思い出すのだろう……何を気に懸けているのだろう。ふりむかずにすむのなら決して直視せずに、過去の奥底に眠らせておきたいこと。心をざわめかせ、傷痕を生々しく引き裂く記憶だ。

（何が起こっている……？）

希沙良に。

今すぐ、その、誰よりも近い場所へ戻らねばならない気がしている。一瞬で。今。

（叶わない――現実もある）

どうしても必要でも。意志の力だけを、どれほど強く研ぎすませても。

魔法のように奇跡が舞いおりは、しない。
望むもののすべてを完全に得られることはない。
なにもかも自分の思うとおりにと叫ぶのは、幼い子供の精神だ。そう、わかっている。
わかっている。
「どうしたの。あなた強い男のはずじゃなかったの」
厳しく眉をひそめて呉葉が言う。
「怒るのは……あたしを怒るのは、あなたの勝手だから仕方ないのよ。だけど気弱にはならないで！　そんなのおかしいわ……納得がいかないわ……」
気弱に？
なっているのか、自分が。
呉葉らしい非難のぶつけかたが、心にはりつめた緊迫の度合いをわずかにやわらげたようだ。十九郎は瞳を閉ざす指をほどき、痛みつづける胸元へと掌の位置を移した。
「昔のことを、思い出す……。それが不思議だったんだ」
独白のように静かに、彼女に呟く。
「人間は、死に際にはいろんなことを思い出すというけれど……」
「やめて!!　それが気弱だというのよ。こんな大変なときに自分だけ辛い気分に酔うなんて反則だわ。卑怯よ」

間髪をいれずに呉葉が叫んだのは重く巨大な不安をふりはらうためだ。どきりと心臓が揺れたのを、取り消すためだ。

「卑怯者。弱虫！」

「思い出すものが罪の意識ばかりだということは……君の言うとおりだろう」

十九郎は韜晦めかした答えをする。どの程度が本心なのか呉葉にはわからない。

（心臓の音）

くりかえされる——鼓動。全身でとらえられる、脈うつ熱さを、自分のものではないと十九郎は感じている。

（おまえが）

どこかで疾っている。

傷つきながら。苦しみに足掻きながら。ひとりで。

隣に、自分がいなくても。

「君の罪は、一族の思惑や企みのなかに身をおいたことじゃない」

見守る呉葉にむけて、十九郎はそっと語りかける。

「誤った情報を与えられたことでもない。それは君の力では拒めないことだ。君が君の家に生まれて育ったのは、君のせいではない」

誰にも、拒めはしない。

あらかじめ授けられた境遇は。
けれど……。
「君は、そのなかで、ひとりで立つことを考えなかった。君の間違いはそこにある」
「……」
抽象的な表現のされかたに呉葉は反発をしようと思うが、できなかった。
十九郎の言葉は呉葉を責めるものであるはずなのに、呉葉の胸に痛みとして刺さるよりもさらに深く、告げた十九郎自身へ返っている。それがわかるのだ……。
「……それはあたしと、誰の話なの」
尋ねた呉葉に、十九郎はかすかに瞳を瞠るようにして彼女のことをふりかえる。
罪深い者。その正体は。
手放せぬものと追い求めるものを共に心に棲まわせる……そうして軸となる対象がなければ決してひとりきりでは生きられない、脆弱な魂。
すべて明らかだ。
十九郎は唇をひらく。
「俺の話だよ」

＊＊＊

どっと温かい流れとともに、身体の芯から抜け出していく。生命の根源が。生気が。
不思議とそれは安らかで、爆発する光に抱かれたまま眠りについてしまえる気がする。だれにも疎まれず、何も喪わずに、優しい腕につれてゆかれる。もう、溶けこんでしまえばいい……このまま……肉体の宿りなど捨ててゆけばいい。

『裏切者』

なのに自分は泣いているのだ。希沙良はそのことを奇妙に思う。どうして惨めに叫ばなければならないか。どうして、悪意に尖った、鋭利な心で攻撃するのか。
彼を。
（いやだ、いやだいやだ失えないおまえを）
（離せない）
振り絞られた精神の発する思考は、我儘なだけの幼児のよう。
（おまえがいなかったら）
（俺のここにいる意味がない）
我儘で、身勝手で、ゆずらない。

だから真実にも最も近いと信じていた。

『十九郎……!!』

だがそこで彼を呼んでしまうのは、自分の狡さだ。

卑怯な、弱さ。

『たすけて——たすけ……て——たすけて、死んじまう……死……』

身体中から溢れ出す、巻き狂う強烈なオーラは、意識の制御を外れて暴走した術力。身をもってそれを抑えこみ希沙良の生命を救うことができたのは、対抗する術力をもった十九郎だけだ。

『目茶苦茶に、なっちまう……!』

そうして、ひきとめたのだ。

確かに。親しい従兄弟という名目で、唯一のよりどころを守りぬいたのだ。

そんな愚劣なやりかたで。

『大丈夫だ、大丈夫だ、希沙良……俺がいるから、俺がおまえにはついているから……泣かなくていい、大丈夫だ』

オーラの嵐のなかに立ちつくす希沙良の身体を、激しく両腕で抱きしめながら。

耳元にそう囁いた十九郎もあのとき泣いていたのだろうか?

微かな雨が降っていた。低く荒々しく、春雷が唸りはじめていた。

記憶の扉の彼方へ、自ら封じていた景色。
あのとき、の。

『おまえがくるのを待っていたよ』
白磁を細工してつくりあげたような、生身らしくない美貌の主が。
里見十九郎のことを迎える。
これは、希沙良の記憶にあるものではない。どこか別の場所で……希沙良のことを語ったもの。希沙良という対象に向かう想念だ。
希沙良が知る斎伽忍の像よりも、その姿はいくらか年若く見える。なめらかに伸ばした漆黒の髪を、浄めの紙紐ひとつで背後に束ねて。
（十七歳の――斎伽忍）
ひややかな叡智を秘めた双眸は、現在の彼よりも更に美しいほどだが、現在よりなお不幸せでもあるようだった。
『希沙良は、重荷だったか』
十九郎から何も聴かぬうちに、忍はすらりと言う。
あらゆることを見透かしている。彼は神であるから。忌み遠ざけられる、異形のものである

からだ。

『甘えです』

十九郎からは、そんなひとことが返された。

ごく短く、解釈のひどく難しい表現で。

『試練、なのでしょうか』

『それは私の決めることではないね』

忍は回答を与えない。

つきはなす冷たさはないが、うけいれる柔らかさもないのだった。そう在ることを求められているとおりに、彼は一族の首領であり、空者総帥であり……。

ただ、さだめに沿う神託のみを告げるのだ。

『あれは戦力だ。離すな』

『……』

十九郎の沈黙がわずかに、ふるえる。

何を感じていたのか。つらかったのか、あるいは笑いたかったのか。斎伽忍の言葉をどのように受けとめ、どう叶えようとしたのか。

表情を殺して。

彼が、呟く。

『そういうことであれば、救われます』

見てはならないものを見ている。
けれど、知らなければならなかった。
崩されなければならなかった、欺瞞。
ごまかしてきた、沢山の、甘えと依存と束縛と――。
（変わらない）
もう何も変えられないと希沙良は悟っている。
心の内で誠実を誓うだけでは。
何も変えられはしない。
現実というもの。過去と、いう事実。
つみかさなったものすべて。
（俺の）
（罪）
絶望的に巨きく立ちはだかる、自らの過ちから――逃れられはしない。逃れてはならないのだ。

斎伽忍は、知っていたのだろうか。どんな事態も己の力でもちこたえろと……そう告げに現れたとき、既に。承知していたのか。この記憶の巣に自分が到達すること。

初めからこれを見せようとしていたのか。

違う。違う、と希沙良は心に呟く。

自分は十九郎とは違う……。

神の意志など信じはしないのだ。あの哀れな異形のことばを、預言者のものなどと思いはしないのだ。決して。

(俺がここに来た)

だから。

誰も、恨みはしない。

これまでと同じ間違いは、犯さない……。

(二度と)

魂の奥底から熱い涙が溢れる。流れおちてゆく。真っ白な地平が見える。偽りのない自分自身の心。打ち砕かなければならない敵の存在を隠している。

(おまえが、いなくても)

絶叫を放てるのなら、そうしたかった。
喉がかれるまで大声で悲鳴をあげて、気がすむまで泣き喚いて、全身が壊れるまで。
無責任な衝動にまかせてなにもかも手放せるなら、誰が。
誰が、こんな苦しみ。
自分のかわりにひきうけるものか!!
「崎谷っ……!!」
鋭く、呼ぶ声を奮い起こして、希沙良は虚空に向かい問いかける。
「教えろよっ!!　どっちにあるんだよそれは!!」
『まっすぐにっ……』
逃げ出したいのは亮介も同じだったはずだ。
直視など、したくはなかったはずだ。
だが意識を逸さずに亮介はそこにいる。いて、くれた、のだと希沙良は気づく。
『希沙良が、まっすぐにいけばいい、希沙良が一番わかるところにあるっ……！　他のものにはかまわなくていいから、そのままいけばいい……！』
まっすぐに。
感じるとおりに。
「……だからてめえが泣くなよ、馬鹿」

口の中でつぶやいて希沙良はゆれる波動の先へ、瞳を向かわせた。
自分に、一番わかるところにある。
異物。
まとわりつく想念の海に希沙良は分け入ってゆく。轟音と化す大量の、異様な響きの、心をくるわせる耳障りな喋り声を無視してゆく。

(怨)
ぽつりと、落とされた墨のように。
醜く描かれた染みのように。
(怨、怨、怨、怨)
ゆがんだ正義を訴える、凝り固まった濁りの意識。
(冥路、黄泉)
(参れ——参れ)
ひらひらと翳される、うつくしい羽衣の影。
毒を孕む蝶の羽にも似て。
(妙法)

（極紫の、舞衣の）
踊り。
おどらせ、る。
死への誘い。

黒の軌跡を見る。どろどろと迫る低劣な念の色。
人を呪うものは自らを汚穢のなかに貶めると、知らずにいるのか。心得ながらなお罪業に身を投じるのか。
何の為に？
大切な、ゆずれないものの為なのか、それも？
（虚しい）
直観的に、そう感じる。
ゆずれないものという大義名分のもつ、我執。
最後には誰も、自分のためを思うだけだ。自分の満足を願って、やるのだ。
ならば初めから、正直であったほうがいい。
「幸せになりてえよ……」

幻想世界の、涯のない天空を仰ぎながら、希沙良はゆっくりと呟いた。
何が、幸せか知らないけれど。
（なりたい）
そう願うことだけが今は真実だった。そう思いつづけられることだけが今は強さだった。
『勝とう』
肩を並べる、同じ高さには、励ましあえる人間もいる。
泣いてくれる人間もいる。
『絶対に、勝てる』
天上からの救済が与えられなくても。
（それが本当だろう）
（神の力になんて救けられないのが、本当だろう）
（戦って、勝たなきゃ嘘だろう）
傷ついて血みどろで打ち勝って、そして迎えにゆく。
獲得する。自分で。堂々と、誇りたかく、抜け道も楽な方法も使わずに。その、くりかえしだ。
でなければ、手にしたものを信じることなどできない。
（呪の中心）

黒い柱となって希沙良の内部を侵略している。棘のついた銛のように架空の皮膚を深く貫き、くいこんでいる。

「崎谷」

闇色の悪意の前に佇み、希沙良は最後の確認をする。

「もし俺が、わけわからなくなっても、ちゃんとおまえは見てろよ……あいつらに伝えろよ」

『希沙……っ』

「頼むよ」

瞼をとざして告げた希沙良のひとことに、亮介も抗議の声をのみこんだ。

負担をおしつける逃げの気分と、たしかな覚悟との違いくらいは亮介にもわかる。

『わかった』

「大丈夫……」

目前に突き刺された暗黒の柱に手をのばしながら、確証のない……だが、ゆるがぬ誓いを希沙良は口にした。

「泣かさねえよ」

直後。

ぐちゃりとコールタールのように不快な粘りが希沙良の認識をとりこみ、吸収した。

瞑く、鈍く、からみつく。奥底に潜ってゆく。

闇の発する場所へ――生ずる悪意の源へ。

＊＊＊

（自分ひとりで立つこと）

そんなものは、無理だ。

空調の肌寒く思える船室のなかで、呉葉は唇をかみしめた。

生まれたときから一族のために育てられてきた。

咸月という立派な家と、それさえたやすく支配する七瀬という巨大な血族のために。

〈空の者〉や術者には生まれなかったのだから――自分も。

兄の咸月陣にはそれでも、彼自身の才覚によって家の実権を掌握する道が与えられていた。

そんな風に己の存在意義を実現できるのなら、まだいい。

（恋もしてこなかった）

けれど自分は正しいのだと信じるためには。

伽羅王が……絶対の存在が必要で。

苦しみを耐えぬくためには。

胸の内に宝石を掲げる。誰でも。誰でもそうして自分を支えるのではないのか。

どうやって生きていくことが、真実、誇らしい生き方だというのか。

（罪深い者）

呉葉には、わからない。

冷たい涙が頬をつたわって落ちた。わからない。どこで何をまちがえたのか。

「あたしは間違ってないわ。あなただって間違っていないわ。自分より大切なものがあるのが、どうしていけないの。信じるとおりにするのが……どうしていけないのよ」

「……」

十九郎は即答をしない。

客観的な、彼女のためだけの話ができない。

かたちだけの正論は吐けない。

「君は……だれもが正義を忘れているから、それを正すために……一族総体のために動くのだと、言っていた」

「そうよ。それは嘘じゃないわ。斎伽の血脈がもっている使命を、大人たちはみんな利権と体面の話にすりかえている！　なのに、術者たちは一族の外で伽羅王の意に背くことをおこなっている！　兄上方は腑甲斐なく黙りこんでいるだけ！　こんな腐りきった一族が、このまま、天の怒りをかわずにいられるわけがないわ！　だからあたしが代わって伽羅王の、伽羅王の願いをっ……」

思いあまって呉葉は声をつまらせる。
「わかった。君は、俺を呪で自由に操ろうとしたけれど……」
抑えた口調で、十九郎が告げた。
糾弾するのではなく、事実として。
「君は……本当は、俺になりたかったんだ」
呉葉の呼吸が、一度、止まった。
否と答えることもできずに。
(術者の中心人物である、里見十九郎に)
その選ばれた地位にあるものが、自分であったならばと。
自分ならば、必ず正義をなすのだと。
「ひどいっ……」
船室の床を掌で叩いて、呉葉はこらえきれずに慟哭した。
「あんまりだわ……!!」
「君は、すぐれた人だ。俺たちの動き方を、外から見ていて、もどかしく思ったとしても無理はない。あのひとを支える力は、今もまだ充分ではない……正直なことをいえば初めから、絶望的に、戦力は足りないんだ」
ゆっくりと——血の気の失われて、蒼白な——瞼をとざしながら、十九郎は彼女へ語りかけ



る。

呉葉に対する厳しい感情はない。

むしろやわらかく、彼女の激憤をおちつかせる響きがそこにはある。非難の表情はのこしたまま呉葉はわずかに顔をもちあげる。

「あのひとを現世にひきもどしたのが俺たちであるというなら、嬉しく思うよ。この、心許ない状態の俺たちを、あのひとがそれでも信じようとしてくれている……そんな風に考えるんだ、俺はね……」

「……」

「もちろん、都合の良い想像といえばそれまでになる……。ただ、それに応えることを、俺は……君に、約束することはできる。これまでの、腑甲斐なかった、無様なやりかたを……詫びることなら、できる」

空者伽羅王は、神なる意思をもって死を望んだのではなかったのか。必然によって入滅を選んだのではなかったのか。十九郎の言葉は、呉葉の承知する伽羅王の心象から外れた、別の誰かのことを告げている。

里見十九郎の見る伽羅王は。

美しい象徴として呉葉の心に刻まれるものと、同一ではない。

（いきている）

自己の、生命をもつものだ。
七瀬忍の傍に近づけない自分には、ゆるされない真実だ。
灼けつく悔しさと、無力な悲しさを胸に抱えて、呉葉はつぶやく。いつわらずに、言葉にする。
「あなたが、うらやましいわ」
狡い。
恵まれた待遇。特別な立場。人と違う能力。その、すべて。
「うらやましくて……邪魔で、目障りで!!　大嫌いだわ!!」
「……ごめん」
ひとこと、十九郎は短く、そう答えてみせた。
呉葉は自分の指へと零れる涙をみつめながら、それを聴く。
「これからは……もっと……」
何かを言いかけた十九郎の声が、だが半ばで不意にかすれるように消えて、途絶えた。
(!?)
数瞬の間は、どういうことかわからなかった。
そして。
愕然と、呉葉は彼のもとへ見開いた瞳を向かわせた。

「待って」
乾いた声で呼びかける。
「ねえ、ちょっと待って……」
返事はない。
床に膝をひきずって、呉葉は彼の間近へと自分の身を運んだ。冗談ではなかった。
「やめてっ……こんな、こんなところで、あたしをひとりに……ひとりにしていかないで……！」
蒼褪めた横顔の、その瞼はとざされたきり動かない。ふるえる指先を彼の肩先にのばして、必死の思いで呉葉は囁く。
「ねえ……!! 泣いている女を慰めもしないつもりなの……!?」
外側から固い錠をはずして、船室の扉がひらかれたのはそのときだった。
「そろそろ、良い頃合になってきましたよ。呉葉さん」
おちつきはらった、穏やかなほどの声音で告げたのは……。
真の、陰謀の主導者。
激しくゆらいだ気持ちを平静なものに戻せないまま、呉葉は息をつめてふりかえる。
「高浪っ……」

2

（……沙良）
優しい、思念。
つつむように優しく、護りつづけている。
（希沙良）
母の名前を貰って、その力の片鱗を受け継ぎ、彼女のつきせぬ希望を託された……。
そう……希望、なのだ、きっと……。
暗闇のなかで希沙良はかすかに笑みを返している。遠く、近く、よせてはかえす彼女の存在を感じている。
（大丈夫だからさ）
（心配すんなよ）
ひろがる海——。
透明な輝きのはじける水面が、眩しくて、せつなくて……。
懐かしく泣けてくるほどの、幻景。
（俺が必ず……あなたの分……）

＊＊＊

「希沙良」

耳に届いたのは、幻聴ではなく亮介の肉声だった。

「希沙良……もう終わったよ」

長い、長い夢から醒めきらない気分で、ぎこちなく希沙良は両の瞳をひらく。

（水滴）

ゆらした睫にふれて白い雫が頬へと流れた。

涙、ではなかった。

前髪も、指先も、身体中が皆、海のなかをくぐりぬけたように濡れていた。

不思議と、それがいやなものだとは思わなかった。あたたかい液体の温もりが今は心地好かった。

頬があたっているのは硬い地面だ……。わずかずつ身体に力をいれて、自分がどうなっているのかを知ろうとする。

三角形に区切られた線の内側。なげだした四肢に沿って水溜まりができている。身体の下側になっていた右腕を支えにして、希沙良はじわりと頭を起こした。

髪をつたってこぼれる白い水滴は、虹色に光をはねかえして、まるで真珠に見える。
「水死体の幽霊かよ……」
つぶやいて、なんだか滑稽で希沙良は笑う。頭のどこかが痛んだ。
「これはあなたの〈護り〉が、あなたに触れた澱を洗い浄めたもの……」
低くひそやかに、深雪のような静けさで、斎女の声が教えた。
薄紫の衣が濡れるのにかまわず彼女は膝をかがめて、希沙良の額の近くまで掌をさしのべた。今までの、第三者に徹した彼女のふるまいとは、そのしぐさはやや性格を異にしている。清涼な、疲れた身体をすっと冷まして楽にする波動を希沙良は感じとる。どこかで触れたことのあるような波動だ。
これと似た、冷たい感触。いつか、それほど古くない記憶に。
「あなたはとても強い〈護り〉をもっている……あなたへの優しさ、あなたを気遣う心がいつも傍にあります。そのあなたをなくさないように、大切にしなさい」
間近から語りかける、双眸の色は冴えた漆黒。
変わらずに淡々と……。
ものごしは繊細に、ずっと抑えられているのに。
胸の底へと落ちることばを告げる。
（大切に）

なくしてならないのは、向けられる愛情そのものではなく……。

希沙良は一度ふかく両眼を瞑り、やがて背中をのばして立ちあがった。三角形の線上にひざまずいて希沙良のことを見守っていた亮介が、それに従って自分も腰をあげる。

重く全身を縛り苛んでいた気分の悪さが、今はもうあとかたもなかった。呪は砕いてきた——この肉体が置かれる場所とは別次元の、特殊な世界で。

そして、目的は果たされていた。欲しかったものは手に入っていた……。

何とひきかえにしたのかは、今は、いい。

すぐにでも動きださなければならない。

「……ありがとう」

美しい斎女に、ぽつりと希沙良が言った。

「助かった」

斎女は特に答えず、足元から燭台をとりあげる。完全に消えたはずの三つの炎がいつのまにか再び宿っていることに、その頃になって亮介はようやく気づいた。

なにもかもが寸時の夢だと錯覚しそうになる。そんなわけは、ないのに。

「あなたたちの帰る道を、ひらきましょう」

そう述べる斎女の声に感慨はない。彼女は自らの役目をはたすだけだ。

あくまでも。

「それでよろしいのですね」
「は、はい……。お願いします」
亮介がうなずく。
「あの、薫さん……本当に、本当に、ありがとうございました」
「わたくしのありかたは、自在に使われる道具とおなじ。どう使うかはここを訪れる者の裁量によるのです」
端的に、それ以上でもそれ以下でもない事実を口にして。
だが、彼女はそののちにふと、彼らふたりのことをもう一度だけ見返った。
このときだけ。
最後の助言を手渡すために。
「きっと……あなたのなかではそうして、永い苦しみがつづいてゆくのですね……」
「……」
とうに乾ききったと思える瞳を、それでもかすかに希沙良は歪ませる。
前触れのない斎女のことばは、けれど亮介のなかでは謎めいたものに響いた。
まっすぐに希沙良へ向けられていながら、同時に、他の、さまざまなものにも向かうように。
幾重にも、多くの意味をかさねて含んでいるように。

彼女がいう。

「つらければ、惜しまずに泣きなさい。そのために人として生まれ、涙をもっているのだから……」

不意に、彼女の掲げもつ燭台の光が眩しく視野を射抜いて亮介は目をふさいだ。あまりにも強く——澄んだ光。

「そして、あなたの心において進みなさい」

眩しさの彼方から届いた、それが最後に亮介の胸へ託された声、だった。

(あ……ああ!!)

なぜその一瞬にわかったのだろう。

亮介は額の奥がぐんと熱くなるのを感じていた。そうだ、薫という異称を名乗る、最も高位にある斎の女性。

(そうなんだ)

容赦のない断罪と、深遠な祈りのことばを、それぞれに託して。

伽羅王を崇めない自分たちに望みをかけるのも。

すべて彼のためだ。

（忍さんの……）
（お母さんだったんだ）

ぐらりと足元の重力が移動した。そのまま前へ転びそうになって亮介は希沙良に肘をつかまれた。
「何また泣いてんだおまえ」
「……ご、ごめん……」
涙ぐんだ顔を片方の掌でおさえながら、亮介は周囲のようすに目を向けた。
寒々しく、一直線にのびる廊下。おそらく武蔵野邸の地下三階――蔵所に入る前に彼らがいた、元通りの場所だと思えた。
だがここへふたりを導いた咸月陣の姿は、すでに見えない。
代わりに。
「あっ……」
亮介は小さく声を発してしまっていた。
深い安堵と嬉しさと、たった今胸のなかに描いたせつなさとが、渾然とひとつになって。
他になにも言えなくなる。

「遅くなってすまなかった」
がらんとした無人の通路にひとり、佇んで、斎伽忍が確かに彼らのことを迎えていた。
生成りのシャツに薄地のベストをまとっただけの簡単な装いが、どこかいつもより彼を身軽にしている印象があった。
自由な姿なのだと、感じる。本来の年齢相応にというべきなのか。
「大事な用は終わったのかよ。こっちに手を貸す余裕はないんじゃなかったのか」
希沙良が尋ねる。斎伽忍は、しずかに首肯した。
「厄介な話はかたづいた。すみやかに。おまえたちが煩い連中を僕から遠ざけていてくれたお蔭でも、ある」
「んなことだろうと思った……」
さめた言い方をして、怒りはせず、希沙良は鋭い視線を彼に突きつけた。
「あいつの行く場所はわかった。知りたいか？」
問いかける。
神である斎伽忍ならどんな情報も摑んでいるはずと、決めつけはしないのだ。
この人物は、もっと脆く、もっといい加減で、微力な存在であるのだと希沙良は知っている。そう……十九郎を手元に置いておかなければ戦えないくらいには……。
「ああ」

希沙良の心をいったいどれほど読み取っていただろう。
優然と忍は、一軍を担う将帥の貌つきをもって、その挑みかけに答えてみせた。
「教えてくれないか。一刻も、早く」

3

空がもう、淡い青色に透きとおりはじめている。
夜明けが近づいているのだ。
太陽の輝きは未だに姿をのぞかせないが、雲の少ない上空はまるでそれ自体が微光を放つようだった。きっと今日も晴れるのだろう……。頬に触れる風は涼しく爽やかで、夏らしい自然の生気に溢れている。
情景はすべて、呉葉の愛する清々しさに満たされていた。心地好さは吉兆であると考えるのが呉葉のならわしだった。
けれど。
「重いわ」
棘の消えない、不愉快な声を呉葉は高浪葵へと投げかけた。
両手首にずしりとかかる負担は、頑健に、一分の隙もなく塡められた手錠の重さだ。

「すみません」
ゆったりと、なんら悪びれずに高浪は微笑して詫びる。
「痛い思いをするよりは、動きにくい状態でいるほうがまだ呉葉さんには良いかと考えたのですよ」
「謝っていないわっ……！」
呉葉は癇癪をおこして怒鳴りつけた。それでも、主従の関係が失われた現在、ぶつける声が心細い震えを含んでいたことは否めない。その事実がまた呉葉にはひどく悔しい。
「なるべくならば呉葉さんに五体満足でいていただきたいとは、思いますから」
剣呑な表現を高浪はさらりと告げて、呉葉の足を先へ促す。ひとけのない埠頭の上へ。
さからう自由は呉葉にはなかった。高浪の手中には銃があるのだ。いつでも簡単に頭を撃ちぬける、間近にある。
（有明）
埠頭の書きこみから自分のいる位置を確認して呉葉は唇をかみしめた。伊豆をめざすと告げたのも偽りだった。何のことはない、横浜から東京港へ逆戻りをしただけだ。海に出たのは追っ手へのカムフラージュにすぎなかったのか。
「楷は」
ふとひらめいて呉葉は叫んでいる。

「あの子のことはどうしたのよ、まさか殺したりなんか」
「しませんよ。楷さんは、あなたがしたことの証人になります」
科白のつづきをひきとって高浪は丁寧に解説した。
「あなたの兄上様やそのお仲間に、あの方はちょうど具合の良い情報をこぼしてくださるのです。敵の追跡を黄金から逸すには、目の粗いふるいに砂金を入れて見当違いの方角へ走らせるのが得策です」
「……」
では高浪は楷の失敗を見張るなどと口では言っておいて、実際には正反対のことをしていたのだ。
兄も、他の道者たちも、たとえ楷の身柄を捕えたとしても、結局は楷が信じこむ贋の話に惑わされてしまうだろう。
「馬鹿な子供は最悪だけど……馬鹿な子供を罠に使うなんて、本当に、なさけない悪行だわ……！」
呉葉はにがにがしく吐き出すが、自分も楷と同じく『馬鹿な子供』として使われているのだとわかっていた。
「正義は時に悪辣なもの。呉葉さんもご存知ですね？」
そのきりかえしは痛烈な皮肉なのか、あるいは高浪の本心か。

どうせみな自分が悪いのだと呉葉は投げやりに、放り出したくなる。愚かな自分の知ったことではないとはねつけたくなる。

背後では呉葉たちを降ろしたクルーザーが、すでに埠頭を離れようとしていた。そうして追跡者への手がかりをのこさず、また海の上をしばらく彷徨うのだ。

誰がクルーザーをうごかしているのかすら呉葉は知らない。横浜まで車を運転したのは咸月家お抱えの者だったから知っている。高浪がしっかり口止めをするというので任せたのだ。だが、そこから後のことは何も。

埠頭の奥に停められていたリムジンの運転手の顔も、わからないのは同様だった。呉葉には推測もつかない外部の者たちに周囲をかためられて、いつのまにか主導権をとられている……。

「どこにいくのよ」

「そんなに遠くではありません。どうぞ」

後部座席の扉をひらいて、乗りこむように勧めながら高浪が答えた。

やむをえないまま呉葉は広い車室のなかへと踏み入る——が。

次の一瞬に、動きを凍りつかせた。

(何)

冷たい、意思の存在しない二つの瞳が呉葉を迎えた。

車室の奥。傷ついた肩を庇うことも忘れたように、ただシートの一角に身をゆだねて座っている。いや、座らされている。

里見十九郎が。

「高浪っ……!!」

かすれた声を呉葉ははりあげた。

「何をしたのっ……何を……どういうつもりで……!!」

「特にこれといったことはしていませんよ。まだ」

呉葉の背に手をふれて車のなかに押しやり、高浪が答えた。いやな答え方だ。呉葉につづけて高浪は自分も車室に乗りこみ、扉をとざした。

「嘘よ」

なんらかの手を下していないはずがない。呉葉は高浪を激しく睨みやって、そして目の前に座る氷像のような十九郎のことを見返った。胸元をつかんでゆさぶってやりたいが、手錠が邪魔になる。もどかしさで眩暈がおこりそうだった。

「どうしたのよ、そんなことでいいと思ってるの!?　ねえ!!　自分をなくすのが一番屈辱ではないの、あなたには!?　それくらいで人形になる男ではないでしょう、違ったの!?」

「むだですよ。むやみに刺激を与えないでくれませんか、呉葉さん？」

隣から、平然と高浪が声をかけた。

「第一、もともと呉葉さんも望んでいたことでしょう」
「――あたしは……!!」
違う、とは言えないのだ。
答えようがなくて呉葉は絶句する。だが、どうしてもこんなものは目にしたくなかった。つきつけられたくはなかった。
無感情な。
空白の。
誇りすら失った彼なんて。
「体力と気のレベルが低下して、ちょうど暗示にかかりやすい状態になっていたので、少しおとなしくしてもらっただけです。『出番』の前に、そう手荒なことはしませんよ」
高浪が言う。
リムジンがゆるやかに走りだす。呉葉は絶望的な気持ちで十九郎の姿をみつめた。
(こんなのはいや)
憎らしい男で、無礼で、目障りな相手だったけれど。
胸に痛いことしか、ひどく傷つくことしか言われなかったけれど。
だからこそ高浪の暗示などに敗北してほしくはなかったのだ。常に強靱で、ひとを超越していなければ。障壁をうちやぶる男でいなければ。

そう期待するのは自分の勝手な思いこみなのか。
彼になりたいと願った、己の浅ましさなのか。
他人に詫びるのは嫌いだった。まちがいを認めて謝るのは、誇りたかい心を汚す行為だった。自分は正しいはずだった。絶対に。
（ごめんなさい）
重い手錠がくいこんで腕が痺れる。呉葉は滲みかけた涙を抑えた。泣くものかと思った。
（ごめんなさい）
運河を渡る橋が、車の進行方向に見えている。
近づいてくる――。
「!!」
突発的に呉葉は動いた。橋の上にさしかかったところで手錠の負担をかまわずドアのロックにとりつき、体当たりで扉を押しひらく。
「呉葉さん」
ひややかな高浪の声が制止する。
（撃たれる）
それでもいい。撃たれても死んでなどやらないのだ。兄たちに真実を伝えるまで生きていられさえすればいいのだ。橋から運河のなかへ落ちれば、高浪たちも追いかけてはこられない。

運転手が気づいてリムジンが減速した。息をつめて呉葉は座席から跳びおりようと――した、が。

（あ!?）

予期しない、強い腕が呉葉の身をからめとり抱きよせたようだった。高浪の手中で、するどい銃声が炸裂した。呉葉はおもわず悲鳴を洩らしたが自分のどこが撃たれたのかはわからなかった。ただ、妨げた誰かのせいで車をとびおりそこねたことだけがはっきりしていた。

（痛くない）

感覚が麻痺しているのか？

がくんと前のめりに急な制動をかけて、橋の半ばで車が一旦停止する。

「馬鹿なことを考えるんじゃない」

低く叱りつける、厳しい声が呉葉の耳を打った。

茫然として呉葉は顔をあげている。

「……ごめんなさい」

すぐには頭が働かず、それしか言えなかった。

至近距離で撃ったにもかかわらず高浪の弾は自分を逸れたのだ。呉葉はやっと、そう理解する。逸れたのは、とっさに呉葉のことを胸元に引きよせた、里見十九郎の片腕があったからだ……。

銃弾から庇われたのはこれが二回目だった。どうしてそこで、必ず見捨てずに彼は動いてしまうのか。相手が誰であろうと、そうしないと彼自身が存在していられないように。

なぜだか呉葉は哀しくなる。嬉しく思えは、しなかった。

「まったく、あなたは……不幸な精神力の持ち主ですね」

呆れた口ぶりで高浪がつぶやいた。

意識を無にする暗示と、肉体を縛る呪の、ふたつを一度に覆されてはさすがに呆れもする。もっとも、精神の力でなしうることは今の挙動だけで限界だとわかっていた。

「ですが呉葉さんを止めてもらえたのは何よりです。どうするつもりだったのか知りませんが、手錠をかけて泳ぐのは案外難しいものですよ、呉葉さん。それに、あなたには初めから探知機をつけてありますから逃げ隠れはできません」

「……！」

情けない。

十九郎の右腕に身をゆだねた姿のまま、呉葉は暗澹と、沈黙した。

自分にできることなど、ひとつもありはしなかった。いっそ撃たれて死んでいればよかった。

「大丈夫だ」

支える腕の力をわずかに強めて、十九郎がそう語りかけた。

「絶望するには早い。何も終わっていない。大丈夫だ」
他人にならそんな風にも言えるくせにと呉葉は思う。
（優しくできるのに）
自分自身の生命はたやすく捨てにかかっているくせに。今も。呪によって盾にとられた従弟を、足枷にしてしまっているのに。
「あなたはどうなの。絶望してはいないの」
責めるように反問する。それが呉葉なりにふりしぼれる、精一杯の意地だった。
「最悪のことも考えるけれど、全部がそうでもない。ひとの助けに縋るくらいには、俺も我欲のつよい人間だからね……」
「希望を持つのはうつくしい態度と思いますよ」
ドアをとざしながら、高浪が客観的な、しらじらしい意見を述べた。
「なるべくならば、最後までそうあってほしいものです」
高浪の指示でリムジンはふたたび走行を開始する。その高浪の不吉な言い方も聞き捨てられないものだったが、呉葉には、むしろ十九郎の真意のほうが気になっていた。
（何を考えてるの）
だれかの助けに縋る、なんて、きっと心にもないことだ。
間近から横顔を見上げても、蒼白な唇をしずかに閉ざした彼が何を考えているのかは、まっ

たくわからなかった。

もしも彼ひとりだけ生贄になることを意図していたとしたら、どうすればいいのだろう。殴ってでも止めなければという思いと、自分では絶対に十九郎の行動を阻めはしないという実感が、ともに胸のなかを渦巻いた。自分には彼を救う力も、守る資格もない——。

行きつく先には、不安しか残らない。

（この腕を離されたくない）

今はただそれだけを呉葉は願っていた。馬鹿な女の陳腐な願いだと、くだらない感情だと思いながら、他に望みといえるものなど浮かびはしなかった。

明け方の、がらんとして玩具のように見えるオフィスビルの間を車はくぐってゆく。車窓のむこうに東京タワーの影がある。十九郎の瞳は冷静に、窓外に流れる街の光景をとらえる。芝公園から三田へとぬけて、おそらく最後にめざすのは……。

高輪だ。

からすの鳴く声が、遠い上空から聞こえる。

白く明るさを増す空は呉葉の気分をうらぎるように穏やかで、これからおころうとする惨事には不似合いだった。

「なるほど」

停止したリムジンの傍らに立ち、十九郎はかすかにつぶやく。

両足で立ちあがれるまでに身体の動きが自由になったのは、その範囲において呪が解かれたからだ。術力を操る自由は、当然のことながら、変わらず封じられつづけている。彼本来のすぐれた感覚も今は十全に働かないということになる。

「ずいぶんな大役を振られたものだ」

「よく、わかっているのですね」

高浪は愛想のない答え方をした。

「わかりすぎる若者も、可愛げがないとしか見られませんよ」

「今更？」

十九郎は平然と彼女を眺めやる。高浪に好印象を抱かれなかったのは、確かである。

車の位置からそう離れないところに、地味な塀に挟まれた山門がのぞいている。狭い門の奥には小さい寺院がひっそりと佇む。古色蒼然とした境内は、だが実際には丹念に手入れをされ、清涼な緑につつまれている。

このめだたない寺が誰のためのものであるのか、十九郎は情報として知っていた。

わずらわしい世事から遠ざかり、参道の奥、訪れる客もない庵のなかでひとり暮らす人物が、誰であるのかも。

「門の先に、進みなさい」
よけいな説明はすでに省き、冷たい声音で高浪が命じた。
銃口を彼の眉間へと向かわせながら。
もとより、そんな脅しに効力の少ないことは、明らかだ。自らの死に怯えて命令に従う相手ではない。
「行きなさい」
高浪はさらに促す。
（何かの罠？）
リムジンの車室にとじこめられて、呉葉はそれを見守ることしかできない。手錠を鎖でつながれた上に、運転手役の無口な男が監視についているのだ。外に出るどころか窓をひらけもしなかった。
（ひどいことになる）
きっと、恐ろしい事態が彼を待っている。
呉葉にとってそれは確信だった。
高浪の指示にしたがったら——不幸なことになる。そこに待っている未来は、ただ十九郎だけを苦しめるものではなく、だからこそ十九郎には受けいれがたいものだ。それによって斎伽忍を陥れることになる行動、だ。十九郎がそんな重大なものを、自分の生命ひとつとひきかえ

にするわけがない。しかし指示を拒んだら——高浪は惜しまず撃つ。これまでがずっとそうだったのだから。手加減なんて、望めないだろう。

いずれにしても最悪の結果しか出ないのだ。

「やめて」

窓にすがる思いで呉葉は口走っている。

(死なないで)

だが十九郎は命じる高浪を見つめかえしながら、否の一語を告げはしなかった。

「どこをめざせばいい?」

「わたしが逐次、指示します。心配はいりません」

「条件は?」

そのひとことに、問われるのを待ちうけていたように高浪は微笑した。その笑みは優しかったが、どこか嘲笑にも似ていた。

「あなたたちへの『制裁』をすべて白紙に戻しますよ。呪も、解きます」

嘘だ。呉葉は瞬時にそう感じる。

そんな約束は嘘だ。信じてはいけない。

(あ……!?)

信じられないと、わかっている、はずなのに。



十九郎がゆっくりと高浪から視線をはずし、そして命じられたとおりに歩きはじめるのを、呉葉は見た。

身体は凍りつき、声は出なかった。進んでゆく背中を見送るだけだった。

（どうして）

左肩の傷の影響を、足取りにはあまり感じさせずに。

よどみなく歩く彼の姿が山門をくぐり、参道を辿って、さらに奥へ。

踏みこむ。

「！」

高浪がその刹那に合わせ、銃を持たない左の掌を不意にひるがえしたのが、呉葉の視界にはあざやかに刻まれた。だめだ。危険……。

ゴッ!!　と地鳴りがした。

激しい爆発が境内の森をふきとばす一瞬を呉葉は目撃した。

衝撃波に砂塵が舞いあげられ伽藍は原型をとどめず崩れさった。どっと粉砕された瓦の破片が降る。参道のあったはずの地面は抉られ、醜い剝き出しの穴と化していた。そこへ焦げついて焼けおちる楓の枝。たちのぼる黒い煙。

爆破された——。

わざと爆破したのだ。高浪が!!

「ああ……!!」

呉葉は呻いた。もう涙を零すゆとりさえなかった。

彼は死んでしまった。あっけなく、高浪の目的のために。誰かの利己のためだけに！

これで遂に、なにもかもが終わりだった。

遺されたのは真の絶望だけだった。

4

「記録を回収しなさい」

リムジンの助手席に控えていた部下に命じておいて、高浪葵は爆薬の遠隔操作スイッチをスーツの内ポケットにしまいこんだ。順調な、仕事の運び具合といえた。黙っていても近隣の者が爆発で目をさまし、警察へは通報がゆく。動きは迅速であるほど望ましい。

参道の数箇所に仕掛けられている警備モニターカメラの映像をおさめた小型ビデオテープが、山門の手前に立つ石柱のなかから回収されてくる。今後のために重要な材料だ。

あとは呉葉に、兄の利益のために里見十九郎をあやつりここを狙わせたのだと『自白』させればいい。一部始終を目撃してショックを受けている現在なら、暗示によって記憶の順序をいくらか変化させることで、都合よくリアルな証言がとれるだろう。

呉葉本人のその後の処理としては、たくらみの潰えた衝撃によって深刻な錯乱に陥った、とするシナリオを用意してある。若者の、純粋な暴走ゆえの悲劇だ。愚かしさの結末にはふさわしい方向性であろうと思えた。

そうしてあくまでも咸月陣が妹を隠れ蓑にして——七瀬忍の勢力拡大のために——送りこんだ『刺客』を、こちらは返り討ちにしたのだ。それで理屈は通る。強引ではあっても物的証拠さえできあがっていれば、帳尻あわせはどうにでもなる。

どうせ誰もが、あの狂った王を御するための材料なら垂涎の思いで待ちのぞんでいる。一族すべてを滅ぼされる前に手を打てるのなら、藁にでもとびつくのだ。

(そんな事態を招くのはやはりあなたの責任ですよ、伽羅王)

長としてせっかくの資質をもちながら、それは惜しまれる話だった。そう……おとなしく務めをはたし、妖者との決戦などに心をひかれさえしなければよかったものを。

(あなたはわたしたちの王であればいい)

純血を保ちつづける意義が、忍の正しいおこないによって立証されていなければ、ひたすらに血の存続を第一義に掲げてきた者たちはむくわれない。

払われた犠牲は、期待へと変質する。うらぎられるのは哀れなことだ……。

「ご苦労さまでした」

車のドアをあけて呉葉の隣に乗りこみ、そう告げる。

「良い思い出にはなりましたでしょう。呉葉さん」
「人殺し……！」
力のない、非難の声を呉葉は絞りだした。あまりのつらさに頭がぐらぐらして、他に言葉が出てこない。今にも倒れて、そのままみんな曖昧になってしまいそうだった。
「それは、あなたですよ」
悠然と高浪が答える。
どういう意味なのか呉葉にはわからない。
「何をまちがえているんですか呉葉さん、殺したのはあなたですよ。兄上様がたのために里見を拉致して、盗んだ呪を使い、彼を意のままにあやつりましたね？」
「……」
「伽羅王に不利益な者を、里見によって消去せしめようとしましたね。あなたの無軌道な、考えなしの計画が、結果として里見を殺したのでしょう。今は気持ちも混乱して、事実を転嫁したいことはわかりますが、かるがるしく己の罪業からのがれてはなりませんよ」
「……やめて」
両耳をおさえて呉葉はつぶやく。きもちがわるい。おかしくなってしまう。
「やめてやめて!!　近づかないで!!　放っておいて!!」
「かわいそうな呉葉さん」

高浪はひどく優しく微笑して、それから前方へと鋭い目を向けた。車室と運転席の間には仕切りがおりていて直接には話せない。インターフォンの送話器をとりあげて命じる。

「なぜ発進が遅れている？　急ぎなさい」

「は？　いえ、もう走っていますが――」

運転席からはとまどった声が返ってくる。はっと高浪は瞳をみひらいた。

窓の外の景色は動いていない。

少しも。

爆発をおこした寺の周囲もいまだにひっそりとして、野次馬のひとりも出てくる気配はない。

（やられた？）

「すぐに停めなさい。走れていない……！」

結界の中、だ。

ひそかに寺の敷地とリムジンとを覆った、広範囲な結界があるのだ。何者が、いつから仕掛けていたのか！　高浪は素早くドアをおしひらき車外に降りたつ。片腕で呉葉の手錠をつかみ同時につれだすことも忘れなかった。人質である。

「へたに手を出すとこの娘の生命もなくなりますよ」

「脅しには乗らぬ。くさっても咸月家の女だ、つまらぬ死に方はするまい」

彼女の目前、冷ややかな態度で迎えたのは道者四人衆の筆頭、咸月陣だった。足元をよろめかせながら、聞きなれた兄の声に呉葉はぼんやりと顔を上向けた。

咸月陣の背後では不破武人が無言で、リムジンの運転手を車の外へひきずりだしているところだった。では兄たちは欺かれることなく、きちんと追ってきてくれていたのだ。麻痺した心で呉葉は遠くにそれを認識する。

ふ、と唇でかすかに高浪が笑った。

「なるほど、咸月の当主としてご立派な態度」

ワルサーPPKのかわりに、きらりと反射する光の線が高浪の右手に回転した。まがまがしい気を含む銀の長針が――足元のアスファルトに勢いよく突き立つ。どうっ！　と強力な波動がそこから噴出した。

「呪針かっ！」

スーツの片腕で身を庇いながら咸月が低い声を発する。呉葉をともなったまま高浪は後方へと身をひるがえす。

「呉葉っ!!」

ふりむきざまの高浪の隙を狙って、というよりは一瞬の勢いに勝ったかたちで、高浪の手から呉葉の身柄を力まかせに奪いさった腕があった。明石川耕宇である。

「ちっ！」

高浪は舌打ちをしたが、逃れる足はとめずに二本目の〈呪針〉を放った。暗黒の、重苦しい波動がしばしの時、彼女と追っ手とを遮断する。

「結界が……」

リムジンの助手席側でもうひとりの部下を拘束した遠野一真が、自分たちの敷いた結界符に異変が生じるのに気づいた。高浪の針がもつ呪力に打ち消されているのだ。

「こちらも針を使え、〈四従の堰〉をゆるす！」

咸月からの厳しい指示が走る。

道者四人衆、四名それぞれのもつ錫針が一息に地面へと突き刺された。がんっ、と大気のぶつかりあう衝撃が生まれた。高浪のつくった波動に正面から打ちあたる力だ。

「いや、だめだ……足りぬようだ」

武人がつぶやいた。敵の力を上回ることができないのだ。結界を脱けられる……。

「何者なのだ、あれは!?」

眉をひそめて明石川が独白する。

ひとりでここまでの強い呪を使いこなす者は、常人とは呼びがたい。入手している呪法の高度さといい、一族の、よほど中枢に近い人物とでも考えなければ説明がつかなかった。

いまいましい……。

道者たち――いわゆる『親衛隊』の連中に嗅ぎつけられたとなれば、計画はほぼ斃れたものとわりきるべきだった。だが逃げのびることを諦めねばならぬほど高浪も脆い女ではない。

呉葉は奪われたが、記録テープはまだ手中にある。空間をへだてる結界の効力を崩し、自由な外側へと走り出る。その場で高浪はさらに呪針を地に刺し、道者四人衆の追跡を阻んだ。

明け方の静謐のなか、立ちならぶ住宅の合間を彼女はかけぬけていく。万一の場合のために逃走手段は確保してある。キーをさしたまま――ただし一般の者は近づけぬように人除けの〈符〉を貼って――大通りの手前に放置してあるコルベット。その運転席にすべりこみエンジンを唸らせる。

アクセルを踏みこむ動作とつなげて、高浪は片手で携帯電話を操作する。会話は必要ない。一度の呼出音だけで切れたら、計画に齟齬が生じたという報告だ……危険がおよぶのを避けるため、すぐに現在の隠れ家をはなれて別の場所に潜伏してくれと……そんな暗号を決めてある。

現在あの寺院の庵を空にして、遠く身を隠している、当の人物と。

しかし――。

「!?」

高浪は、一回でコールを切ることができなかった。

スムーズに車道へすべりだしたコルベットの、背後から。
凄絶な光の、迫撃。

「うおおおおおっ!!」
右の拳に全霊の力をのせて、自らを爆発させるように希沙良は凝縮された銀光を射ちはなつ。魂の力——。〈手刀〉にあつめられた術力を、激烈な光輪と化して標的へ叩きつける、一撃。
轟音が、空をふるわせるよりも早く。
車体の後部を抉り、潰し去る。
(殺さない)
うけとめた、あまりに巨大な衝撃からタイムラグをおいて、原型を残されたコルベットの前半分が、ぐしゃりと地面に接触して静止した。
(殺してやらない)
放出した力の分、身体の安定を失って希沙良はアスファルトに膝をつき、肩で呼吸をくりかえした。
ただ一撃に、これほどのものを費やしたのは初めてだった。精神からも、肉体からも。
「……」

高浪葵は己が生命を救われたことに気づいていたが、つぶれた車体から身をぬけださせるよりも先に、すぐ間近に歩みよった人物の姿に目を奪われていた。

凍りついて、うごけない。

反応ができない。理屈で説明のつかない金縛りに、襲われていた。

呼びだしをつづける携帯電話を、アスファルトの上から彼の指が拾いあげる。

長いコール音ののちに接続される、通話。

その、回線がつながるまでの呼出数もまた、高浪との間で約束事にされていたものだろう。

実際に相手の応じる声を聴くまでは、受信機を耳元にちかづけたまま、斎伽忍はあくまでも無言を保っていた。

そして。

たよりない電波にのって届く、声の主へ。

「謀略をなしておきながら、最後の時点に、あなた自身にまでつながる線を残してしまうとは……」

語りかける。

つよく眩しい、東の空から直射する太陽の光が斎伽忍の冷徹な表情をつらぬき、晒される美貌を灼きこがそうとするかにも見えた。

無慈悲に。

「油断しましたね。お父さん」

5

夏の、天空を……。

燃えさかる居丈高な太陽の、表面を。

漆黒の影が。ひとすじの疵のように一閃する。

とどろきさえる響きも、ふるえうなる激しさも、地上にある尋常の者たちにはわかるまい。

ひとけのない小高い丘のうえで独り、遠く彼方にひらめくしるしを牙は見つめている。

天を割る炸裂は、斎伽忍の揮う、甚大な力のあらわれ——伽羅王の神意、その忿りを知らしめるもの。

彼の足下に重く縋りつく一族のありようへ向けて、ついに示される回答の意志だ。

一族の者は皆、時をおかずしてこの天兆の真実に戦き、跪くこととなるだろう。

忍があえて彼の元から牙をとおざけたのは、まさに今、その奇跡の力を一族へ顕すにあたり、決して〈天冥の剣〉を手にとらぬための措置であった。……そうして抑制の策をとっておかなければ自分自身が感情に押しきられる危うさを孕んでいることを、斎伽忍は承知の上でいるのだ。

（あなたであっても、感情をうごかさずにいられない）
（新たなさだめに、身を置くためには……）
それでいいのだと牙は思う。
彼は、もっと、彼の心のままにあればいい。これまでの伽羅王もみなそれぞれに、あるべくして伽羅王であったのだから。
たたずむ青年の姿をゆらりと消しさり、大きな翼をひろげて牙は鳥のかたちへと変形をはたす。
静寂の時はおわっていた。
青く澄んだ空へと彼は飛びたってゆく。速やかな帰還を待つ、主君のもとをめざして。

＊　＊　＊

その早朝、『親衛隊長』咸月陣の権限においてファックス送信された声明文は、一族傍流の各家当主を、もじどおり震撼させた。
曰く――。
このたび七瀬家当主・颯の画策する、伽羅王失墜を狙いとした重大な奸計が発覚、それを道者方四家は〈護り役〉の務めとして阻止するにいたったと。

そして、露見した陰謀に。
斎伽忍は断絶をもってこたえる、と。

里見夏江のもとには、不破武人によってその声明に関する報告がもたらされた。電話のむこうで声明文のうつしを読みあげる武人の声は、やはり内心の衝撃を隠しきれていない。
斎伽忍、と……彼らの長は名乗るのだ。
公式な声明のなかで、堂々と。
七瀬を、超えるものとして。
『よもや初めから、このことを考えられていたとは……』
個人的な感想を武人がぽつりと述べる。
実の父がおこした不祥事に対し、斎伽忍は長老たちおよび自らの両親を含む『七瀬』総員の実権を剝奪し、そのすべてを彼自身の手中におさめることを宣告したのである。
「あのひとには、保護者は——もう、必要がないというのね」
夏江はそうつぶやいた。
彼は生ける神として崇められる領域に、とどまろうとしないのだ。
本家の奥深くに、親よりも長老よりも先に死ぬであろうからと大切に囲われ飾られた、その

立場を完全に脱ぎすててゆこうとする。
それはすなわち。
〈空の者〉であるだけで一族の長と呼ばれ敬われる立場にあった彼が、現実に、それ以上の座に君臨するということだった。
専制、だ。
（自由を）
そう告げた忍のことばを夏江はふたたび、驚愕の思いでかみしめる。
忍のめざした自由は、彼の背負う一族の重荷からの、逃避でも脱出でもなかった。みずからの全責任をひきうけた先に、みいだされるものだったのだ……。

＊　＊　＊

「おまえはいつになっても、私を選んではくれないね」
冗談めかしたような、そのひとことが、十九郎に届いた初めの声だった。
分断された意識をゆっくりと取り戻して、あらためて十九郎は瞳をひらく。目の前は明るかったが眩しすぎるほどではなかった。白い壁のむこうに、太陽光をさえぎるカーテンがひかれていた。

ベッドサイドに表示されたロゴと部屋番号で、名の知れたホテルの一室であるとわかる。爆破現場からそう遠くないところにある建物だ。

「どうして、そんなことを？」

問いかえす。

カーテンの手前に立つ、斎伽忍の姿に向けて。

「なぜ？　おまえの行動についてそのままを語っているだけさ」

忍はどこかそっけのない答え方をするが、真の険しさは含まれていない。セミダブルの寝台によこたわった身体を少しずつ起こしながら、左肩の傷がすでに癒えていることを十九郎は確認した。冴子の手によるものだろう。

寺院の爆破された瞬間に、水沢諒の結界に保護されたところまでは記憶している。あとはたしか……。

きれぎれに。崎谷亮介から聴いたのは。

希沙良にかけられた呪は、彼が自らの力で砕いたから心配はいらないと……。

「俺はあなたのいうほど清廉潔白な人間ではありませんよ」

「だが理想主義者だな」

「ご迷惑ですか？」

「べつにかまいはしない。苦労をするのはおまえだという話さ。……僕は、おまえの理想を利

用するがわの人間なのでね……」

淡々と告げたのちに、表情から和やかな色を消しさり忍は十九郎の頬にさらりと左手の指をふれさせた。

「呪はすべて解除された。あとは、おまえの波動をととのえておく。身体をやすめて回復につとめてくれ。……僕もしばらく休む。僕のうごけない間は、おまえに指揮の代行を頼むほかないだろう。ひきうけてもらえるか」

わずか数秒で、身体に残留した不快感が浄められ流されていく。

いつまでも感覚をゆだねていたい清らかさだ。瞳を伏せて、十九郎は小さく頷く。

「重責ですが……俺でよければ」

「あてにしている。疲れたときには休むことにしたのさ。過去の教訓にしたがって」

そんな言葉はまるで軽口のようにさりげないが、触れた指を遠ざける忍の姿には厳しい気分がある。その疲れやすさだけは、彼の負いつづけるウィークポイントとなるからだ。

「……そう、僕が僕の弱みから逃れられはしないからこそ……自由に戦える態勢をつくる必要があった。そのために、今回の一件を利用させてもらった」

両腕を組みあわせ、外からの光が洩れる窓枠に肩をあずけて忍が言った。

その気怠いしぐさに、たしかに彼の抱える消耗を十九郎も感じとる。

「どちらが先に仕掛けるかという一点だけが重要だった。向こうにとっても、僕にとっても」

腫瘍を切り離すだけなら、いつでもできることだ。

しかし正当な理由なくして強硬な態度に出れば、彼らには「伽羅王乱心」の口実を与え、後々までの禍根となる。手をくだす名目はあくまでも、決定的な不祥事への粛正、であらねばならなかった。

「おまえたちに、すまないことをしたと思っている」

斎伽忍が——謝罪を、口にする。

一切をごまかさない、正直すぎる告白に十九郎が意外さを覚えなかったといえば嘘になる。なぜと問う十九郎よりも早く、忍はさらに言い加えた。

「符の効力によっておまえの行方は巧妙に隠されていた。おまえを救えたのは、希沙良が自分にかけられた呪を遡行したためでもある」

「……」

「それもまた、我々の間にうまれる罪のひとつということさ」

最後に謎めいた表現を残し、窓枠から身を起こすと忍は部屋の出口へと向かう。

「あとのことは諒に任せてある。気分が悪くなければ、自由ヶ丘まで送らせよう」

「斎伽さん——」

あえて、その呼びかけを改めずに。

抑制した感情で静かに、十九郎は彼へ答えを返した。

「利用されたと見るか、信頼をいただいたと見るかは、個人の認識によると考えます。俺は」
扉の傍らで忍は足をとめ、それを聴く。
「結果的に成功を導いているかぎりは、あなたは正しい指揮者であるのだと……」
「……ああ」
十九郎の真意を一分の誤りもなく理解したように、斎伽忍はゆるやかに首肯した。
「出した結果で測られるのなら、本望だ」

「気がつけば、どっと眠いわね」
ホテルのロビーラウンジで、自分の前に二杯目の濃いコーヒーを運ばせておきながら冴子がつぶやく。
「おまえさん結構、呑気なのね」
上等すぎるふかふかの椅子に居心地悪く背中を沈めて、ぼそりと諒が答えた。
「よろこんでるわよ。満足できる結果だもの」
「さよですか」
「あ……。そうなんだ？」
亮介はぼんやりしていた頭を、冴子のほうへと向けて尋ねる。

一晩のうちにあまりに大量のことを考えすぎてそろそろ思考が飽和してきている。ふりかえれば毎回こんな夜を、必死な思いだけでくぐりぬけているのだけれど。

「そうよ。亮介ちゃんは違うの？」

「いや……あの、里見さんが無事で、みんなも無事で、ちゃんと事件が解決できて、よかったなって思ってるけど……」

あいまいに、亮介は語尾をとぎれさせた。

「けどね。確かにね」

横から小声で諒が同意してくれた。うん、と亮介は頷く。

「あたしたちが気に病んでたってしょーがないじゃないの」

「おまえ他人事じゃないでしょ」

「もしかして親のこと言ってるなら、あの連中もようやく隠居できて暇になって道楽三昧でおめでとうサヨナラって感じよ!!」

容赦なく、びしりときりすてて冴子は話を終わらせる。

「うーん……」

冴子には、それが偽らない気持ちなのだろう。亮介はなんとも答えられずに息をついた。蔵所のなかで見たことは口外無用という決まりごとだったが、その制約がなかったとしても、やはり人にはうまく説明しにくいものだ。あそこで自分の感じた、特別な慈愛のようなも

の……。

七瀬伊都子に、出会ったこと。

（断絶をもってこたえる）

対抗勢力の温床となるものはこの機会にすべて表舞台からとりのぞく、という考えで斎伽忍により排斥されたのは、実父の七瀬颯だけでなく母の伊都子に、それらの縁者すべて——早い話が、冴子以外の全員だ。

きびしい、などとは決して、亮介の立場で思えることではないのだが。

「あのね、もっときちんと言うと、父も母も一族を治める才能なんてないひとたちなのよ。才能もなくてやる気もないのに、まわりからの重力だけは強いポジションに縛りつけられてたひとたちよ。適性のないひとたちが自由になって、忍様ももっと自由になれるなら……それでいいわ」

真顔に頬杖をついて冴子が、補足のことばを口にした。ああ、なるほど……と亮介は少し、胸の重みを減らされたように思う。

「で結局、高浪さんて誰？」

オレンジジュースのストローを前歯で噛みつつ尋ねた諒が、ぎろりと冴子に睨みかえされた。

「なんであたしに訊くのよ。忍様に訊きなさいよ。こっちばかり除け者にして秘密のお話がい

ろいろとできたんでしょおおっ！」
「……どーして冴子さんの頭にはその価値観しかないですかね」
「うるさいわね仕方ないでしょ十六年これで生きてるんだものっ」
「十六分の一は俺もいたはずなんですけど」
「もう二年になるわよっ。情けないっ！」
あれ？　と二人に挟まれた位置で亮介はまばたきをする。なんだかものすごく、邪魔なところに居合わせているような。
「俺、帰ろうか？」
「あああああっ」
大まじめに亮介に囁かれて諒が悲鳴をあげる。
「帰られるのでしたらご一緒願えませんか」
低い、おちついた青年の声が背後から亮介に語りかけた。ふりかえった亮介は両眼をみひらき、安堵の笑顔になる。牙、だ。
「道中、私ひとりが相手では、忍様が寂しがられますから」
「ああ、わかった」
牙の無茶な口実に吹きだしながら亮介はすばやく席を立ちあがる。何ですか何ですかそれはと諒が騒いだが、じゃあそういうことでと亮介はかるく手を振り、長身の〈使〉とともにラウ

ンジを後にした。

「あのねえっ……！　そこでどうしてあたしに声をかけていかないかしらっ……！」

ワンテンポ遅れて冴子がはたと事態に気づき、ロビーを出る牙の背中にむけて唸った。あとのまつりである。

「そうは言っても我々には里見さんを無事に夏江さんとこに送りとどけるとゆー……」

ぼそぼそと答える途中で、しかし、忍が帰るということは彼らの話は終わったのだと諒は思いあたる。同時進行で冴子にもその考えは伝わったらしかった。

「行きます？」

「ちょっと待って」

諒のとりあげた伝票のはしを掌でおさえて冴子がするどい声を発した。

彼女の視線を追って諒も、ロビーの反対側を眺めやった。そして、眉をひそめる。

道者四人衆の、ひとり。今は一族各分家に対する情報調整にいそがしいはずなのだが。

……エントランスへ踏みこんでくる。

「悲しい性分の人が多いわね」

溜め息まじりに冴子がこぼす。

「まあね」

だれもが大人ではないのだから、やむをえないことかもしれない。諒は両手の指を組みあわ

せて席に座りなおした。移動のゴーサインを出すまでには、もうしばらくの時間を要するようだった。

さすがにまだふらつきの残る頭をひとつ振って、鍵をとりあげ、部屋の扉をひらいたとき。

その一瞬に、十九郎は歩みを凍りつかせていた。

同じ形の扉がつらなる廊下の、壁際。じかに座りこみ、乱暴に脚を絨毯のうえに投げだした姿で……年下の従弟が彼のことを待ちうけていた。

胸をつかれたのは、そこに希沙良がいたためではない。

希沙良のいることを察知できなかった自分自身が、信じられなかったのだ。

(気配が)

感覚にふれてくる波動がわずかに違っている、のか?

どうして。

「希沙良……?」

たしかめるように呼びかける。

伏せていた面をびくりと揺らしてから、希沙良のまなざしが持ちあがり、何かを追いつめる表情とともに十九郎のことを見返した。

爆発する、力を秘めている。
今にも。
「畜生……」
かすかな声で希沙良が呻いた。十九郎の左肩から腕までを染める、乾いた血痕へとその視線は向かっている。
「要領、悪すぎんだよ……てめえはさ……」
「ごめん」
十九郎が答える。手を離した扉が、その背後で自然に閉まった。
「心配をかけて、すまなかった」
「おまえはわかってない」
低く、魂の底からぶつける声を希沙良は投げつけた。
「わかってない」
責める、非難とは違う。
理解されようと焦れるものとは違う。
それは事実の指摘だった。
自らの知る、ゆるぎのない事実として、希沙良は彼に告げる。
「俺は狂ってる」

「……」

立ちつくした位置から動かず、十九郎は黙したままそれを聴いた。希沙良も壁際の、その場所から動こうとはしなかった。近づくのを拒んでいるのは希沙良のほうだった。厳然と、互いの間にはりつめる否定の意思は、希沙良の内から発している。

——不意に、心臓の中心をつきさす痛み。

「畜生……!!」

はじかれる勢いで希沙良は立ちあがり力任せに十九郎の肩をつかんでいる。爪がくいいるほど、深く。

「こんな目にっ……こんな目に遭っておまえがっ!! おまえのっ……!! おまえの生命が!! カード一枚みたいな使われ方っ……!!」

「希沙良……」

「どんな目的でもっ……おまえのためだったら戦ってやる。おまえがいなくても戦ってやる。おまえの負担にはならない。嘘じゃない。嘘じゃねえんだよ……」

「希沙良……希沙良、わかってる、大丈夫だ」

「……!」

くりかえす十九郎の声を耳元に聴いて、希沙良は自分自身の震える指がだれをいだきよせているかを認識する。こうして手の届く距離に在るだけで、もろく決意を崩して、すがりつく。

それでは無意味だと知っているのに。
「な……さけねえ、な……」
その左肩――布地にきざまれた銃創の痕に、一度、こめかみをおしつけて。
そして刹那のやすらぎから希沙良は自分の身をつきはなした。
戦えなくなるのだ。このままでは。
「俺に……用があればいつでも呼べよ。俺からは、しばらく会わない。おまえに電話もしない。思いださないようにする。けど忘れるわけじゃない。それでいいって言ってくれよ。頼む」
「……」
「おまえしか……本当は、おまえしかいらない。でもこのままじゃ俺が戦えなくなっちまう。俺が……俺が何なのか」
口走っていることばの内容を希沙良自身も完全にわかっているわけではなかった。
ただ、絶対に必要なことだと確信する思いだけはあった。
どうしたら、望むとおりの姿に……。
「希沙良」
十九郎がその名を呼ぶ。
なにかが原因となって希沙良の心に混乱を与えている。強迫観念となるほどに。それをひき

おこした元凶を知るすべが十九郎にはなかった。
「ひとつめから、ゆっくり話してくれないか。いくらでも、時間はかかっていい」
促す声に、希沙良は首を横にふった。
「おまえと一緒にいられない」
そのひとことはあまりに切実で、あまりに真実だった。十九郎は、それ以上を要求できずに唇をとざすしかなかった。
「……わかった」
「……」
満足とも絶望ともつかない、浅い溜め息をのこして希沙良はゆらりと背後にあとずさる。
「いつでも……おまえが呼んだら、行くから」
背中をむけて——。
立ち去ってゆく。
(そうじゃない)
彼の後ろ姿を見送りながら十九郎は、心の奥でつぶやく自分の声に気づいていた。
逆、だ。
(呼ばれるのは俺だ、おまえを護るのが——)
希沙良をまもるのが。

自分であるはず、だった。
かならず。
「！」
近づく気配を感じて十九郎はふりかえった。今度は、つたわる波動の持ち主を読みちがえることもなかった。たたずんでいたのは予測したとおりの人物だった。
遠野一真である。
「生還、おめでとう」
互いの関係には不似合いな祝辞を、ひかえめな態度で告げる。十九郎は低く、それに応じた。
「ありがとう」
「彼のことは気の毒だったね、十九郎」
さりげない口調で。
話題に選ぶ。……希沙良のことを。
「彼？」
「わかっているだろう。彼の精神に傷をつけたのは僕だよ」
まっすぐに十九郎のことをみつめかえしながら、一真はそのことばに現実の響きをもたらした。正面から、里見十九郎に憎まれるという体験を、存分にうけとめなければならなかった。

十九郎の双眸がしずかに見開かれるのを……一真は観賞する。
おそらくこのときを自分は待っていたのだ。
祈るような、敬虔な気分さえ胸に覚える。遠野一真はもういちど、同じ内容の告白をくりかえした。
「僕の、したことだ」

終章　残照

銀青色のパジェロを駆って――とはいっても運転席には牙が座ったが――六本木に私有するマンションの九〇七号室へと帰還した斎伽忍の表情は、けっして晴れやかなものではなかった。なにかを心にとめているようでもあったが、現在の健康状態においてゆるされるぎりぎりの限界まで力を行使したことの、当然の結果と見るほうが素直だろう。

「そうだね……斎女の『薫』に出会ったのなら、亮介の想像は正しいな」

新しい安楽椅子に身体をあずけて忍がつぶやいた。

牙の淹れてくれた熱いミルクティーのカップを両手でささえながら、亮介は返すことばをさがして沈黙した。なんだか簡単には別れがたくて、忍には休息が必要だとわかりながらも彼の部屋に邪魔をしてしまっているのだ。

「同じく、斎女の資格をもつものに『葵』がいる……これは『薫』の妹にあたるものだ」

「ああ……」

亮介は大きく溜め息をついた。

深く、示唆する忍の口ぶりだけで充分に説明をうけた気がする。

「そう――そうだったんですか」

「我々向きの呼び名をつかえば、七瀬塔和子という名がある。純粋な血統のうまれではあるが――」

肘をついた左手の指に顎を触れさせた姿で、ふと忍はその蒼色に透ける双眸を細めた。

「いや、濃すぎる血の弊害というべきだな、うまれついて子を孕む機能がなかった。だから僕の母親とは異なる運命を辿ることになった。……どちらが幸運であったかはわからない」

忍と冴子にとっては叔母にあたる人物である。亮介はどうしても言葉少なになってしまう。

「僕も、おそらく似たような存在になるだろう」

こぼれた独白のように忍が言う。傍らに控える牙が、ひっそりと彼のことを眺めやった。

「僕自身によって生命をつくりだしてはならないだろうからね」

「……」

自分の子孫というものや、血の重み、などは亮介に実感のないものだ。忍がそれをどんな想いで口にしたのかも、容易には読みとれなかった。

「薫さんは……」

その名前をつかうと、どうしても別の女性をおもいだす。亮介は一度、尋ねる声をくぎっ

た。

「伊都子さんは、俺たちに協力してくれて、だけど自分の妹とか、旦那さんとかがそういうことを用意してるのは知っていたんですか」

「彼らが動いたのは僕が一度死んだ者だからだよ」

忍はかるく肩をすくめた。

「僕が今、どれほど力脆いものか、いかに魔性にとりこまれた魂をもつものか、知覚しうるのが母というものらしい。彼らへの情報的支援がなかったわけはない。人の内には、いつでも矛盾と混沌が渦巻いているよ」

「そう、ですか」

悲しく思いながら、きっと彼のことばが正しいのだろうと亮介は頷いた。

ひとつの気持ちでわりきれないことが、いろんなところで、消えずにありつづける。

どうしても。

「そういう……人間、のほうが、〈妖の者〉より、真正面から見たら怖いと思いました。なんだか……どうしようもないところがあるなって」

まじめにつぶやく亮介に、斎伽忍は興味深そうなまなざしを向けたが、自分ではなにも答えずに牙を見返った。牙も、この問題について語れることはないというようにそっとかぶりを振っただけだった。

＊＊＊

「泣いているの？」
彼を見るなり眉をひそめた咸月呉葉のひとことは、こんなときでも毅然とした態度につらぬかれていた。
「いいや」
十九郎は、ゆっくりと口をひらく。
「泣けるような人間じゃないんだ」
「馬鹿ね。心の内側だけで不幸になっていてもあたしみたいな相手にしかわからないのよ」
「本当に、そう思うよ」
互いに無事な姿で再会をはたしても——。
不思議と、それ以上に、語りあう言葉がうまれなかった。
鈍い切り口の、だからこそ痛みの烈しい傷が十九郎の心にあることを呉葉は感じとっている。だが、その苦しみが何によるものか問いただす必然は、現在の呉葉にはないのだった。
今回の一件で呉葉のうける処罰について、十九郎には子細に知る権利があったが、それは必ずしも呉葉本人の口から聞かねばならないものではない。

「あなたの生きている姿くらいは確かめたかったのよ」
呉葉は足元へ顔をそむけて、自分でも建前と思えることをいう。
「ここにいるうちに間に合ってよかったわ」
タイミングとしては彼女のいうとおりだった。水沢諒たちのいるロビー階へ降下するエレベーターの前に十九郎が立ち止まったとき、呉葉の乗った一基がちょうどこの階に辿りついたのだ。
ひとりきりで乗りこんできたエレベーターの奥へと呉葉は身をしりぞけて、がらんとした箱のなかに彼を迎えいれた。
下のロビーでは今、つきあいのいい明石川耕宇がいらいらと足踏みをしながら待っているはずだった。そういう、お人好しなところは悪くない男だと思っている……。
扉がとざされて降下が始まっても、しばらくのあいだ、静寂のみが場を支配した。
そのしずけさもまた、不快なものではなかった。やむことなく、いつまでもつづくものならば。
けれど。
「……」
限られた時を気にかけて呉葉が唇をひらこうとした瞬間。
「元気で」

ほんのわずかな差で先に彼女へ告げたのは、十九郎のほうだった。
いたわるように。
はっ、と息をつめて呉葉は彼のことを仰ぎ見る。するどく、誇りたかい瞳のまま……約束する。
「あなたとは二度と会わないわ」
会ってはならないだろうと、わかっている。
つらい思い出になる。きっと。
「だから一度だけ優しくして」
堂々と命じる、その我が儘なほどの頼み方に十九郎は苦笑したようだった。なぜか懐かしく、悲しげに。
「いいよ。……優しくする」

＊　＊　＊

「けがされないことに、それほどの価値はないだろう……。そうは思わないか？」
閉鎖したブラインドの隙間に指をふれさせながら斎伽忍はそう問いかける。背後に立つ、無口な〈使〉にむけて。

窓の下には、信号の変わりめを逃さぬために走りだす、崎谷亮介の姿がある。
「事実、僕の見るものたちはいつも、崩された先に立ちあがる力をもつ。崩されないことではなく……」
主君のことばに、よけいな雑音は挟まずに。
そのときを、牙は待っていた。
「おそらく……」
ふっ、と。流れがとだえる。
すべりこむように眠りに墜ちる忍の身体を、その大柄な腕で牙は支えた。
白い膚と。華奢な、線の細い背中を抱いて。
（今のあなたは、何も感わずにいるといい）
かすかな切望が、牙の内にはひそんでいる。
ここからの道のりには、また、どれほどのかなしみが生まれてゆくものか。
さだめられた運命はない。
ひたすらに、天が動いてゆく。
（では、あなたがたはいったい何度崩され、そして何度たちあがれば——終われるのですか）
（伽羅王）

もたらされる、灼熱の夏を前に牙は双眸をとざした。
このときだけは、闇より瞳を逸し、彼の眠る静謐をまもりつづけることを……考えていた。

——おわり——

あとがき

「これがないと生きていけないと思うものは？」

第二期がスタートする前に、メインキャラ全員にいろいろなインタビューをするという企画をコバルトの特集記事でやらせてもらったのですが、この質問はそのなかのひとつです。

結果は、亮介が悩みに悩んで回答なし、希沙良が「水と空気」、里見は「自分の意志」、亜衣ちゃんが「希望」、諒が「心の太陽」、忍さんはなんだかわからないけど「愛」、冴子ちゃんが「忍様」……でした。

たとえば今、希沙良に同じ質問をしたら、もう同じ答えは返ってこないだろうなと……絶対に本気で真顔でひとりの人間の名前をいうんだなと、わかる。

希沙良でなくても誰にでも、そんなふうに変わる答えもあれば、永久に手放さない答えもある。ある、はずだと信じて、だからそこに嘘だけはつかないでくれと祈りながらずっと彼らとつきあってみる。「どう変わっていくのか？」「なぜここだけは変わらないのか？」亮介たちが必死に必死に考えてもぶつかってもこれはものすごく難しくて、へたをすると生きるって人間って本当って何だ？　なんてあてのないことを考えるのと一緒で、もちろんそんなものに初

めから絶対唯一の定義なんか決まっていたらつまらない。

茫然として途方に暮れる。眠って考える。起きて考える。ひとの想いにゆさぶられる。頭で考えることと心でわかることと、知ることと、やってみることと、実現することと、諦めることと諦めきらないことを、ぐるぐるくりかえす。

作者に助けられずに自力で走るひとたちに、私から何ができるかといったら、彼らに嘘をつかれないこと、嘘があったら見破ること、一緒に泣くんじゃなくて容赦ない目でみぬくこと。そう信じるのも、そのうち間違いだったと思うときがくるかもしれない。

けど、もしもそのときの百パーセントの本気で戦っていれば、後になっても「いや、あれは本心じゃなかったんだ」なんて言い訳はしたくならない。

自分は何をしているんだ？　と何度も愕然と考える。

大勢の人との職業人としての約束を破って、ひととしての約束も破って、自分で組んだ戦略も潰して、それで期限内にできあがらないんだからおまえもうプロじゃねえよと思う。

自分は何を書いてるんだ？　と一瞬わからなくなることがある。

考えて考えた自分の頭のうえをとびこして、そんなものが書けると思ってもみなかったものが文章になって目の前におちてくる奇跡の瞬間というのがあって。

この「わかんなくなる一瞬」が、幸せで、死んでも捨てられない。

結局、我が儘を通しているだけなんだな。うん……。……ごめんなさい。

まあ、そんなわけで後編です。

うぬぬぬ、前編であとがきを書いたのはよかったのか悪かったのか……。

第二期開始についていうべきことは、なんかぜんぶこないだ書いてしまったので……実際に後編を読みおわったところでまた前編あとがきに戻っていただければ嬉しいなと。（おいおいおい……）

ともかくこうして、オーラバスターを書きつづける長い日々がこれからも待っています。やりたいことは沢山ある。それを、ひとつずつやっていきます。ときどき「私が亮介たちの齢を追いこす前に早く終わらせてくれ！」みたいなお手紙を貰うこともあるのだが、あーのーなー、断言しよう、大丈夫だ!!　いつまで読んでもいいのだ!!　小説というものは読みたいひとが読みたいときに読みたいところまで読めばいいのだ!!

……いやつまり、そう素早く速やかに完結させるなんて無茶なことは無理だ。そればかりは本当にごめんなさいということだ……（泣）。ごめんよ。

でも、千里の道も一歩から、なので。

一冊ごとに、大切に書いてゆくからね。

それで足りなければ、足りないぜと大声で言ってやってくださると、もっともっとがんばれ

るのだ。

懲りずに読みつづけてくださる人には、本当に、有り難く申し訳なく心強く思っています。こんな私ですが臥薪嘗胆してゆきたいです。どうかよろしくお願いいたします。

今回いつもと少し違う感じのあとがきだなあ。どうかな？（あとがきのページ数があまりとれなかったとゆーのもあるけど。……しかしこれは里見の影響だな。きっとな……）

最後に。この一冊を、気がつけばすでに長年の同志（と勝手にいわせてください）であった担当編集者・川野俊彦氏に——こんな一冊では本当は全然足りなくてつらいのですが、捧げさせていただきます。

酷い目にあわせた記憶ばっかりで（でも酷い目にあわされた記憶もあるな）なんだかどうして償っていいかわかりません。けれど、私たちは、かなり強力な、嵐を呼ぶチームだったのではないかと自負しています。できるならば、今後は立派な好敵手でありたいです。

どうもありがとうございました。

若木未生

わかぎ・みお

1968年12月2日、埼玉県生まれ、都内在住。射手座、A型。1989年4月『AGE』で、第13回コバルト・ノベル大賞佳作入選。好きなものはマンガと音楽と猫。大方の予想どおり早稲田大学文学部を中退し、卒論を書きそこねたが、その内容はいずれ小説の題材に活かすことをもくろんでいる。専修学科は日本史。コバルトシリーズに『天使はうまく踊れない』『セイレーンの聖母』『十字架の少女』『迷える羊に愛の手を』『炎獄のディアーナ(前編)(後編)』『天冥の剣1～4』『エクサール騎士団1～3』『XAZSA Ver. 1～2』『グラスハート』『薔薇とダイナマイト』『星を堕すもの(前編)』などが、また単行本に『天使／来撃』がある。



星を堕すもの(後編)

COBALT-SERIES

1995年10月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　若木未生

発行者　若菜正

発行所　株式会社集英社

〒101－50
東京都千代田区一ツ橋2－5－10
(3230) 6268(編集)
電話　東京 (3230) 6393(販売)
(3230) 6080(制作)

印刷所　株式会社美松堂
中央精版印刷株式会社

© MIO WAKAGI 1995　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本はご面倒でも小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-614115-9 C0193

コバルト文庫

〈好評発売中〉



術者VS妖者の凄絶な戦いが、今…！
大人気のアクション・ファンタジー。

若木未生の本

〈ハイスクール・オーラバスター〉シリーズ

イラスト／杜　真琴

天使はうまく踊れない

セイレーンの聖母

十字架の少女

迷える羊に愛の手を

炎獄のディアーナ(前編)(後編)

天冥の剣1~4

星を堕(お)とすもの(前編)



コバルト文庫 スーパーファンタジー文庫

「ノベル大賞」「ロマン大賞」

募集中!

集英社コバルト文庫、スーパーファンタジー文庫編集部では、エンターテインメント小説の新しい書き手の方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人賞の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、両文庫の読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、自分の才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!

〈大賞入選作〉
正賞の楯と副賞100万円(税込)

〈佳作入選作〉
正賞の楯と副賞50万円(税込)

ノベル大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙95～105枚。
【締切】 毎年7月10日(当日消印有効)
【応募資格】 男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt 12月号誌上(および12月刊の両文庫のチラシ紙上)。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】 〒101-50 東京都千代田区一ツ橋2－5－10 (株)集英社
コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる「ノベル大賞読者大賞」(大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円)の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙250～350枚。
【締切】 毎年1月10日(当日消印有効)
【応募資格】 男女・年齢・プロ、アマを問いません。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt 8月号誌上(および8月刊の両文庫のチラシ紙上)。大賞入選作はスーパーファンタジー文庫もしくはコバルト文庫で出版(その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします)。
【原稿宛先】 〒101-50東京都千代田区一ツ橋2－5－10 (株)集英社
コバルト編集部「ロマン大賞」係
★応募に関するくわしい要項は隔月刊誌Cobalt(1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売)をごらんください。